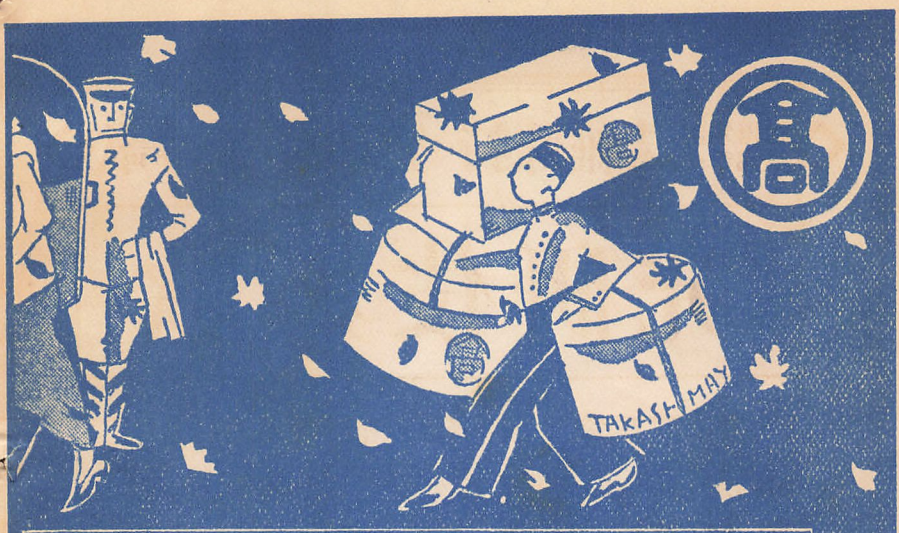
忠臣蔵

吉村春峯 編輯



お早く・お手軽に・便利に

お買物の調ふ……高島屋

配達は極めて迅速に

各種品揃ひ

一階　化粧品　食料品　傘　履物類
二階　木綿洋反物　文房具　玩具　運動具　靴鞄類
三階　呉服　縫着尺類　廣帶　片側帶　染物部　仕立上品
四階　洋服　雜貨　貴金屬　美粧部
五階　マーケット賣場　家具裝飾部
六階　美術部　支那部　催物場
七階　日用品　家庭用品類　食堂
八階　寫眞部　展望場　お子供遊場

お急ぎの冬のお仕度は……高島屋で

大阪　高島屋

◇歌舞伎劇研究の特殊雑誌 限定出版 限部千一◇

歌舞伎研究

——第五輯内容——

表紙　芝居小屋の圖（亨保期肉筆）
口繪　毛剃犯科帳
口繪　能以前の屋外舞臺面
口繪　浪華役者繪集の三

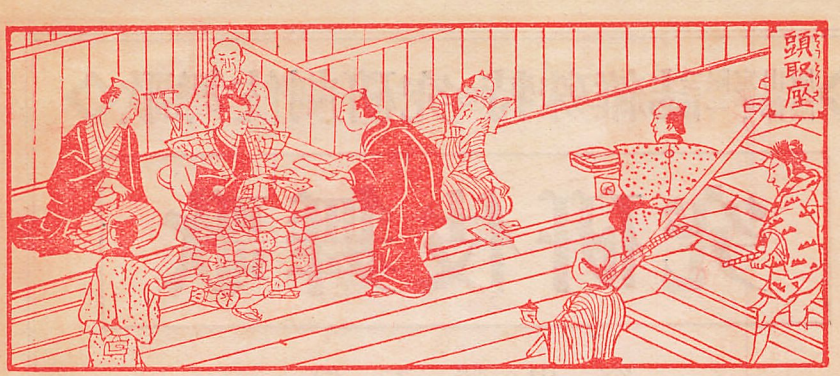
金平と元祖團十郎の荒事　水谷不倒
能以前の屋外舞臺　高野辰之
淨瑠璃解題（四）　黑木勘藏
土佐少掾橘正勝　三田村鳶魚
芝居年中行事　木村錦花
狂言作者筆蹟鑑　笹川臨風
對峙せる芝翫と彦三郎　河竹繁俊
歌舞伎脚本解題（五）　伊原青々園
毛剃の研究　渥美清太郎
能舞臺より歌舞伎舞臺へ　永見德太郎
年代記による歌舞伎狂言外題索引　山崎樂堂
附錄　劇場一觀顯微鏡（古書複製第五回）　吉田暎二

歌舞伎研究　第一輯　再版出來

一部金壹圓　送料四錢

東京市京橋區木挽町歌舞伎座内
歌舞伎出版部發兌

會員に限り一年
會費金拾圓五錢



第三輯　中

表紙・カット　大塚克三

口繪寫眞

◇吉右衛門の「石切梶原」◇吉右衛門の「木内宗吾」◇時藏の妻おさん◇友右衛門の饅かき金助◇三津五郎の「文屋」と「喜撰」◇「風鈴蕎麥屋」の舞臺面◇吉右衛門の蕎麥賣又七◇友右衛門と時藏の素顔◇樂屋の吉右衛門

吉右衛門の佐倉宗吾と石切梶原　木谷蓬吟　二

おやぢになるな吉ちやん　高安吸江　四

吉右衛門の型に就て　林久男　六

主觀的の『型』　入江來布　九

非凡の凡人　額田六福　一二

吉右衛門覺書　竹内勝太郎　一四

諸家の中村吉右衛門に就ての感想　五十有餘名家　一八

吉右衛門小論　高原慶三　二七

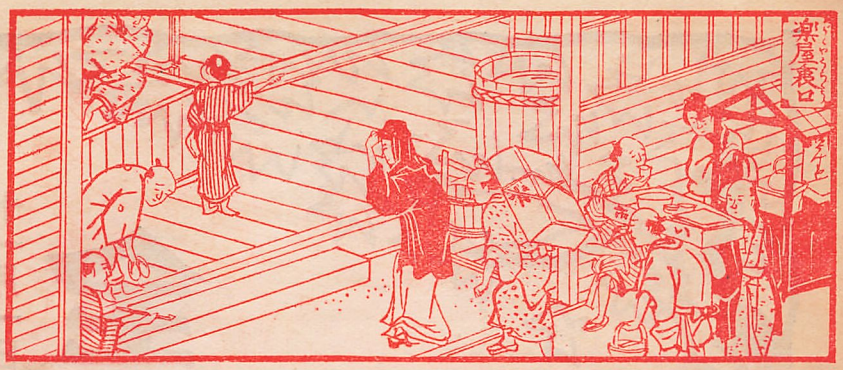
舞臺の大きいといふ事　石割松太郎　二九

「白金坩堝」の持主—吉右衛門と井上正夫—　富田泰彦　三一

播磨屋素描　楠田敏郎　三二

吉右衛門昔話—その他—　並山拜石　三八

偶感三題　南木萍水　四一



座　吉右衛門號

吉右衛門寸感　國枝史郎　四三
吉右衛門小論　山上貞一　四九
吉右衛門と歌舞伎劇　川尻清潭　五二
吉右衛門に就ての私の感想　落合浪雄　五三
梅玉の二つの印象　川尻清潭　六〇
◇佐倉義民傳（芝居見たまゝ）　高橋茂登多樓　三三
◇「文屋」と「喜撰」（上演臺本）　四四
◇梶原平三譽石切（芝居物語）　朝生順三　五四
◇十月中座の印象（梅玉追善興行）　油屋久二　六二
◇釣女（上演臺本）　六四
◇風鈴蕎麥屋（芝居小說）　長島黎夢　六九
中座霜月興行役割一覽　一三
「佐倉義民傳」の劇評　三七
劇壇漫語　けいざう　五一
喫煙室　蓼雨生　九二
編輯後記　姥谷生　九四

十一月一日より七日まで　七階

全國銘仙大共進會

主催　日本織物新聞社

一日より七日まで

婚禮衣裳陳列會……三階

紳士用澁好衣裳陳列……三階

新エリット式
モスリン着尺地宣傳大賣出し
一日より十日まで　四階

安く賣る店
買ひよき店

大阪堺筋

白木屋

電話（代表）本町三〇番

中座霜月興行の

一番目「佐倉義民傳」……三世瀬川如皐氏作

吉右衛門の木内宗吾

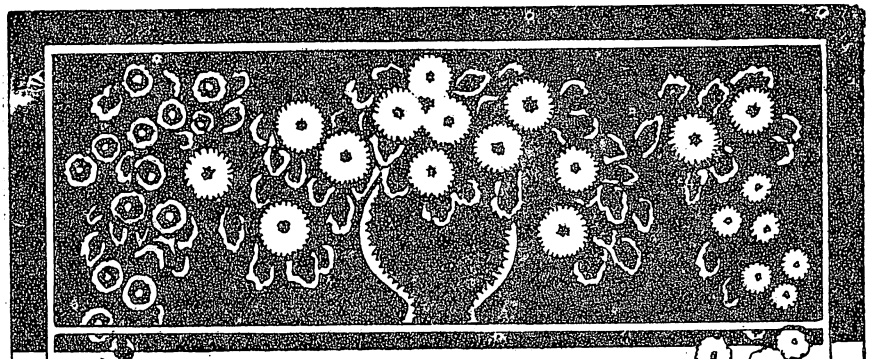
遥天で一身を捨てて直訴するところ

毛色の變つた
ツムヂ曲りの新聞

大阪毎日新聞

芝居とキネマガ
大呼もの〻面白い日曜附錄

發行所　大阪市東區大川町四十七番地
電話本局　七〇五・三二四二　六〇〇・二六一〇番



山の紅葉の色とりぐに
自然は今冬への用意に
いそしんで居ります

冬の御支度は
大丸にて

夜間營業　　休業曜月

大阪　大丸呉服店　心齋橋

は中村時藏の宗吾妻お さん（上）

中座霜月興行の「佐倉義民傳」の中から

助金のき搔鰻の門衛右友谷大は（下）

中座霜月興行の「風鈴蕎麥屋」の中から

中座籍月興行の所作事

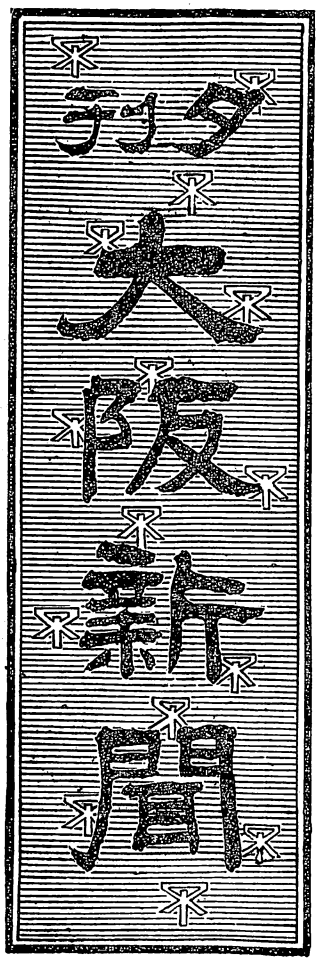
「撰喜」と「屋文」内の仙歌六

何れも阪東三津五郎の入神の舞踊です

芝居のお好きな皆様はキネマと劇博へ!!

秋晴れのうらゝかな海邊にキネマと劇の國が現れました。お芝居や映畫を御覽になる前に先づ我社主催の『キネマと劇博覽會』を御觀覽になれば一入興味を添へるでせう

會場――堺　大濱　會期――十一月末日まで



毎水曜日にはキネマ附錄、土曜日には家庭附錄の

二大附錄を添附せる

夕刊 大阪新聞の御愛讀を乞ふ

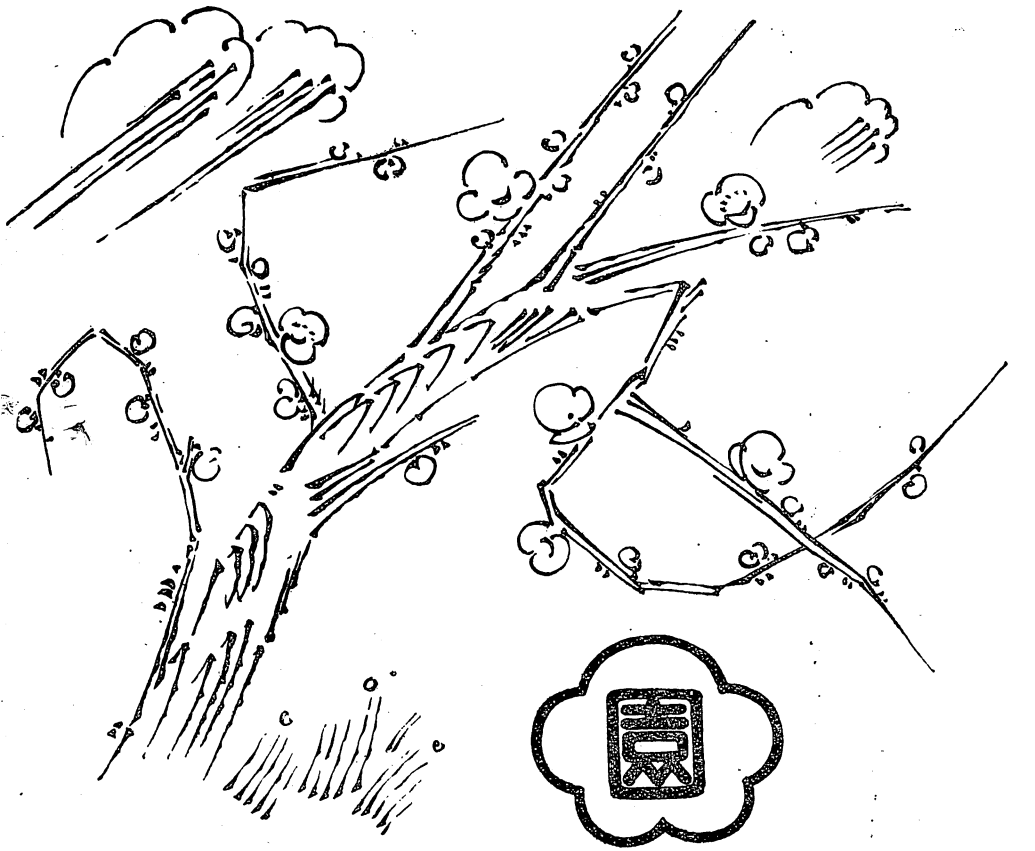
休無中年

壹ヶ月　金五十錢

夕刊 大阪新聞社

本社　大阪市西區土佐堀船町一七

支局　東京・神戸



梅園

お芝居での御食事は食堂にておかへりには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを

中座食堂

本店　太左衛門橋北一丁
電話南六二二七番

中座霜月興行の

「風鈴蕎麥屋」作氏堂綺本岡 目番二

吉右衛門の蕎麥賣又七と新十郎の橋番源兵衛

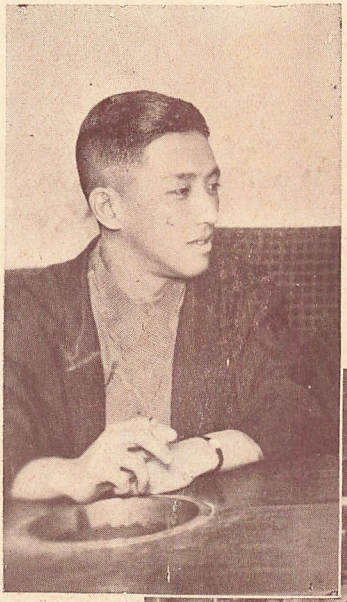
……味長いなまの巧りの語物で舞河の夜月の秋仲

中座霜月興行の

二番目「風鈴蕎麥屋」……岡本綺堂氏作

吉右衛門の蕎麥賣又七

盤餐を手にしたこころ吉右衛門でなくてはの麥でしょう



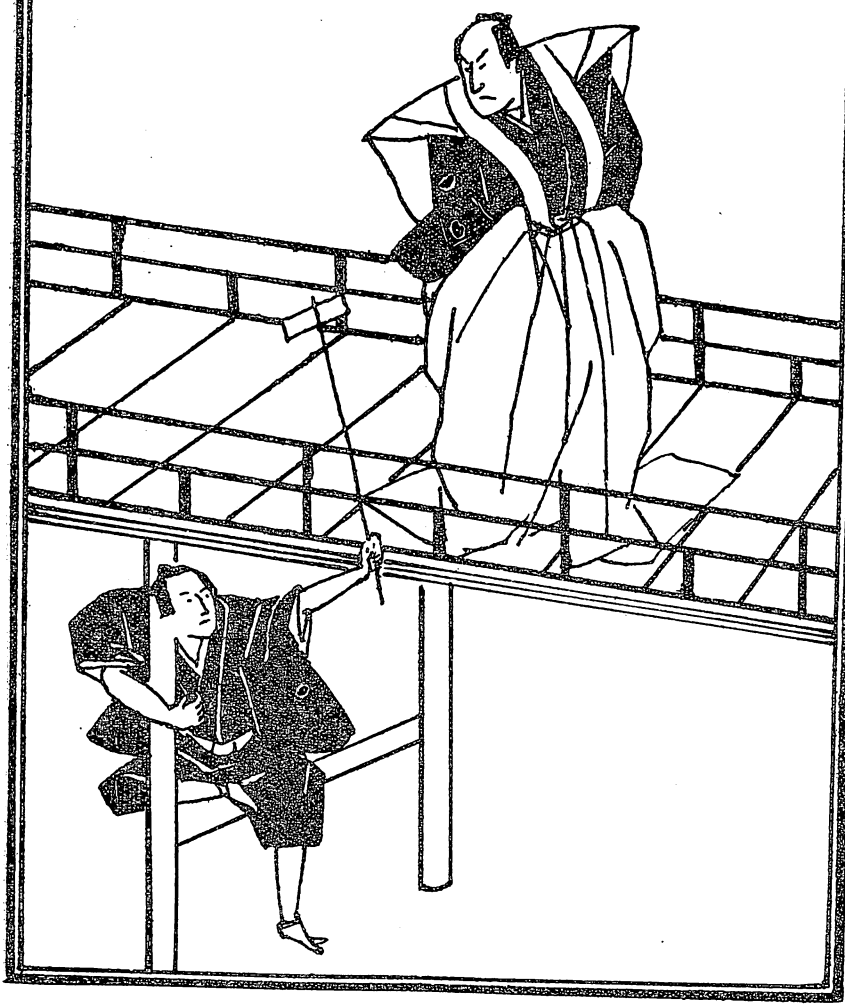
（上）　中村時藏氏の情味のある素顔です。
（下）　大谷友右衛門氏の瀟洒な近影です。

樂屋の吉右衛門氏

緊張したる舞臺から離れてホッと一息の間も
錦繪に見入つて研究に餘念のないところ

酒中

吉右衛門



吉右衛門の『佐倉宗吾』と『石切梶原』

木谷蓬吟

吉右衛門が中座へ來る、例によつて無人芝居だと思ふ。

然し、熱と誠と執着の上に立つ吉右の藝術に、壓迫的な痛苦美を味ふことを悅ぶ私は、あの寫樂の繪を見るやうな古雅な三津五郎、精力其ものゝやうな熾烈な若さを持つ時藏と、この三人を一つ舞臺に併せ見ることに由つては、はるかに、歌、仁、鴈の三巨頭合同以上に鑑賞慾をそゝられる。

今、新聞を見ると、吉右は佐倉義民傳と、石切梶原と、風鈴蕎麥屋とを持つて來るといふ。宗吾は、熱と誠と執着を持つ彼の藝格にピッタリと適つてゐるから、恐らく當代に類の無い絕作を見せるだらう。石切梶原は又別な見地から、これを得意とする鴈治郎のと比較して、大に興味を惹くに違ひない、風鈴蕎麥屋は吉右が最近に持つ藝境の新味を知る上に、これ亦恰好の試金石であらねばならぬ。今度の藝題の撰擇は先づ合格點を與へてよからう。先年の愚を繰返さなかつたことを、吉右の爲にも見物の爲にも又興行主の爲にも悅んでよい。

宗吾の狂言は、誰れも知る通り嘉永四年に三世瀨川如皐が、初代文庫の講談を材料にして小團次の爲に書き卸したもので、その後小團次の得意藝となり、降つて團藏の專賣物となり、今は吉右衛門の手に握られてゐるのである。私は團藏のも見た、齋入や多見藏のも見たが、吉右のは今度が初めである。

三幕であるから、多分、渡し場と、内と、直訴とであらうが、渡し場が一等好きである。宗吾も、内よりはこの場が難かし

いに違ひない。それには只甚兵衛ごの呼吸一つが生死の鑰を握つてゐる、甚兵衛役者が旨くないこ、この場の空氣はめちやくちやに壞されてしまう。

淨瑠璃の方では俗に『荆棘の宗五郎』こ稱する『花雲佐倉曙』の宗五郎住家の段が、一般に演ぜられてゐる。嘉永六年九月、佐久間松長軒こ登與島玉和軒の合作である。佐久間松長軒こは、義太夫以後の名人こ稱せられた三代竹本長門太夫のことで、玉和軒は竹本多麿太夫のことである。長門太夫は江戸興行中にこの淨瑠璃を作り、自分は宗五郎の内を得意物こして幾回こなく語つた。冒頭に『荆棘云々』の語があるので、一般に『荆棘の宗五郎』こ言つてゐる。後にこれを增補して『儀作切腹』こ云ふのを五代目竹本彌太夫が改作新節章を附して出した。一時は『本藏下屋敷』や『壹坂』なごの改作物こ、肩を並べて非常に流行つたものである。これは宗五郎に儀作こ云ふ眞があつて、切腹して聟を闘ますこ云ふ一齣が加へられてゐる。

◇

石切梶原の狂言は、享保十五年二月、道頓堀竹本座で上演の淨瑠璃『三浦大助紅梅勢』の三段目に據つたもので、作者は文耕堂こ長谷川千四の合著。

淨瑠璃五段物のうち、三段目が最重要の地位に置かれてゐるが、總て屋内の出來事を描いて居る中に、この三段目（鎌倉星合寺の場面）こ、孃景清の三段目（日向島）こ、襤褸錦の三段目（大晏寺堤）こは、俗に外部の三段目こ稱して、場面を屋外に採つてゐる皮肉曲こして珍重されてゐる。この十一月興行に、東では鴈治郎が大晏寺堤を演じ、西では吉右衛門が星合寺を出すこいふのは、期せずして『外部』の三段目の競演こなつたので、ちよつこ面白い。

原作によるこ、梶原は星合寺の馬場先で、大庭俣野に茶の湯をすゝめる條がある。『この馬場先の松風を釜のたぎりこ聞きなして、持參の茶箱澁くこも御兩所へ差上げん』こ、茶の手前をして、北野の大茶湯に擬した脚色であつたのを、酒宴の席こし、歌なご詠むやうに變へたのは、例の芝翫（梅玉歌右衛門）の細工である。星合寺の馬場先を、お宮作りにして玉垣なご見せたのも、やはり芝翫の仕事である。

芝翫の競爭の對敵である璃寛は、夙くから石切梶原の上演を目論んで居たが、たゞ大場俣野の兩役に扮する適當な役者が無かつた爲め躊躇してゐた。それは、大場俣野は當時梶原より遙に身分の高い大名であつたから、芝翫は自分と同じ位の立者に持つて行かねば、舞臺の情味に副ひ得ないと考へてゐたのである。芝翫は、そんな考慮なしに、在り合はせの役者に嵌めて、璃寛の先を超して上場してしまふた譯である。

この芝翫こそ梅玉中村歌右衛門は、我が劇史上稀有の名優として、上方劇壇の爲に氣を吐いて、六十一年の舞臺生活を辭しはるかに蓮華座に乘込んで行つたその最後の舞臺は、實に天保九年五月の『中座』であつた。そして其掉尾の狂言は『石切梶原』であつた。

歌右衛門の石切梶原が、遺流に傳へ〳〵て今の鴈治郎の梶原に辿り着いたものか、否かは知らぬが、型の上にも心持の上にも、非凡な技倆を見せてゐる。同じ中座の舞臺で、鴈の踏み締めた檜板の上に跨つて、吉右はどんな演出を以て好劇家の耳目を驚かさうとするのであるか。――――待たるゝものは其打ち下す一刀の切れ味である。（十月廿二日）

おやぢになるな吉ちやん

高安吸江

その晩年には澁い洗練された藝を見せるまでに、圓熟した、故中村歌六、卽ち先代時藏も若い頃、殊に朝日座なんかに出て居た時代には達者な腕にまかせて、濃厚で巧緻な、時にはケレン澤山の珍藝こまで冷かされた位の技巧で、多方面の役々を

まくこなし、當時の見物を面白がらせたものであつた。

吾が吉右衛門君が果して何れの點を、お父さんから受け繼いだかは、頗る疑問であるが、今日まで私の眼に映じた處では、彼は是まで先代と殆ど全く別途を歩んで來たやうだ。彼は先づ故九代目市川團十郎を目標として進み、そして大体に於てそれに成功した。

それは加藤などを見ても明かである。尤もこれ等の役も、始めは彼自個よりも、寧ろ堀越の衣鉢を傳へ得たる彼として、私共はその中に九代目の片影を發見して喜ぶに過ぎなかつたのであるが、團州の如き悠揚迫らざる偉大さを出すべく、吉はあまりに神經過敏である。しかしこの小心なることが却て團より得たる澁味に、さびし味と一種のあはれさとを加へ、こゝに彼れ獨特の一領域が作りあげられた。先年の逆櫓などでも、私が其晩年に見た九團目の演り方を主とする外、チョイ〳〵彼が個性のひらめきとして別趣の味を見せた。

殊に毒饅頭に於ては、憔悴した清正の慘たらしい末路をあらはすのに、彼の柄が尤も適したことを示して居る。そこで彼が此後進むべき道は、更にこの沃野を開拓してより豐饒にし、そこにより完全なる自個を建設することであると思ふ。

終りに、彼のために呈すべき苦言が二つある。

一ッは彼があまりに型に捉はれ過ぎる傾向を有つことで此れから解放せられるやう今少し大膽であるべき努力が望ましい。他は彼の風貌、殊に其後ろつきなどが漸々先老のおも影に近づいて來たことで、是は年のせいだから、已むを得ないとすればそれまでゝあるが、いつとなしにその長所短所を兼ねて、お父さん生寫しになりはせまいかとの杞憂を、私共は抱かされるのである。彼は始め九代目を學んで自個を見出し、終にこれから離れんとして居る——或はもうはなれたかも知れない。それもいゝが、私の勸めたいのは、彼の贏ち得たる新しい基礎をしつかりと踏まへながら、改めて九代目に歸ることで、これが傳統から逃れるのに尤も都合のよい方法であるだらう。

吉右衛門の型に就て

林　久男

吉右衛門は型の爲に型を演じて居るのでは無くて、その「型」に生命を盛つてゐる。自分の頭で役の性根をすつかり解釋しそれを一度自分の心の中に融かして、それを藝術的の樣式に築きあげ、盛りあげてゐるのである。

そこには創造的の大なる精神がはたらいて居る。從つて彼が扮するどんな役にも、それ〴〵の人間性がにじみ出て來てゐる九代目畑のものを演じても、決して「型」の爲に型を演じて居るのでも無く、勿論、空虛なる模倣でもない。

團菊が明治の梨園に於ける國寶であつたとすれば、吉右衛門と六代目は大正の梨園に於ける國寶だと云ひ得るかも知れない併し團十郎と吉右衛門の藝と、五代目と六代目との藝とは、類似の系統に屬し乍ら、又可なりの相異點がある。それは、一方から云へば、時代的背景の相異とも云へる。

若し吉右衛門の藝が九代目團十郎の藝に比して遙かに神經質であると云ふならば、近代精神その物がこの數十年の間にそれだけ神經質になつて、その背景のうちに育つた吉右衛門の藝をそれだけ神經質にし、その彼れの藝に時代は自らの好尚を求め共鳴を感じてゐるものとも云へないことはない。

故に、如何に大歌舞伎の傳統的の型に依つて演ずると云つても、吉右衛門の型は、もう團十郎のものでも無ければ、中車のものでもない。それが現代の吾々の心を突いて來るのである。同じ所謂活歴物でも、彼のものは、盛遠でも、光秀でも、盛綱で

も清正でも、熊谷でも、乃至は毛剃であつても、幸四郎や中車のものに見られない内質的の滋味のあるのも其の爲であらう。

吉右衛門の藝には遊戯的素質が少ないといふ評をよく耳にする。

菊五郎などに比べても、さういふ事は云ひ得るであらう。又七段目の由良之助に於て前半部よりも後半部の方が概がいゝのも、或はそこに原因があるかも知れない。併し吉右衛門の藝の多くに附き纏つてゐるぎこちなさや、堅苦しさや、神經質なごは、決して彼の素質の無器用や、遲重や、センチメルタリズムから來るのではなくて、寧ろ彼の藝の鋭さと、強さと、熱情とから來るものであることを見のがしてはならない。

彼れの演藝は、謂はゞ張りきつたる絃である。切迫つまつた刹那々々の生命の引き續きである。それが彼れの藝をして、時には窮屈にし、粗野にし、又はぎこちなくするのであらう。

彼が稀に演じた新しい喜劇物などに於て、如何に味はひ深い有情滑稽を示してゐたかを忘れてはならない。勿論彼れの喜劇的人物の特長はげら〳〵輕く笑はせるたちのものではなくて、云はゞ小さんの藝に見るやうな、粗朴なる純情の底に、盡きぬ滑稽味をにじみ出させるやうな特長をもつたものである。

併し、彼が寧ろ喜劇役者になつた方がいゝなどいふ頓狂なお說は、自分は勿論齒牙もかけたくない。

彼は大なる天稟の持主であると共に、大なる努力の勇者である。彼の演ずる人物に、他の追蹤をゆるさない深刻なる悲壯美のにじみ出て來るのもその爲である。

俳優としての柄に於ても彼は天性さう圖拔けて立派なものを持つてゐるわけでもない聲に於てもさうである。併し現在の彼ほどに形の美と調子の美とを兼ね具へてゐるものは尠くない。それも皆彼れの超人的鍛練によつて磨き出された光であり、吹き込まれた音いろに外ならない。

何よりも此の優に於て驚嘆すべきことは、これほどの器用な天品をもつてゐながら、あの小手先の達者な父歌六の惡い處に

は一寸も染まつて居ない點である。眼にあまる小細工などを決してしないことである。そこに彼の强い藝術的良心と、藝術の本質に對する明かなる理解とが見られるのである。

さういふ明かな理解力と、精練された演出的技能とに於ては、吉右衛門や菊五郎などは、蓋し泰西の所謂名優に比べても、まさるとも決して劣る所はないと自分は私かに信じてゐる。

繰かへして云ふが、吉右衛門の藝に於ける最大の特長は、演者のたましひで各の人物の人間性を活かす點にある。鋭さと熱情より生れて來る緊張と悲壯の美である。

例へば團七九郎兵衛が、義兵衛に毒づかれて將に勘忍の緒の切れようとする刹那、ふと、手に觸はる小石を袂に忍ばせる瞬間の、あの凄いやうな鋭さと緊張とはどうであらう。又、佐野の次郎左衛門が、廊下の障子こしに戀敵桜之丞の姿を見た刹那の驚愕と、怨恨と、執着と、絶望との一瞬の複雜なる感情の變化のあの表現力はどうであらう。其の外、松右衛門が權四郎に對する名のりの場とか、六助がお園に對する打ちあけのクライマックスとか、又は、梅野由兵衛が長吉と知つた時の一刹那とか、その外、盛遠に於て、新助に於て、宗五郎に於て、平右衛門に於てその最高調の一瞬時の寸分もスキの無い全心身的の緊張せる表現力はその刹那に於ける彼れ獨特のきまり形の彫刻的の美と伴つて到底他には見られない含蓄味をあらはして居る。

更に、わが吉右衛門が、時代物に對して折紙をつけられてゐることは云ふ迄も無いが、一方、人間味の多い、吾々に一層近い、近代的寫實的の世話物に於ても、左團次や、菊五郎や、猿之助とは又違つた特長を帶びた彼れ獨自の世界をもつて居ることを忘れてはならない。

彼れの藝にだつて、强いてアラを探せば全然無いことは無い。併し、人間としての吉右衛門は、近づけば近づくほど懷かしさと美しさとを增して來るばかりである。

願はくは此の當代梨園の國寶には、出來るだけ藝術的驥足をのばさせることにして、煩はしい忌はしい俗事の爲めに其の尊い精神を消耗させたくは無いものである。これが私の滿腔よりの切なる願ひである。

主觀的の型

入江來布

吉右衛門が、道頓堀へ出ることは、何にしてもいゝ事である、單にそれは稀らしいだけでなく、本人にとつても、道頓堀にとつてもいゝ刺戟である。

東京の役者で、道頓堀へ出るものは大よそきまつて居て、而もそのきまつた人がやる出し物は大に制限されて、ぞういふものか、いつもその役者の第一の十八番ものはやらない、吉右衛門、左團治ごころの東京役者は、京都、神戸あたりまで來てもなか〳〵道頓堀へ出て來ることは少かつた、その吉右衛門が、中座へ出るのは實際めづらしい事であり、いゝ事である。

吉右衛門ならば、きつと、道頓堀の調子を亂さないで、大阪人にも、大阪の舞臺にも合ふところを見せるであらう、刺戟は反對の極端から受ける事もあるが、また、相似た隣接からうける事もある、吉右衛門は勿論東京風の役者であるけれども、其歌舞伎式な點に於て大に大阪の舞臺に隣接するものをもつてゐるのである。

型、歌舞伎芝居には連綿として型があつて、たま〳〵役者が部分的に自分の新型を編み出すにしても、矢張り型は型であつて、要するに一定の範圍を出ては居ない、その範圍内で活動する役者の働き、役者の個性は、型を客觀的に扱ふか、主觀的に扱ふか、つまり、型を心持ちで活かせて行くか、型は型なりで冷やかに運んで行くかの二つに大別されるべきものゝやうに思はれる。大阪の一流役者は、一面故人の型で行くこと共に、一面よく自分の型を創造して比較的自由にいろ〳〵新案を出して見せるけれども、併し總じてその新型の扱ひぶりは冷やかで、型に對しては概して客觀的であり、表面的であるやうである、大

阪の役者は、型は時々自由に離れるけれども本當の己れの主觀がそこへ表現することは少いのであつて、たま〳〵出ても部分的の小主觀であることが多いのである。歌舞伎芝居のふつくりしたい丶味ひは、型を型として尊重しながら、そこへ役者の大手でやわらかな主觀の肉をつけるところにあると思ふ、だんだん、あれは何代目何がしの型だ、あすこはたれがしの型だと故實を覺えてゐる見物衆は少くなつて、歴史は知らぬけれども、歌舞伎劇そのもの丶現前の舞臺効果に陶醉しやうといふ見物が多くなつて來た、また今後はいよ〳〵さうなるであらう。さうなつて來ればいよ〳〵型の主觀的表現とでもいふべきことが今後の舞臺に上る歌舞伎芝居には重要の條件となるであらうと思ふ。

吉右衛門はごちらかと言へば新人側に屬する人であるに拘らず、歌舞伎劇に於て型を重んずる人であつて、寧ろ型の範圍の中にある人であるが、而もそのきつちりした型を動かさずに居ながら、そこへ大手な主觀の肉をつけて行く人として特に獨歩の道を持つてゐる。この點が卽ち大阪の舞臺に適合し、また一面に大阪の芝居を刺戟するであらうと言ふ所以である。

私は、三年前の正月、京都の南座に熊谷と幡隨院とを見たきり、その後の吉右衛門を知らないが、今その時の記憶を呼び起して、再びさういふことを考へて居るのである。熊谷の須磨の浦、壇特山の條のあたりの型の生かしやう、と言つてよいのか或ひは吉右衛門の創意の型か、孰れにしても、大まかで、素純な型をそのまゝなりに、主觀をもたせて行く演じやう、それから陣屋の塲の幕外の引込みが、型を追ひながら、そのうちに型に肉づけられた何とも言へない餘情を曳いて、吉右衛門として の蓮生坊の主觀が髣髴として見物に味得されたこと、幡隨院の劇中劇の塲で『別に喧嘩を賣るんぢやごぜゐませんが』と揉み手しながら花道に立つてゐる姿の未だに眼先にちらつく長兵衛、あの長兵衛も傳統の型であらうけれどもそこに主觀の肉がついて居て、生きた長兵衛が本もの丶花道、卽ち劇中劇でない現實の花道に立つて居た、それは同じ型で行くものとしても、幸四郎の辨慶が花道に構へたときの「型ばかり」のものではなく、また鴈治郎の治兵衛が魂ぬけてこぼ〳〵と出て來たときの或る部分的の主觀とも違ふものである。小主觀は誰れでも出し易いけれども、こせ〳〵した部分的の解釋でないふつくりした肉附のい丶主觀はなか〳〵出し難いものである、吉右衛門の藝にはそれが見られるのである。

東京の人に言はせると、大阪者には眞の藝術なんかわからないさうであるが、併し、ふつくりした藝の味ならば大阪の人に

もよく味解される、それから假令歴史は知らなくこも型の味ひ、型の價値は由來大阪人には特に味解される。私はこの點で吉右衛門が道頓堀に立つことは大阪へ反對の極端をもつて來ることではなくて隣接の相似で接觸してくるものであると思ふ。

時々飜譯劇も見せて貰ひ、新しい歌劇なども見せて貰ふが、結局孰れにしてもこゝと思ふ所では相當に芝居をして居る、隨分露骨に芝居をするあたりは、却つて日本の舊役者や所作事へ立歸るのではないかとも思へる、故人の創造した型といふものはなか〳〵尊重すべきものだと思ふのである。さういふ所から言つても歌舞伎劇は新しい肉つきさへ持てば今後の新しい觀衆に迎へられないことごうして斷じ得やう、私に大に歡迎さるゝ時機の到來することを信ずる、斯ういふ場合に於て吉右衛門の藝は適切である、大阪の役者なり大阪の見物なりが味つて見たいこころだと思ふ。

今度、吉右衛門が來て、何を出すのであるか、またどういふ連中と組むのであるか、少しもさういふ消息は知らないけれども、同じやらせるなら、變な人氣投票のやうな札入れの藝題選みなどをせずに、自由に本人の思ふものをやらせて特色を發揮させたい。幸四郎が來ても、中車が來ても、梅幸、歌右衛門が來ても、なか〳〵本人の思ふ出しものが出せないらしいが、これは興行政策としても一利一害ではなからうか、吉右衛門などは東西合同でやるんぢやなからうから、大阪の役者との振り合ひなどを考へる必要もないのだから、本人のやりたいものをやつて貰つたら、きつと人氣を呼ぶだらうと思ふ。興行政策といふことも、素人にはわからぬけれども、歌舞伎劇と同じやうにその興行政策の型を型として存しつゝ、そこに時代人としての解釋の大まかな肉づけをして行く事が必要であつて、部分的に小主觀を加へて考へすぎた技巧を弄することは却つて策の得たものぢやあるまいと思ふ、素人考へが時に他山の石となることもあるから序に書き添へて見た。

三年前の吉右衛門劇を思ひ浮べたに就て、同時に思ひ出したのは扇雀丈のことである。あの時、あの人は熊谷の軍次と、鈴ケ森の權八をして居た、權八の方は姑く措いて、軍次はなか〳〵神妙な演出で、調子もよく、流石に他流に立ち交つた賜だと言つてみんな丈のためにその勇氣を賞し前途を祝福した事であつたが、幕内の事は門外漢の思慮の外にあり、程なく丈はこの一座と離れたが若し今まで續いて居て、今度三年目に一所に道頓堀の舞臺へ戻つて來たのだつたら、その響きは、それこそ雜誌「中座」を滿誌飾させるごころの騷ぎでは濟まされなかつたらうと思ふ。いよ〳〵若く、いよ〳〵前途の洋々たる丈の如きは孰れの道を行くにしてもまだ〴〵遲くはない、今度の吉右衛門劇の道頓堀開演を機會に大に發奮を祈つてやまないのである。

非凡の凡人

額田六福

所謂縁が無いと云ふものだらう。東京中では吉右衛門氏丈けがいまだに私の書いた作を演じないでゐる。從つて私的には逢つた事も話した事もない。自然その方面の氏の印象は悉無である。

舞臺の方は、昔の市村座時代には、殆ど絶對に新作をやらないので、深く親む氣になれなかつたが、六代目と分離して新富座へ立籠る樣になつてから、可成注意を拂ふ樣になつて來た。そこで例の里見さんの新樹と、有島さんの御柱との二作は、可なり世論を沸騰せしめたものだ。けれども氏自身の新しい藝域はそれで開拓されはしなかつた樣だ。それから、岡本先生の俳諧師、松居さんの、養蠶の家などやつたがいづれもあまり香しくなかつたのか（俳諧師は世評はよかつたが）それきりに新作に手を染めず（つき合に出たものはあらうが）元の歌舞伎劇、活劇物の世界に歸つて仕舞つてゐた。世間でも亦それが氏の歩んでゆく唯一の道であるかの樣に考へてゐた。深く鋭く耕して行つて、團十郎以後の歌舞伎國の覇王となるのを望んでゐた。

處が、俄然、同年の夏に岡本先生の權三と助十の大家をして、生世話物に無類な出來榮を見せ、この十月の風鈴蕎麥屋で、更に一段と非凡な舞臺を見せて、完全に新藝域を開拓して見せた。しかもそれが、同じく新演出の引窓や、天下茶屋の元右衛門や、忠臣藏の平右衛門等に比して、格段に好評であつたのは皮肉と云へば皮肉である。前の舊劇に限ると云ふ考へは自他共に棄つ可き時が來たと思ふ。

勿論、盛綱にせよ、熊谷にせよ、正に天下一品である事は論はない。それを擲つて云ふのでもない。今後も益々精錬されて欲しい。が只さう云ふ方向に限られてゐた樣に見にてゐた氏の藝域が、更にかうした方面に擴充されて來た事を氏自身のみならず劇壇のためによろこぶ者である。新樹も御柱もやはりこゝへ來るための貴重な棄石の一つであつたと思ふ。

善い事をしても大きな事は出來ない、惡い事をしても徹底的の惡黨にはなりきれない平凡人、それが世間には一番多いのだ。そしてさうした平凡人を活し出す氏の藝は全く他に比類のない妙味をもつてゐる。松助老人のでもなければ勿論、六代目の味とも勘彌君の妙味とも違ふ。僅かに、市村の翫助君父子が追從する事が出來る丈けである。全く獨特な平凡人味である。亡くなつた歌六氏にもこれは多分にあつた。恐らくその遺傳だらうと思ふが、いゝ素質を讓られたものである今日の樣に、平凡人の生活が劇の主題に採られる事が多くなつた時勢では斯うした方面の新作に於ける氏の活躍ぶりは全く異常な興味をもつて期待される。

私は第三第四の岡本先生の作を鶴首してゐる。たゞ、こんどの機會では、大阪では風鈴蕎麥屋が出ぬとかで、私の云ふ事を如實に首肯して貰ふ事の出來ないのは殘念だが、一番目の佐倉宗五郎としても、一柱の首領英雄としての宗五郎でなく、一百姓としての宗五郎にたまらない妙味があらうと思つてゐる。

（十三夜の月を待ちつゝ）

中座霜月興行

役割一覽

吉右衛門（木内宗五、梶原平三、蕎麥賣又七）　三津五郎（松平伊豆守、文屋康秀、喜撰法師、大郎冠者）　時藏（女房おさん、祇園お梶、梢、醜女）　江若（渡守甚兵衛、大名）　吉之亟（南士、官女、俣野五郎、仲間萬平）　玉之助（大名官女）　三津太郎（大名）　三津之亟（南士、官女）　大三郎（大名、官女、大名）　若猿（大名、呑助）　三吉（大名、官女大名）　勝五郎（大名、官女）　力藏（大名、官女、大名）　七三郎（大名、官女、飛脚）　秀好（大名）　米吉（南士）　八十助（南士・大名、上臈）　新十郎（長吉、大名）　九藏（大名、大庭三郎、大名）　福之亟（お蝶）　友右衛門（家總、六郎太夫、鍋搔き金助）

吉右衛門覺書

竹内勝太郎

今年の三月八日、春も未だ淺い夜のことである。劇通の安田京都市長から、南座の彌生興行に來てゐる吉右衛門を招いて、木屋町邊の靜かな家でゆつくり閑談したいと思ふが一緒にゆかないかと誘はれた。丁度その時は一番目が「盛綱」二番目が「籠釣瓶」と云ふ何れも吉右衛門お得意の出し物揃ひで、殊に「盛綱」には非常に感心してゐた際なので、私は喜んで同席を約束した。が仕事の都合で少しおくれてその席へ行つて見ると吉右衛門は既に座にあつて、正面にかしこまつてゐた。紋付羽織袴で凡てが地味でがつしりした樣子、勿論話しつ振りには流石に人をそらさぬ調子はあつたが、何處までもキチンとからだを崩さない。世慣れた田舍の小學校長とでも云ひたいやうな感じである。

私は懷に雜誌を一冊忍ばせてゐた。それには私の「歌舞伎の古典化」を論じた雜文が載せてある。私は臆病者だ、書いたことには自信があるが、それを人に理解して貰へるかどうかに就ては常にまるで自信がない。だから私自身は吉右衛門が好きで、その藝にも理解を持つてゐるつもりだが、吉右衛門の方で果して私などの意見に耳を傾けてくれるかどうか甚だ疑問なので、實は最初から無駄を覺悟で持つて來たものなのだ。

その私が何の躊躇もなく雜誌を吉右衛門に獻じて一讀を希ふた。吉右衛門の態度がすつかり氣に入つたからである。吉右衛門は役者たる前に既に人間が出來てゐる。この感じが私を何よりも喜ばせた。舞臺で見る吉右衛門の藝の手堅さ、熱

眞面目、眞劍、誠實、そう云ふものがより以上に彼の人間そのものに、彼の生活そのものに湧れてゐる。それが心から私に吉右衛門を尊敬させた。

人格は藝術の眞核であつ。そして吉右衛門のやうな人格者を持つてゐる歌舞伎の次の時代を祝福したい。

吉右衛門が私の雜文を讀んでくれたかどうかは知らない。然しながら私の論じた歌舞伎の古典化と云ふことは實際、吉右衛門に依つて具体化され、實現されて居るのである。

私の「歌舞伎の古典化」と云ふ議論には、現狀論と本質論この二つの立場からの根據がある。現狀論から云へば歌舞伎は既に自ら古典化せんとする方向を取つて居る。その最も解り易い適例は通し狂言の廢滅である。尤も何々追善興行其他の特別の場合及び濱芝居の場合は措いて問はない、歌舞伎芝居の本道に於いてそうであることを私は主張する。一面之れは俳優本位の弊害であることも見へ、又興行政策の算盤玉の動きこも考へられやう。然しもう一歩進んで、若しも眞に民衆が歌舞伎の通し狂言こ云ふものを要求してゐるならば、如何に俳優本位の我が劇壇こは云へ、その聲に從はねばならぬだらうし、興行政策の豹變は云ふまでもない。然るにそのこことがないのは本當に劇を愛する民衆の要求が矢張り通し狂言になくして、現在の如き芝居の組立にあることを有力に立證するものではなからうか。卽ち歌舞伎はやむを得ずして、或は當然の歸結こして（それは見る人に依つて考へ方が違ふ）通し狂言を廢し、特にある場面だけを限つて、民衆の前に提供するこ云ふことになつて來たのであるこ思ふ。

その一例を拾ひ上げて見るこ『伊賀道中双六』の『岡崎』『三浦大助紅梅靮』の『石切梶原』『一谷嫩軍記』の『熊谷陣屋』、『近江源氏先陣館』の『盛綱陣屋』等吉右衛門の當り藝だけでも尠くない。いづれも長い段物のうちの一段一齣が特別に選ばれて舞臺に上されてゐるのである。

それは何故であるかこ云ふ點から本質論に移つてゆく。舞臺の上で現實世界から何等外形的な拘束を受けない純粹の象徵主義藝術たる能樂に對して、歌舞伎は世態人情をうつすこ云ふ意味に於いて寫實主義の藝術であるが、その寫實主義は我々の考へてゐたものこは全然別である。眞の寫實主義劇ならば當然そのうちに現實の世界に對する批判が含まれてゐなければならぬ。所が如何に德川末期の市井生活を寫したこ云ふ生世話物でも、之れは現實の批判ではなくて、凡てが現實の廻避でなければ陶醉である。卽ち舞臺から繪畫的な美しさ

を觀客に享樂させることが目的なのである。更に云ひ換へれば人生を立体的に感じさせるよりも、人生を模様化して見せることにあるのである。これを我々の寫實主義に比すれば素朴的享樂的浪曼主義とでも名づけるのが至當であろう。（歌舞伎の「見せる」本位であることはその舞臺構造から云つても舞臺裝置舞臺意匠その他衣裳小道具類の發達に就いて見ても明かで、最も著しい實例としては「助六」だの「金閣寺」だの「千本櫻」だのがある。）

「見せる」ことは形式美の世界だ、そしてそれは歌舞伎の型に代表されてゐる。けれども此の型は細部であつて、歌舞伎の世界で細部の形式美を統一してゐるものは形式美の完成である古典主義ではなくて、反對に内容美を生命とする浪曼主義であつた。歌舞伎の芝居の筋が凡て義理と人情のしがみで一貫されてゐるのもこの爲めである、然しながら新時代の青年にそう云ふ内容や筋がごれだけの興味をそゝり得るだろう。かくて歌舞伎の分解と脱落とが始まり余計な浪曼主義を捨てゝ純然たる形式美の古典主義の世界への轉廻が行はれつゝある、長い段物の通し狂言から或特定の場面だけが次第に獨立しつゝあるのである。

吉右衛門得意の型物、「盛綱」にしても熊谷にしても、その内容その筋だけでは何等我々に取つて興味のあるものではない。一つは古主への義理から我が子の身替りを打つ父親の苦衷、も一つは甥の生命に懸けた計略の僞首を本物と僞る武將の苦衷、いづれにしても現代人に取つては甚しく感動的でない。

然るに實際吉右衛門の舞臺が非常に感動的であるのは何故であらうか。藝の力に依ると簡單にかたづけてしまうのは最も抽象的な云ひ方である。もつと具体的に云ふならばそれは吉右衛門の演出が歌舞伎の古典化を實現してゐるからであると私は斷じたい。古典主義の藝術は云ふまでもなく形式美の世界である。そして歌舞伎の所謂型が形式美の完成を目ざしたものであることも、明かだが、それは未だ部分部分のことであつて、從來のわが歌舞伎にはこの部分の形式美を統一する所の、全体を一貫したより大いなる形式美の世界、古典主義の精神がなかつた。（前述の通りそこにはたゞ素朴な享樂的な浪曼主義ばかりがあつた）近代思想にそだてられた吉右衛門は此の歌舞伎の世界へ古典主義の精神を導き入れたのである。（九代目團十郎はその先驅者であつたろうと思ふが、私はその舞臺を實際に見たことがないからなんとも云へない）

吉右衛門の盛綱が型を踏んで舞臺に動く時、それが非常に緊張した感動を我々に與へるのは、型が單に型の踏襲に終ら

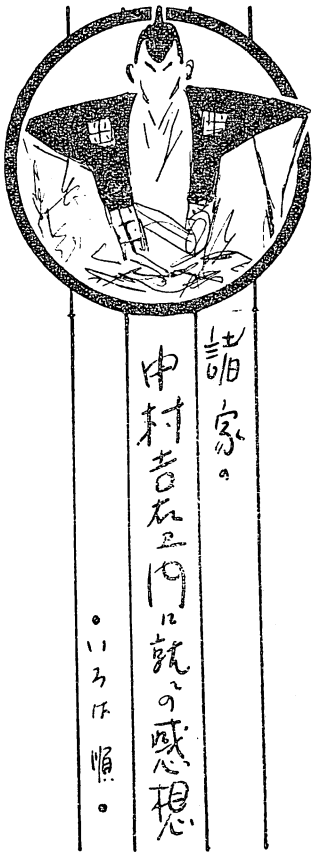
ずに、古典主義精神に貫かれ、凡てが大なる形式美の世界に統一されてゐるからである。それは一面に於て吉右衛門が捨てるべきものを捨て、生かすべきものを生かしてゐると云ふことにもなるであろう。

一体この享樂的な浪曼主義と云ふものは一度その人の生活と體驗とが墮落すれば安慣な感傷主義に早變りする。わが歌舞伎の芝居はこの感傷主義を過去の遺産として多分に受繼いで居る。然も古い感傷主義は多くは感情の浪費で、例へ觀衆が因襲的に泣かされることは云へその舞臺には反感を抱かされる、決して美的感動を受けずに、反撥する。

賢明なる、そして時代精神に理解のこゞく吉右衛門は此の古い感傷主義を舞臺から追ひ出して、歌舞伎劇の古典化を圖つた。即ち余計な浪曼主義を捨て、溢れ出る力強い熱情を立派な形式に具体化して、確實な表現を與へることに努力したのである。かの盛綱や熊谷の苦衷が現實的のものであり、單なる世態人情の寫しであるとすれば我々には全く興味のない一瑣事にこゞまるが、吉右衛門の舞臺に於ける盛綱や熊谷は直接内部精神から迸る生命の激動を確立した形式に統一して力強く表現したものである。その演出の一擧手一投足は繪畫に於ける一線一劃の如く、形式美の世界そのものを創作するのである。その科白は單なる世態人情を寫す動作や言葉ではなく、我々の純粋な感情に直接働きかける藝術的力感にまで躍變した形式美の世界である。そこに立派な歌舞伎の古典主義化が行はれてゐる。

若しも歌舞伎劇が從來のまゝでおさまつてゐるなら、それは古臭い過去の感傷主義に沈湎して、時代からは取り殘され精神的には破産し、遂に衰滅のほかはないであろう。然しさうなり切るには歌舞伎は餘りによいもの、立派なものを持ち過ぎてゐた。だから彼はかれ自身解体を始め、浪曼主義の脱落を行つて古典主義への轉廻を目ざした。そして演出者の方でも又吉右衛門のやうな傑物が生れて舞臺の古典化に力を盡すことゝなつた。若しこの古典主義が完成して、大いなる形式美の世界を確立することが出來れば、之れは劇全体を一つの立派な力強い精神を以て統一され、貫き通されたもので、明かに象徴主義の藝術と見做すことが出來、同時にそれは能樂の如く永久に生きる力を獲得した譯で、蓋し歌舞伎の生命は萬々歳であろう。

然しこの仕事は隨分大きい、そして相當に時間が掛る。のみならず今にして此の仕事に志さなければ、手おくれとなつて悔ても尚及ばぬ破目に陷入るだらう。斯樣な重大な時機にある歌舞伎の爲に、わが劇壇が吉右衛門のやうな熱情と誠實とを常に失はぬ人格者を持つてゐることを、私は茲に繰返して祝福したいのである。



井東憲

好きな俳優の一人です。

藝に重味があります。それは力の藝だからです。ごこか莊重な俳優です。時代ものにかけたら若手のずゐ一人でせう。然しあれ程の藝を持ちながら、單なる味の世界からもう一歩出ないものか。風格の俳優から創造の俳優へと、僕は望んで已まない。

こんご中座ではごんなものを出すか知らないが、あの莊重さと、熱のこもつたうれいをぐつと生かすものを演らせたい。

伊藤悌二

初めて吉右衛門を觀たのは其の昔菊次郎の生前市村座に於て菊五郎と共に例の「新薄雪物語」の三人笑ひの時でありました、爺むさい處は歌六に好く似てゐると思ひました。

三宅周太郎氏が吉右衛門を天にまであげて禮讃した頃も私は餘り此の優を好きませんでした。一昨年の十一月中座に來て「逆櫓」をやつた時も社會運動家の賣名者流のやうに「此の通り俺は人氣者なんだよ」と云ふ處が鼻にかかつて居つて大活躍は感心したがキザで御座いました

それから歌舞伎座で「三人吉三」を觀た時も左團次や羽左衛門より藝はこまいやうでも別に他の二優を凌駕してゐるとは思ひませんでした。然し今年の六月「佃夜嵐」の神谷左藏じは菊五郎を壓倒し、七月の「權三と助十」では流石の羽左衛門なごも閑口してゐ節が見ゆました。私はあの家主の六郎兵衛を見て、彼の内にひそむ尊い藝術魂を發見した感がしました。

生田葵

吉右衛門君が型物に就ての研究の第一人者でありそれに對しての熱情と努力とに先づ敬意を表したいと思ひます吉右衛門君の演じたものは大抵見て居りますが、やはり石切梶原や、首實檢には何度見ても飽かない正確さがあるのを悅びます。

一部の人は譽めますが、私は吉右衛門君の默阿彌物の演じ役にはそんなに禮讃の聲を出すことは出來ません。潑溂さが足りません、之は同君の体質上是非もないことです、震災前に見た新富座での俊寛、それに法界坊なご一枚繪ものです。

今東光

有りふれた感想ですが小生は常に吉右衛門の熱心を買つてゐる者です。あの熱心は何事でも達成することが出來

るほどの熱です。

井手蕉雨

吉右衛門丈が適くとして可ならざる無き技藝の持主であることは今更めかしく說くまでもないことだが、想ひ回せば今から十六、七年も前市村座で從來二番目役者の六代目を一番目へ廻し一番目役者の吉右衛門を二番目へ廻して見たら？と故田村成義翁や關根默庵翁の相談に與つて小生は「關白秀次」を書卸し六代目が秀次で一番目を受持ち吉右衛門は二番目を受持つて腕の喜三郎をつとめ、まけず劣らずの成績をあげた時から六代目が二番目役者であると同時に一番目役者でもあり、優も亦一番目役者であると同時に二番目役者であることを一般に認識された。小生は優の力そのものゝ加き藝風を看る時、彼の荒岩といつた力士の力瘤を積み上げたやうな体格を思出さずには居られない。優の事を書きたいだけ書いたらば到底中座誌全部を申受けても書き足りまいと思ふほど多く小生としての感想は有るが、此度は先づこれ丈け申述べて置く。

石割松太郎

吉右衛門の舞臺を見てゐると、からだが堅くなります。それは演者が神經質で引しめて〳〵ゆく、些緩みを見せませんから、看客も引づけられるのだと思ひます。これが吉の長所であつて又短所だ。その短所といふのはこれがために、舞臺が小さくなります、私は吉は將來、小ぢんまりとした古風な歌舞伎劇場で歌舞伎の型の保有なぞが、この人の進むべき道だと思つてゐます

畑耕一

吉右衛門の藝を見てゐると、大家の若旦那が帽子を眼深かにかぶつて賑やかな往來をあるいてゐる——といつた氣持がします。

濱村米藏

吉右衛門に就ては、既に定評があります。今更言ふ程の事もありませんが近頃の氏は、少し仕過ぎるところがあります。

内端といふか、澁いといふか、ちつとも誇張のない、時代物の舞臺などは全く天衣無縫の感じで、限りない澁味があります。さういふこころも、大阪の好劇家諸君が、大いに買つてくれることを望みます。

鳥居清忠

九代目畑の物を演じて居る方がよいと存候

新らしい物も時折は手掛る事もよろしくと存候

當時上手な役者と云ふのは此人と六代目と存候

戸川貞雄

最近はすつかり芝居見物にも遠ざかつてゐるので、貴問に叶ふやうな感想もありませんが、吉右衛門を思ふといつも先づ浮んで來るのは、古い以前の彼の春雨傘の曉雨だ。馬鹿々々しい芝居で、羽左衛門あたりが演じて纏に見られよう曉雨を吉右衛門は羽左の曉雨よりうまくやつてのけたので、僕はひそかに舌を卷いたことがある。

豐岡佐一郎

今頭の上から吉右衛門の元右衛門が僕を見下ろしてゐる。僕は十年以上吉右衛門に對して常に變らない愛を感じ

てゐる。少し偏愛に近い。彼に對しては常に批評を忘れない氣持だ。この自分の氣持をふりかへる時、批評のない役者贔負の心理に同感する事が出來るいつもはいやでも理屈を云ひたい自分ではあるが、吉吉衛門が生きてゐる限り芝居ゝ云ふものは矢張り有難いものだゝ思つてゐられるだらう。

額田六福

時代物、活歴物についての方面は今更に事新しく云ふ事はありません。こゝしの夏の權三ゝ助十の大家さん以來の生世話物の妙味を一層發揮して欲しいゝ思ひます。大阪でも風鈴そばや等をやるこいゝゝ思ひます。

奥川夢郎

君は實に熱心な人である。そうしてこれまでに自他共に許す君の領分を得たのも皆熱心の賜物である、而しぢつゝ考へてまだ君の開く可き未開の世界は澤山あるゝ思はれる、それは簡單に舊新とも新劇とも云へない。最近にては權三ゝ助十の家主然り、元右衛門然り風鈴麥蕎屋然り世評は兎に角、君はもつゝ大膽に進んでもよいゝ思ふ。

大木雄三

結構な役者だゝ思ひますが、あまり見てをりません。

大森眠歩

關東關西を通じて、情熱に立つ役者は五指に足り、猶、藝の奥に達した役者は十指に足りるであらう。が、おしなべて、藝にかたよるものは、熱に、いまだしく、熱にたぎるものは、藝にいまだしく、兩々一体の内に生き生かし得るものが、はたして幾人あるであらうゝ思ふとき、私は當中村吉右衛門氏の上にも、根強い期待を持たずにはゐられない。

加藤秀雄

丁度一昨年の十月の末であつたゝ思ふが私は偶然堂島大橋で數艘の大傳馬を連ねて川を下つて來る吉右衛門の船乘込に出遇つた。華かな中央の船の舳に緋毛氈を敷いて座つてゐた吉右衛門時藏は双手をあげて橋上の私達に挨拶をしながら雜喉場の方に下つて行つた。これが彼を見た最初である。

そしてその乘込興行のひらかな盛衰記で彼の船頭松右衛門を見物して素的だゝ感嘆した。

これが彼の藝を見物した最初である。私は彼を見たのはたゞこの最初の二度にすぎない。だから彼の藝を評する事は遠慮したい。たゞ芝居好きの母から聞いた事であるが、嘗て彼が大阪で松王を演じたゝき故攝津大椽が彼の藝にいたく感心したゝ云ふ。

名人は名人を知るゝでも云ふべきであらう。

上司小劍

吉右衛門の描く藝術の線は細い。この細い線をもつて、おほまかな歌舞伎劇に成功しつゝあるのは、一つの奇蹟ゝも言へやうか。線が細いから、古名優が直線を用ゐたゝころにも、彼れは曲線を用ゐる。これが時代の人氣に投じた所以でもあらうか。線が細いので輪廓が小さい。物によつては五月人形が勤いてゐるやうに見ゆる。萬年娘の意味で、萬年青年俳優である。

家門櫻谿

私が幼少の頃。今は活動館に成つてゐる道頓堀朝日座に、中村時藏、同種

太郎の親子が出演して、人氣を呼んでゐた。その種太郎こそ今、關東梨園に時めく中村吉右衛門である。昔は若い綺麗な女形役者であつたが、惜しいことには藝は拙いと世間は云つてゐた。それが今では名人畑の一人と評判されてゐるは、驚くべき技倆の進歩であり且つまた優運めでたき器量人ではある

高澤初風

波野君の中座再度の出演に就て關西に馴染の尠い同君がどんな狂言を持つて行くか私はまだ聞いてゐませんが大成駒の鴈治郎氏の得意とする「盛綱」や「政右衛門」を同じく波野君が當り役としてゐても是を出すのは考へ物でせう。波野君は金襖の大時代物役者として是まで隨分好劇家の間に唄はれてゐましたが、それは二番目役者の菊五郎君と市村座にゐたからで、近頃では却つて波野君の眞價は世話物にある事が知られて來てゐます、實際其生世話物の臺詞の活殺の旨さは東京俳優中でも尠い位です、今度の中座ではさうした妙味を充分に發揮する狂言を出す事を望むと共に、演出上の熱とか力とか外觀美以外に役の腹と味ひとを大阪の人々に認められる事を祈ります。

高原慶三

我が東都修學時代、吉右衛門の芝居は月毎、あたかも米の飯の如き心地して見にゆきたり。小宮豐隆の「吉右衛門論」は彼の歌舞伎に對する新劇術をもつてロダンの彫塑に喩べて椽大の筆を揮ひて、以て劇評の新形式をはじめたるその當時なり、一ト昔半の古事にこそ。それより曩、我が吉右衛門に對する印象は廿四五年も前のことならん大阪中座にて梅幸の「土蜘」に合狂言の番卒にて大當りせし事ありき、更に後年我が中學時代、浪花座に仁左一門の「道明寺」の宿彌太郎に評判獨りその譽をとりし事もありき、思へば我も考いぬるかな。

田中芳哉園

神谷宗湛は商人でありながら豐臣秀吉の權威にも恐れず天晴れ社交の太刀打たる大茶人にして大快男兒なりき、其性格と其行動とは當代それに扮せむもの吉右衛門の外あるべからず小生は吉右衛門を見る毎にそれを想ふ、劇作家雲の如し、誰か宗湛の事蹟を脚色して吉右衛門をして活躍せしむるもの無き乎、地震加藤そは吉右衛門に慊たらずなりぬ。

津村京村

吉右衛門の藝は正に古典そのもの。但し古典の中には彼自身の生命を常に力強く活かして行く人なり。故に、新しいものよりは古い物が向く事、言を待たないが、物に依つては充分新作をも生かせる人なり。よき新作を彼の爲めに提供したし。

直木三十五

菊五郎と澤田と左團次とこの人とを合併芝居をしたら儲かるだらう——と

中山白峯

私は吉右衛門についてそれ程知る所がありません。東京の新聞や雜誌などで評判がいゝやうですから、うまいのだらうといふ位の程度で、此前中座の歌六追善劇の逆艪の樋口でも籠釣瓶の治郎左衛門でもさして有難くもありませんでしたけれど、伎藝の一部には印象のある人だとは思ひました。何しろかうした中年俳優が先輩の糟粕を嘗め

てゐるのが嫌ひです。劇の天地は廣大です。徒らに先輩の粉本を摸倣することをいつも悲しく思つてゐる一人である事を告白しておきます。

中村武羅夫

吉右衛門は、藝に一生懸命さはあるが、ゆとりがないので、大きな役者になれません。時に依ると、彼の舞臺は餘り悲壯で、見て居られないやうな氣がすることがあります。もつと、人間にも藝にも、幅が出來て來るといゝと思ひます。

永田龍雄

吉右衛門を思ふときわたくしはいつも夏より秋のゆふぐれかけて啼くひぐらしの音色を聯想する。おのづから靜かに澄んで情熱のあるあのなく聲を思ふのである、音樂的に調子の表情から言ふと彼は卜短調なのだ、「夢幻的沈思」と「多感多恨」の彼の藝風は卽ちこの二情緒のいづれかを表はす卜短調である。わたくしが茅蜩のことを聯想するのもそこにある。—もう一語彼に詩的の言葉を冠することをゆるしてもらへるなら彼の「肉體こそしてその表現する藝術は氷れる炎である」と、かう書き添へたく思ふ。

南部修太郎

渾身これ努力と誠意と云つた感しの藝風をいつもながら好もしく思ひますが、役柄によつて彼くらゐひどく死んだり生きたりする俳優はありますまい云ひ換へれば彼は役にはまると云ふ事が際立つて美事です。例へば先頃の元右衛門の如き役にはまらないために、彼の切角の苦心工夫が寧ろ滑稽にさへ見ました。

野島辰次

十月の本郷座はまだ見てゐません、ですから極めて最近では九月の歌舞伎座の茶屋場です。吉右衛門の平右衛門が一人でさらつてゐたのは全く愉快でした。中車の由良之助も宗十郎のお輕も吉右衛門につき合つてはまるで木偶のやうなものでした。これは吉右衛門が、いつもながら力と熱とを出して全人格的に舞臺を勸めてゐるからに違ひないと思ひます。私はこの人を見てからまだ僅かに十六、七年位にしかなりませんから、ずつと昔のことは知りませんが歌舞伎役者の中では一番好きな人です。猿之助、勘彌等何れもそれぞれに好い持味はありますが、文字通り「舞臺に生きる人」として吉右衛門を第一等に推すことに躊躇しません。—歌舞伎は骨董品だとか單なる享樂とその對象物に過ぎないとか、人は云ひます。しかし吉右衛門が舞臺に生きてゐる間、やはり歌舞伎の藝術的價値は顧らるべき存在ではないかと思ひます。

邦枝完二

あらゆる現代の俳優中に於ける、第一人者だと信じます。孜々として胸に迫るこの人の藝風は枯淡たる松助老の藝と共に、我が劇界の至寶です。しかも啻に得意とされてゐる一番目物のみならず、二番目狂言に於ても、君は遙かに群優を超越した、第一義の藝に終始してゐます。感謝と敬服のほかありません。

桑野桃華

吉右衛門は私の好きな役者の一人です。澁いうちに、華やかさを持つたあの藝風は、一番目物の役者として最も適當であると同時に、二番目物では、

たとへば「春雨傘」の曉雨の如き實によいと思ひます。中車、幸四郎、羽左衛門の持つよいところを打つて一丸としたといふやうな役者です。――が吉右衛門にも惡いところはあります。深刻に〳〵といふ考へが、兎もすると、壓搾された、ゆとりのない、窮屈さうな感じを見せる事です。

山本修二

一、愛嬌
二、熱
三、マンネリズム

山崎紫紅

時代ものを近世的に解視を加へながら團十郎の皮で包んでゐる人、だから世話物で當人の純な味を出す。

丸山耕

吉右衛門君は要するに情の人である俳優の個性が舞臺へ影響して所謂ガラにない役では成功せぬのも止むを得ぬ以上、吉右衛門君が熊谷や石切梶原乃至盛綱などで第一人者の稱あるも蓋しこれが爲で、十月本郷座に於ける大藏郷も重太郎も頗る好評であつたに引かへ、去月天下茶屋の元右衛門で期待を裏切つての失敗も亦同優が情の人である所以であらう歟。風鈴蕎麥屋の又七が無類の當りであつたのは、臆病で氣の小さい同優の性格をその儘であつたからで、慾をいへば、この人からこの臆病を除き細心な大膽さを持たせる事が出來たなら、それこそ完全無缺、鬼に金棒であらう。と私は思ふのである

藤井紫影

眞面目な手堅い藝風で、兎角若い人達の陷り易い才氣に煩はされたケレンや小細工や當氣のない處が嬉しい。どこまでも此風で地道に素直に進んで大成してもらひたいと思ひます。

藤森成吉

小生の最も好きな、又望みを囑してゐる俳優の一人です。
役柄から云つて、小生の物などいつか氏に演つて貰ひたく思つてゐます。

小林愛雄

中村吉右衛門の舞臺は眞摯を以て貫かれる。彼は持役に對して懸命の努力を惜まない。彼は意氣と熱誠とを以て直ちに觀客の胸をつぐる。其間には六代目のやうな遊戯的分子が微塵もないそこに彼の價値がある。彼の最大な持味は沈痛の表現である。故に宗吾や盛綱や清正の如き悲劇に彼は適すのである。私は歌舞伎の忠實な悲壯な繼承者として、彼の技藝を尊重する一人である。

河野義博

○最後の歌舞伎役者
吉右衛門の新劇運動を期待してゐるやうな人達は、今でも相當にあることと思ふ。市村座脱退當時二三度さういふ方面へも手を付けたやうだが、大した効果も牧めなかつた。それは主として脚本の故もあるのであらうが　根が歌舞伎できたへた彼の藝術を一夜造りの片々たる新劇脚本へ持つて行くのは勿体ない感じがする。彼の藝術の強み、深みは何處までも歌舞伎の世界で、その錆や澁みは外の世界へ持つて行つても左程光らない。恐らく彼は最後の歌舞伎役者として榮ある一生を終る人だらうと思ふ。我々は彼の藝術に輝く古典美の殘照を悲喜兩樣の意味で面白く眺めてゐる。彼の藝術が持つ悲壯美

は次第に衰滅して行く古典美そのものの悲壯美でもあるからである。

河野駿郎

彼の藝を見るに當つて、その熱情の發露は崇高といふよりも、寧ろ一種の悲壯といふ感に打たれしめられる。數年あと彼の中座演出に際しての口上はそゞろに嘘の嘆ふを禁じ得なかつた。彼の心の奥底に潜める力は、如何なる時にも人を動かさずにはおかぬ。彼の持つてゐる太い線、象徴化されたる藝風、その深い底から流れ出る藝術のまことこれ等は今日の歌舞伎役者の誰からも求め得られないものであらう。從つて純歌舞伎劇の餘韻とも名殘ともなつて最後の一線を白くはつきりと劃しようとしてゐるのは彼か。

彼の藝から取るべきものは、何といつても活歴物を第一としなければなるまい。例へば地震加藤の如きもの。

私は彼を思ふ時に、何のわけか文壇の正宗白鳥氏を思ひ出す。

小牧近江

にやにやしないところが大好きです。

小寺融吉

先日久し振りで吉右衛門を見たのですが、それは元右衛門と平右衛門でした前者はあまり面白くありません。後者は普通でした、此の二つを見ながらも然し乍らも然しながら吉右衛門の昔からの特色の藝に忠實なること、古格を崩さぬこと、見物を馬鹿にしないこと、高慢でないことが相變らず人に好い感を與へたやうです、誰にも反感を持たれない事は幸福であり、他の人々の就て學ぶべきことゝ思ひます。

近藤經一

吉右衛門は僕の最も好きな俳優の一人ですが、こゝの所一年ばかり見たいと思ふたのもやらず從つて見ませんがやはり見れば今でも好きだらうと思ひます。

江部鴨村

眞の俳優は作家であると俱に批評家でなければならない。作の精神を内部的に讀みこなして、それを舞臺の上に生かし切る。吉右衛門氏はよくそのコツを飲み込んでゐるらしい。この點で吉右衛門氏は私の尊敬する俳優の一人である。

江澤春霞

既に定評のある人、今更感想でもありすまいが、其の所謂内容充實の藝も漸く絢爛の境を脱して圓熟の境に進みつゝある事は言ひ得られます。圓熟元より結構ではありますが、然し左團次や菊五郎やと共に、劇界の天下を三分す可く進んで來る此人の今の若さではまだ〳〵絢爛時代に立ちて、一層花を咲かせても好いと思ひます。敢て、圓熟と云つても、老成と云ふ意味ではありませんが、一つ間違ふと老成になるかも知れません。最眞の役者だけに、小生には、それが心配でなりません。

安倍能成

中村吉右衛門は私の今まで見た役者の中で一番すきです、藝もさうですが人間として役者らしくなく、いやみのない、氣持の好い人柄で素人にも少ないだらうと思ひます。新しがりやが兎角吉右衛門をくさしたがるのはおかしい樣に思ひます。吉右衛門にほんとうに新しい好い作品をやらせて見たいと

思ひます、隨分吉右衛門の濫用若しくは惡用を度々見る樣に思ひます。

足立　忠

吉右衛門といふ人を、いはゆる定評のある盛綱とか大藏卿とかいふもので見るといふ事も大變結構な事ですが、あの人の持つ寂しさ、愛嬌さを生かした新しい芝居で、見るといふ事が、より以上、私にとつては興味のある事です。例へば里見さんの「新樹」とか、本郷で好評を博したお土砂劇とか、また十月の本郷でやつた岡本さんの「風鈴そばや」の又七のやうな演出は、吉右衛門以外の人ではちよつとあゝいふ演出は出來ないと存じますのです。

齋藤龍太郎

吉右衛門の藝術の容相は、南畫的枯淡の風致の集合であると云つていゝ。現在の歌舞伎俳優のうちで吉右衛門ほど眞實の意味に於ける古典主義の保持者は、他にないであらう。彼は歌舞伎に對して、正當な解釋を下し、その傳統を確立しようと努めてゐる。しかも彼がその解釋に微細な神經を極度に使つてゐる點は、恐らく他に類例を見ないところであるが、そこに、彼の舞臺の最も善い處と最も惡しい處とが存すると見なければならない。

佐佐木茂索

僕は吉右衛門の芝居をまだ五度とは見てゐません。「新樹」、「夏祭り」「山門」そんなものゝ記憶があるきりで別に感想もありません。その昔小宮豐隆氏以來今の三宅周太郎氏に到る迄の評論で、ゐらい役者に違ひなからうと思つてゐるだけです。

木村莊八

得難き名優と思ひます。若し此の人に欠点ありとすればそれは「此の人」の欠点にあらずして「時代」の欠点でせう。

新城和一

中村吉右衛門氏の藝術は淋しい神經的な感じを與へる。秋風に慄へる枯尾花の如く又、うすら寒い光りを浴びた萩の花に喩へることも出來やう。力はないかも知れないが、底に熱を湛へた深みがある。氏が新らしがりの脚本に走らず、歌舞伎劇の精髓に終始してゐることは、美しいことである。

白石實三

中村吉右衛門氏愛好者として敢て人後に落ちませんが、なほ望蜀の感あるは。やゝ工夫倒れになりはせぬがといふ点があることです。われ〳〵素人の觀察としては、もつとイリュージョンが釀し出されてほしい。ところが、氏の工夫は理智的になつて、享樂の氣分を障害する。それがまた、こちらの理智的氣分になつて共鳴を呼ばれるが、あとではやはり物足らなく氣分が殘される。そのくせ、やはり吉右衛門氏は一番いゝなと思ふ。

白岡道太郎

中村吉右衛門は、私の最も好きな俳優です。あの人の味はちよつと刺身といつたやうな、凱切な所があると存じます。しかし、刺身のその凱切な味と云ふのは、もと、山葵による所が大で吉右衛門その人の中から、山葵を求めるならば、あのコウセキであらうかと思ひます。從つて時に山葵が利き過ぎることのあるのも、亦、止むを得ない事でありませう。聞いてゐて息苦しいやうな壓迫感を與へられるとき、或は胸の透くやうなとき、しかし、その何

れをも私は好きです。

風呂場の長兵衛をあの圓熟した手堅い中車に比するとき、ばかに若い長兵衛だと、思はずにゐられないと同時に寫實に過ぎ、そして、あのコウセキに壓されます。後者としては鳩の平右衛門なぞ、或はより以上のものに熊谷があると云つてよいと思ひます。兎に角私にはあの人の感味、あの人の個性が當代得難きものであると考へ、且つそのまゝ、グングン伸びてゆくであらう事を思ふと愉快になります。

本山荻舟

何しろ人氣の盛大なのに感心してゐる。そして、その人氣をつかむだけの藝の力をもつてゐるのだからゐらい。たゞこの人氣が現在の、ある期間にとゞまらず、永久の人氣となり得るほどの、更に一段の奮勵と努力とをすゝめる。

鈴木春浦

出發点を子供芝居の座頭から振出した吉右衛門は、市村座を脱して、一座をこしらへ子供芝居のその時の如く座頭で押通してゐるのは、多くの俳優中稀に見るものである。さうして父歌六には昔の役者の話は聞いてゐたのは、同人がよくもつと聞いて置けばよかつたと言つたこともあつた。世話物より時代物役者として立つてゐる吉右衛門は、時代物が自分にとつて演勝手が好いとして演出するには折から明治の大役者團十郎の藝風を慕つたことであらう。幸に小山氏（新十郎）あり、亡くなつた古い吉兵衛などもあつて、いろいろと呼吸を會得し參考にしたのであらう。併し又三郎が團十郎に顔付のごこやら似てゐて、團十郎の身振り歩きつきまで眞似たので二錢團州とうたはれた。それとは趣が異つて、團十郎を學ぶに及んで、時代物で成功したのであらうが、又團十郎が世話物で法界坊の時の番頭長九郎やら、又八犬傳で法市の龜笹で大塚蟇六などを輕妙に演じた成田屋がと意外な思ひをなさしめて喝采された如く、吉右衛門としても先達ての權三と助十で家主六兵衛、湯島掛額で紅屋長兵衛の如き、團十郎のそれらと相匹敵したものであつて、それが自然と大役者であると思ふのである

須藤鐘一

神經的な、尖鋭な感じを面白く思ひます。その容貌にも、その藝風にも。

鈴木善太郎

吉右衛門の喜劇方面の才能は曾て私に取つて思ひがけぬ發見でした。この方面に更に努力して貰ひたいと思ひます。

吉右衛門小論

高原慶三

ひこむかし前――

小宮豐隆先生が、その「吉右衛門論」に、

舞臺の藝は彫刻であり、役者は彫刻である。すなはち、役者は作家にして同時に作品である。吉右衛門の藝術はロダンの「祈禱」にも比すべく、吉右衛門自身はロダンと肩をならぶべきものだ。

と、いふやうな意味のことをいはれてゐます。

私ごも、當時の青書生は、小宮先生のこの卓拔な劇論に一も二もなく傾倒して吉右衛門の「オール オア ナッシング」な全精神的、全生命的な舞臺を見ながら歌舞伎鑑賞の上にこの「ロダンの彫刻」といふ言葉が、どれほどありがたく涙をこぼさせるほど吉右衛門讃美の熱をあほつたことでせうか。

「逆櫓」の松右衛門の名のりで二重から門口まで權四郎をつけまわしてのこころ――

「馬盥」の光秀が、花道で春永に『近う』といはれて腰を三だんに下げるこころ――

「盛綱」が注進受をすませて、正面襖への鮮かな引込み――

「寺子屋」の松王が二度の出となつて『先ほどはだん〳〵……』といひ、つけ廻しになつて平伏するこころ――

それらのズバリ〳〵と切り下げる印象的な簡潔鮮截な直線的手法こそ、ロダンの鮮かな斧の痕に手を觸るゝ氣持だつたのです。

◇

しかし、ロダンの彫刻は私ごものやうな精神的にも肉体的にも劣弱なグウタラな人間には少し重苦しくてたまりません所詮は博物館の藝術です。

そこで、モウ少し輕い氣持の書棚の上にでも飾つておきた

い小藝術的な彫刻がほしくならざるを得ません。それで手もとにある「中央美術」や「アトリエ」といふやうな月おくれの美術雜誌を、わけもなく頁をくつてゐるうちにふと、アーキペンコといふ人の立体派の作品が眼についたのです。

立体派といふやうな泰西新興藝術のむつかしい理論なんか私ごもには、とてもわかりつこはありませんが、あのクルクルとした曲線と簡單な直線のつながりのうちに、物の本体をグッとつかむで、細部は大恨を輪切にしたやうに氣持よく大膽にズバリと切離して、表面的には稚拙だが、動かすことの出來ない適確な要領を得た手法が私をして、めつたやたらにうれしがらせるのでした。アーキペンコなるかな！アーキペンコなるかな！

◇

おや、とんだ横道にそれました。

さて、本論の吉右衛門論に還ります。

東京生活から『さよなら』してモウ十年、吉右衛門の舞臺に接する機會も年に一回か二回かしか與へられない私ごもは吉右衛門を云爲する資格は毛頭ありません。

ですが、最近の吉右衛門の印象や、文獻などをたごると、ロダンの吉右衛門が少しづゝアーキペンコの吉右衛門になりつゝあると思はれるのです。

少し獨斷です。餘りに索强付會です。けれども讀者諸君のお叱りをもかまわず、私は盲蛇に怖ず、この獨斷論を推しすすめてゆかうとするのです。

◇

と、いふのは時代物に動かすべからざる地盤を築上げた吉右衛門の近來は、そこに新しい開拓として「湯灌場吉三」の辨秀坊主「權三と助十」の大家さん、「風鈴蕎麥屋」の又七など、世話畑に優秀な成績をあげつゝある傾向を御覽下さい。

そこにロダンからアーキペンコといふ私の獨斷論が生み出されたわけなのです。

大藝術の壓力感から免れて小藝術の輕い氣持の轉化です。

◇

最近の「天下茶屋」の元右衛門（寫眞で見たのですが）で太刀を大地につき刺して兩手を刀の柄において顎をしやくりあげた寫樂ばりの、あの型は相當誇張されながらも元右衛門の本体を要領よくつかむでゐる點、ごこやらアーキペンコといふ感じではありますまいか。

この傾向はズーッと前から「鳩の平右衛門」の花道の引込みを創案した頃からチョイ〳〵芽をふき出してゐたのではありますまいか。

一生懸命、双腕に力をこめて大岩を押してゐる形ではありません。一寸見には稚拙だが、本体はたしかに把握してゐます。それでゐてフレッキシブルにリズムが流れてゐるのです。

或は楷書から行書への轉化こも見られます。

◇

だが、このアーキペンコの手法が、かへつて失敗したものに去年見た「籠釣瓶」の佐野次郎左衛門があります。

調子の低い、ぬき衣紋してヘンに通人がつたあの演出は佐野次郎左衛門の本体をアーキペンコ式につかむだものではありません。むしろギクシャクして粗雜な近頃出來の臭味の多い奈良人形を思はせるばかりです。ならうこなら、奈良人形の方はお父さんの歌六でうち止めてもらつて、わが吉右衛門はあくまでも時代物にロダンであり、世話物でアーキペンコであつてもらひたいものです。

ロダンもアーキペンコの本体も究めず、しかも吉右衛門に對して最近智識をも持ち合はさぬこの拙い獨斷論によつて、吉右衛門の藝術を萬一冒瀆せしむるやうなここがあつたら、その罪は私一人が負ふべきものであるここを誓つて、こゝに謹むで筆をおきます（九州の旅より歸つて匆惶筆をこる）

舞臺の大きいといふ事

石割松太郎

藝は行屆いてうまいが、舞臺が小さいこいふ事が屢いはれる。この「舞臺の大きい」こいふ事は、何によつて然るかこれは分つてゐるやうでなか〳〵むつかしい問題だこ思ふ。先年私が市村座で菊五郎の源藏、吉右衛門の松王を見た事があつた。演出のいかんによつて、舞臺の色がかうも變るものかこ、私は驚いたのである。科に無駄を省いてさらりこした解釋、いはゞ洗立ての水髪を見てゐるやうであつたが、舞臺が小さい、舞臺のスケールがいかにも小さくて貧弱だこ思つた。この舞臺は、今は亡き故岡村柿紅氏の注文考案が多分に入つてゐるこいふ事を聞いたのであつた。

この間――こいつても、もう春こすぎて新橋演舞場で、菊五郎の判官を見たのだが、私は「大正の歌舞伎」だこ思つた

新しい歌舞伎の樹立だとまで思つて、實以て感心したのであつたが、舞臺がせゝこましい、大きくない。この時の吉右衛門の由良之助も、固より小さかつた。然しこれはこゝの例にはならないと思ふのは、この由良之助、ずんと貫祿が足らなかつたのである、私のこゝでいふのは後者の貫祿以外に舞臺の大きいといふ事を云ひたいのだ。

又京都でつい先頃吉右衛門の熊谷を觀たが、うまいと思つたが、舞臺の大きさが足りないのだ。これは何故然るか、何んとも口や筆では、私はとても說明し切れるものではないと思ふ。

これを逆の例によつてみると、大阪の巖笑は、昔の役者だあの舞臺はもう過ぎ去つた過去のものだ、臭い、古い、――といつてしまつてもいゝと思ふが、あの舞臺は大きい、一例が優が得意の藝だが、最近八千代座で觀た「市若初陣」の板額の如きが、そのいゝ適例だ、臭くもあるが舞臺は大きい。

この間歌右衛門が中座で「桐一葉」の淀君をした時に思つたとだが、畜生塚で淀君を福助が代つてゐたが、舞臺が小さいが、然し歌右衛門が蔭からせりふをいふて急に舞臺が、實に大きく感じたのである。

又鴈治郎の「室津の歌」「大阪の町人」を見るとあの舞臺の大きさが、狂言の邪間をしてゐる。いつか京の顏見世に出した、京の俠客助六も、鴈の舞臺の大きさが害をなした一例だ。これに反して鴈の熊谷陣屋、石切梶原、盛綱の如きは、舞臺の大きい事が、彼の藝をどれほど立派にしてゐるか分らない。

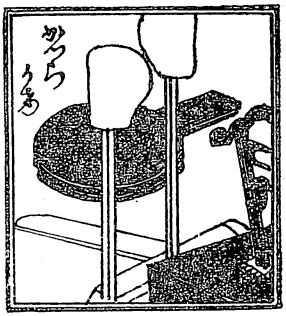
が、芝居は――歌舞伎の舞臺は何としても年々小さくなつて來た。その適例が、吉右衛門である、吉はうまい、あの調子、あの神經質ながら行屆いた、研究に研究を積まれた科は立派な藝だ、努力の結晶だ。が、併し舞臺は大きいといはれない。

これが私の吉右衛門に對する第一印象だ、常住普斷の印象だ藝が年々小さくなつたが、歌舞伎の舞臺の傾向が大きい舞臺を生むには適しないやうだ。

この理由は、私ははつきり答へることが出來ないが、活歷から寫實へこの舞臺が、段々せゝこましい事となり、英雄崇拜主義であつた藝の根本が、日常茶飯事にも劇的の要素を認めようと努力するこの傾向が近世の俳優よりも、現代の俳優をして小さくならしめたのではないかと思ふ。

私は吉右衛門のあの行屆いた藝を見るたびに、いつも〳〵聯想的にこの舞臺の大きい、小さいといふ事が頭に浮ぶのである。

こは歌舞伎研究者の、研究の好題目だと思ふ。



『白金の坩堝』の持主

――吉右衛門と井上正夫――

富田泰彦

◇私は今更らしく、吉右衛門論を書いて、彼の舞臺を評價しようと云ふのではない。恐らくさうしたことは、既に無駄なことである位は知ってゐる。吉右衛門禮讃黨の三宅周太郎氏に聞くまでもなく、彼の長所も一應は判る。だが短所もあるにはある。是れは、『人間』として、人格的にも、藝術的にも、こだはって來ることは、誰にでも免れることの出來ない宿命であると思ふ。

◇實際、私は此の長所も、短所も、ハッキリしない人間は嫌だ。だが有難いことには、藝術の方では此の二つを渾然鎔鑠さす處の『熱』と『力』とがあれば可い。それを模糊曖昧たるうちに、片付けて終ふなごは未熟であると云へる。

◇吉右衛門の名調子とかで、人は譯もなく騒ぐ、しかし私には左程にも、その調子に對して、尊敬の念が、きざしては來ない。寧ろ時としては、彼の誇張した演出に打ッ付かると所謂播磨屋臭味の來る場合が尠くはない。

◇それでゐて、吉右衛門の舞臺にはグィ〳〵牽きつけられるものゝあるのは何故。……

◇彼は如何なる役でも、先づその心持を、ガッシリ摑んでゐるからだ。『逆纏』の松右衛門でも、『壇特山』の熊谷でも『石切梶原』でも、『盛綱』でもさうだ。彼は與へられた戲曲の性質とか、持役の情操とか、演出の傳統とか、一切合財を、理智に富んだ自己の坩堝に打ち込み燃燒しきつたものとして、表現さすと云ふ細心な手順と、不斷の琢磨を經てゐる處が何よりの強味である。

◇此場合ハーグマンの史劇論を引合ひに出すのも變だが、

……史劇の困難な點は、過去の史的關係を寫眞のやうに復寫することでなく、その幻影を觀衆に起させることだ。舞臺は決して人類學や考古學の陳列館の職分を果すべきではない。我々は劇場に於て文明史の特殊研究や、また單なる眼の悅樂を欲しない。終始一貫した純一に働く全的藝術を欲する……こ云つてゐる。

◇この論據は、直ちに我歌舞伎劇にも當て篏められる。さうして吉右衛門の舞臺は尠くとも『終始一貫した純一に働く全的藝術』に向つて精進しつゝある。

◇私は吉右衛門の藝も、新派の井上正夫の藝も相似點があるこ思ふ。それに此二人は、不思議ごリアリストでなくて、その舞臺が恰も現代人の心持に、ピッタリこ迎合さるべき迫眞の藝を持つてゐる。リアリズムでなくて、迫眞の藝こは、妙な云ひまわしに聞ゐるが、兎に角此の二人は能く似てゐる。

◇要するに私の結論は斯うだ。吉右衛門も、井上も、新しき生命の躍動（勿論藝術的に）を感ぜしめるエネルギーの豐かな『白金の坩堝』の持主だつた。

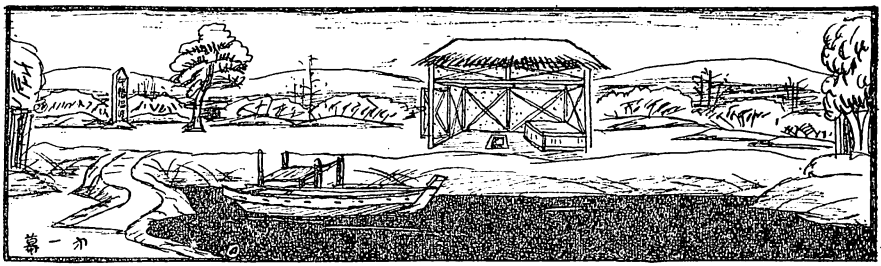
播磨屋素描

楠田敏郎

近頃の大向ふは、だんゞ紳士的になつて來た。殊に歌舞伎座や帝劇の客はさうで、好きな役者に聲を浴びせかけなくなつたが、それでも、菊五郎、左團次なごが出るこ鳥渡湧き過るほご聲が投げられる、そのうちでも、『播磨屋あ！』の聲がいちばん多い。所謂人氣こ云ふ點で、いまのこころ、吉右衛門が誰よりも華やかな名を背負つて居るこ見てさしつかひあるまい。

藝の若さ、こ云つても好い意味のそれで、力こ、熱こ、大きさが、看客の心へぢかにぶつかつて行くらしい。

私は、あの人が、盛綱になつてゐても、元右衛門の引込みをやつてもその姿のごこやらに、ふこ、書生つぽの姿こ云ふものを感じる。あの、澁味の出る一足手前、あすこが皆にたまらなく好いのぢやないかこ思ふ。



芝居見たまゝ

一番目

佐倉義民傳

三幕

——中座霜月大興行——

高橋茂登多樓

印幡沼の渡し

田に幡く可き種無く畑に耕す可き肥なき下總の公津新田、山痩せ河涸れたる野道畔道へ白雪霏々と降り、沼も、家も、見す限り一面の銀世界、石の地藏さんは頭に雪を戴いて寒さうに立つて居る其前に棒示杭、それに鐵の鎖にて小船を繫ぎ錠さへかゝつてある、蓆張りの番小屋には圍爐裡がチロリ〳〵と燃ゆ差子の袢天を着た渡守甚兵衛（紅若）が伊勢海老の樣に腰を曲めて寢て居る。

赤合羽に竹笠を冠つた石岡段平（三吉）が二人の仲間に提灯もたせ出で甚兵衛を起す「怪しい者が來たゝ早速に屆出よ」船の錠を調べ肩を怒らして去る、竹本のしめやかな音が聞にて來る。

上へ雪は頻りに降りしきる……

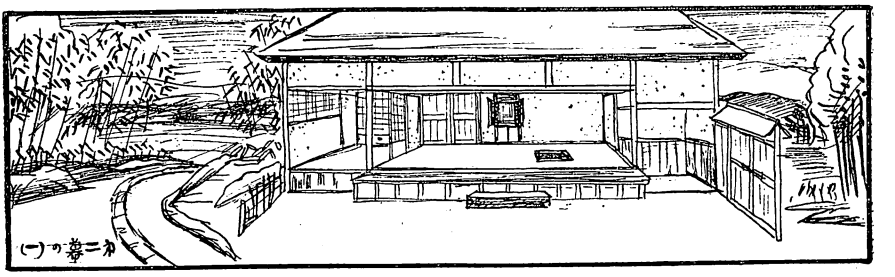
狹き道さへ菅笠に忍ぶ心の堪へ難く

辿り〳〵て木内宗吾……

小紋の脚絆に白足袋、淺黄の手拭で頰冠りした旅裝束の木内宗吾（吉右衛門）が出て花道に立さまる、合羽も三度笠も眞白に雪がかゝつて居る。

「願ひの爲めに江戸へ出て思ひの外に日數も經ち忍むで歸る故郷も、去年の冬に引かへて、田畑さへも荒れ果てゝ以前に變りし所のさま……」述懷の科白、やがて雪を踏み分け番小屋へ近づく「賴もう〳〵」甚兵衛は重ねてつぶやいた、嚴しきお觸れで夜中の出船はならぬと突飛鈍に斷はる、宗吾は周圍へ心を配り聲を秘め「甚兵衛、おれぢや〳〵」内を覗く甚兵衛顏を見て腰を拔かした「オオダ、且那樣かッ」「甚兵衛ッ」

上へ其儘引入れ立切る戸口、焚火を消せば黑煙り



第二幕の(一)

腕も拔けよと中へ引き入れて戸を閉め手盥を圍爐裡へ冠せ火を消す、宗吾煙に咽び咳き入る、聽て笠合羽を脫ぐ、髮も月代も濃く生ひ頰は削つた樣に瘦せてゐる

木内宗吾は所の名主である、不作續きに農民は困つて居る、にも不均、領主堀田上野介は苛酷な取立の新令を布いた。忠臣の諫言は領主の耳へ入らなかつた、農民は上納御免を代官へ嘆願し領主の許へ門訴した。代官は是れを强訴として取上げぬのみか名主を悉く囹圄の人とした、二百八ケ村の民百姓は飢餓に迫つた、宗吾は憤然と立つた是れを救う可く江戸の老中へ願つたが幕府の諚は是を容れぬ、絕對絕命最後の膽を堅め將軍へ直訴を企てた。さうして、せめて妻子に一と目逢ひ度く爰まで歸つたのである。

「それでは旦那樣はお國の深い樣子御存じはございませぬが」甚兵衛は水洟をすゝつた、「知らぬとはそりや何を」宗吾は膝を進めた「旦那樣が江戸へ立つた後は役に立つ者は佞人共の手で入牢、年貢の未納は水牢、代官の曰ひ附けを反く基はあの宗吾、歸國仕たら見附け次第に搦め捕れといふ嚴命、江戸へ通ふ要路の印旛の渡しは酉刻から領主の見張り嚴しく錠前下ろして船を出させぬ爲め商賣は上つたり」。

上へ露の命を漸々と繫ぐは船と諸共に筒袖の先で涙を拭く、聞く宗吾は聲を秘め、二百八ケ村の農民を代表して虐政飽くを知らぬ佐倉領主の不法を將軍へ直訴すると洩らした、さうして折角歸つて來たが、船を渡したら甚兵衛の後難が思ひやらるゝと此儘江戸へ引きかへさうと立上つた。甚兵衛狼狽て止める。

「一昨年の大煩ひに醫者よ藥と世話を受け命拾ひを仕て下すつた旦那樣、一命かけて船を出し奧樣や子供衆に逢はせませう」否む宗吾を無理無態に引摺り戻し船の中へ突き込むで鉈で柄も通れと棒示杭を斜に切り自分も飛び込む、船は渚を離れて左右に搖れる

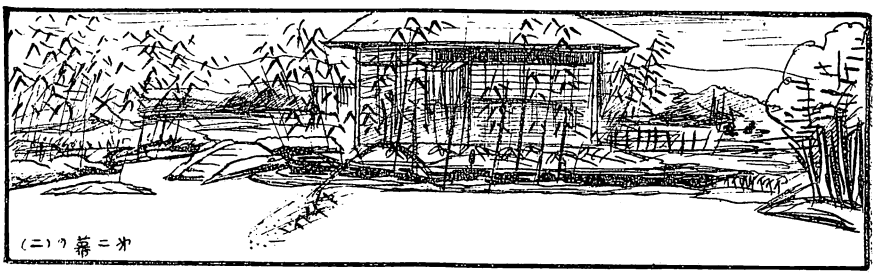
「甚兵衛、何んにも曰はぬ忝ない」

上へ禮曰ふも口の内……流れに添うて雪は皚々と降る、甚兵衛は腕に任かして漕ぐ。

宗吾内子別れ

軒傾き壁崩れ障子裂け疊また破れて居る。在郷唄が聞ゐる

元此家の奉公人、今は小作の女房三人訪れ居て江



（二）の幕

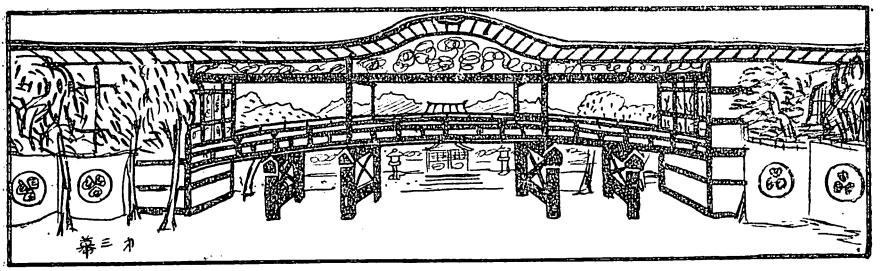
戸の様子を訊き、且つは苦しき生活を訴へ宗吾の女房おさん（時藏）から布子類を貰つて歸へる。おさんは長男彦七（みのる）の孝行を褒め、妹娘おとし（卯三岐）次男德松（小米）が溫和しく遊ぶゆゐと褒美の菓子を授け嬉ぶ顏を見てそと涙を拭く、雪は益々降り、竹本の聲は哀れに、舞臺は彌が上にも濕つぽくなる。

上へ尙降る雪の小獸みなく、我が家の軒
もわけ難き、吹雪もわかたず足早に
踏みしめ〳〵辿り來て……

宗吾が出て「おさん〳〵」と戸を叩く「誰方でござんす」「俺ぢや、宗吾ぢや」おさんは聞耳立てて密つと覗いた「旦那殿か」「おさん」戸は開いた、轉ぶが如く中へ入る「と、樣かッ」三人の子供は縋り附いた、宗吾は四月目に我家へ草鞋を脫いだ。彦七は何かと手傳ふが、おとしと德松は物珍しい眼光で頑是なく傍を離れぬ、おさんは宗吾へ洗濯物の着物を出して着替へさし其上から自分の伴天を脫いで肩へ掛ける

宗吾は問はる、儘に甚兵衛の親切で歸宅した事、親爺樣や江戸へ入牢の人々は兩三日を出でずして歸鄕の豫定と口籠りつゝも女房を慰め、江戸のお土產は明朝着衞と出放題に愛兒を慰撫する。

下手の竹藪から見るからに奸佞さうな頰冠にじて妾の不賴漢 幻 長吉（新十郎）が出て來て密かに歸つた宗吾を捕へて褒美の金に仕やうと毒牙を磨き雪持笹の奥へ小隱れする、とは知らず內には宗吾が是れのみは昔日の俤をまだ失はぬ先祖傳來の佛壇から位牌を出して妻子を集め、我家の系圖と仁義五常の敎訓をする「內中寄つて夜る夜中、お睦じいれ」長吉は皮肉な聲で窓越しに怒鳴る、おさんの齒の根は合はなんだ。宗吾はハッと色を失つたが弱身を見せじと强く出た「人の住居を垣越しに用があるなら門口から這入らつしやれ」妻子を奥へ入れて平然と迎へた、長吉は皿の樣な眼を剝いて這入る「密告すれば褒美を與にると代官所から賴まれた」と凄文句を並べて脅やかす、此以前から捕手が二人出て覗うて居たが「長吉急用〳〵」と呼び出し「御用ッ」と朱房の十手、長吉は脫兎の如く逃げる、捕手は一散に跡を追うた、宗吾は今はぢつと仕て居られなくなつて立上つた、女房は慌て遮り懷中から自分宛の宗吾からの書置を去り狀出した「申し旦那どの、コリヤ何んでござります、……妾しや去られる覺には無い、跡の難儀を思うての心遣ひは有難過ぎて情ない、何故妾も一所にといふて下さんせぬ、夫が罪を受けるなら



カ三幕

女房のわしも共々に」

上へ縄目の恥も何厭はん

おさんは宗吾の膝に泣き崩れた、宗吾は去り狀を引裂いた「そんなら何處までも夫婦の縁を」「縁らぬ印は眞ッ此通り」「是れさいふのも侯人共が理非辨へぬ非道の振舞」「旦那どの「おさん、甲斐なき夫婦の身の上ぢやなァ」悲嘆の涙にくれる嬰兒が眼を醒ましたと彦七が抱いて出る、二人の子供も走り出て江戸へ往て下さるなと取つく、遠の宗吾も四人の子供を抱き締めて頬摺し歎きに時を忘れた、丑を告ぐる鐘の音、モウ今は苛立たずには居られなくなつて立上り卿の小遣錢を無理に置いた。おさんは針箱から合藥を出して渡した旅裝が整へば前後左右から三人の子供が縋りつく具さに人生慘鼻の極。……

宗吾は遂に決然と拂ひ退け柴垣を踏み越す、舞臺は柝なしに半廻りとなり家の横手となる、おさんは子供を捧げて延び上つた「とゝさんいのウ、旦那どのウ……」哀れな聲で叫ぶ、宗吾は振返つた熱涙は泉と湧く、延び上り〳〵一歩々々雪中へ足を踏み入れる、竹本は哀れつぼく段切を語る

上へ屠所の歩みに異ならず、母がさし出す稚兒が、わつと泣き入る妻と子の血をはく思ひ別れゆく

宗吾は最愛の妻子を捨て笠を顔にあて刻み足に江戸へ向ふ。

東叡山の直訴

淺黄幕の外で菖蒲皮に羽織股立の侍四人が警固の打合をしては入る、柝の音で幕は切つて落された、宏壯なる朱の通天橋、紅葉は眞紅に染み、葵紋染抜の幕は張られ、おごそかなる鳴物と唄が聞こえて來る、扉が開かれ寛永寺智正大僧正（若猿）が七條袈裟に包まれて出る、麻の長社衿に小刀姿の德川第四代將軍家綱（友右衛門）續いて松平伊豆守（三津五郎）外四十餘の大小名がズラリと並び、將軍始め一同割科白となる

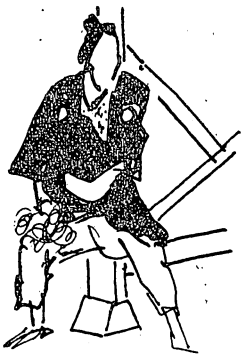
「松影にいふなる時雨洩りつらむ、機々を傳うて帆を覆ひつゝ」將軍は自作の即吟の短册を伊豆へ渡して朗ぜしめ諸侯を從へて三代將軍家光の廟前へ去る、讃經鉦鼓の音。

謠樣の淨瑠璃が聞こゆる、下手に張り渡した幔幕をぱっと揚げて、九曜紋附を着た男が出た、木内宗吾である。有り合ふ紅葉の枝へ願書をさして片唾を吞む警固の侍が見咎め捕へやうとする、

「還御ッ」伊豆守が出た「何者ッ」恐れ乍ら上樣

に直訴の者」宗吾は天にも響けと叫んだ、將軍始め諸侯も續く「ソレ其書面是れへ」願書は伊豆の手へ渡り、堀田下總守の暴政の條々洩れなく讀み上げ「驚き入つたる佐倉の虐政。去り乍ら倍臣の身として潛越の直訴、取上る事罷り成らぬ」訴狀は投げ返された、が、それは表包であつて、肝腎の長文は松平伊豆守の懷中深く忍ばれた。

「上樣には先づ御歸館遊ばされませう」「オヽ」莊嚴なる鳴もの警圍の侍は捕繩をさばく。



縛られながら最大の目的を達した　絕世の義人木內宗吾の頰には千行の涙が傳うた、が、それは嬉し涙であつた。

「佐倉義民傳」の劇評

岡鬼太郎

吉右衛門の宗吾、顏の拵へ好く、何か一理窟揑さうな處も役に嵌まつたり第一の出來は直訴にて、此の優の眞劍なる藝風が最も都合よく光らせられたり。渡場と家とは普通なるが、それにも無論弛緩は無し、何處となく代物の小さきは、故人達の演たのが此方の目の底に殘つて居るからの思ひ做し、初めて見たとすれば立派な者。

（大正六年四月、演藝畫報所載）

大正十四年　本郷座所演

三宅周太郎

一番目の「佐倉宗吾」の吉右衛門はあれで本格の宗吾には違ひない、それ所か「巧い」と云ふ意味では此人の藝の中では高い位置におかるべきものかと思ふ、云ふ迄もなく仁左衛門の宗吾などは論外だし、今では外にやる人がないだけでも獨得の價値はある

（東京日日新聞）

○

田村西男

吉右衛門、三津五郎、時藏、三升、福助などの顏觸れで、一番目は佐倉宗吾である、吉右衛門の宗吾は家の場で羽織が少し長くはないかしら、それに多少イキに見ゑたやうな氣持がした、三人の子供を抱へて我家の零落や、村の衰頽に心を傷める台詞の抑揚の巧さ實に堪まつたものでなく、何とも言へぬうまみがある、力ある熱に充滿した彼の藝風はいかにも見物をして涙に導いた、裏手の別れ殊に雪を蹈んで去る引込みが申分無い出來だつた。

時藏のおさんは顏のやつれを見せただけでも頗る成功してゐる離緣狀を見て恨む所などうまいものだ、そして三人の子役が如何にもよい。

（中央新聞）

吉右衛門昔語

—その他—

並山拜石

記憶は今から十五六年以前に遡る——

道頓堀の角座か辨天座へ、今は亡き歌六、吉右衛門、勘彌故人となつた菊次郎（當時は芙雀）などの一座が來たことがありました。

その時の狂言で、いまだに記憶にあるものは「石切梶原」「幡隨院長兵衛」「新皿屋敷月雨暈」などです。その配役としては、吉右の梶原と長兵衛、勘彌の宗五郎と水野、歌六の宗五郎父太兵衛と水野の臣阪田金右衛門、芙雀の女房おはまなどが、まだ心に殘つてゐます。就中「芝片門前魚屋」の場で、勘彌の宗五郎が、酒の醉が廻るにつれて、片口の中に仕掛けてある顔料で顔を赤く染めた仕種や、芙雀の女房が酒亂の夫の跡を追うて花道の七三にかゝつた時、裾をからげてきまつた形、そうして白い蹴出しをハラハラ、走つて行く姿などまで目にあります。吉右衛門の梶原が、例の刀をためす時に、その柄を白緒で卷く時の、手際のいゝ落付いた仕種や、石を切る時の氣組、それから長兵衛が、「劇中劇」の場で、見物席から出て舞臺の前を通り抜け、花道へかゝり、右手で一寸着物の下前をまくし上げて、金右衛門に向ふ鄭重な態度ミゞ金右衛門を刀の脊で打ちするゐる樣なぞ、誠に印象の深いものでした。

その後京都の南座で同優の同じ場面を見ましたけれども、この時の印象にはこても及びませんでした。何んだか知らー初めて吉右衛門を見た故でもありませうが、いまだにその時の印象が心の奥深くこびりついてゐて忘れられません。同優もまだ當時は弱年であつたでせうが……。隨分立派な俳優の藝も見ましたが、その作なり彼の藝の巧拙はこにかく、印象こ云ふ點から云へば、その時より優つた印象を受けた事は一度もありません。かうした譯合から私に取つては吉右衛門

は終世忘れられない人でありませう。

その時恰度私は平場の花道ぎはの五か六で見物して居たと記憶してゐますが、役柄とは云へ、子が親を、刀で脊打ちするなどは妙でないと思ひました。親子が親子の役になるのは自然で誠に結構ですが、舞臺とは云ひ條、毎日毎日親を打つなどは俳優としても氣持の好いとではありますまい。當時の吉右氏の感想はどうでしたらうか　聲も顔もクシャ〳〵してゐる金右衛門の歌六は子に打たれたのでした。子の舞臺の一擧一動を、自己の舞臺を忘れて嬉しさうに眺めてゐる親を、舞臺の上でよく見かけますがそれには故意の場合とありませう。あの折の歌六はどちらでしたらう、どちらにしても子に打たれてゐながら嬉しさうにしてゐたやうでした。世間によくある例の「親馬鹿」でしたらうか、偶然のことでしたらうか、或はいつもさうだか知りませんが、あの折長兵衛の口から臺詞と共に唾が重吹となつて出たのを記憶してゐます。唾と云へば延若もさうした傾きがあるやうですがどうでせう。

尚、あの折は「風呂の場」で血糊をドッサリ使つたやうに覺えてゐます。京都南座の折は使はなかつたやうでしたが……。これも時代の變化でせうか。芝居や活動の看板に血か使つてないやうに、人が斬られたり突かれたりしてゐるのに血が出て居ないやうに……。

その折は。至つて不入りであつたやうです。私が入場した時は――二度見物したと憶えてゐますが、平場、出孫、桟敷など何れも、實に曉天の星の如くに寂寥々たるもので、俳優諸君に對して（その時は仕打の方は考へませんでした）氣の毒で堪りませんでした。見てゐる此方がきまりが悪い位でした。何故大阪の人達はこんな立派な芝居を見ないんだらうと不思議に思ひました、實のところ、憤慨した位でした。大阪人士の觀劇眼を疑つたのでした。いや併し當時の人達にはツマラない芝居の一ッであつたかも知れません、少くとも私一人が力んで居たのかも知れません。それは兎に角、一座の人達か、大阪の人達にフワミリヤでなかつたと云ふのは見逃し難い一事實であつたでせう。歌六は別として、吉、芙、勘、など、その名だに知らない人達が多かつたかも知れません。

歌六、芙雀（菊次郎）は既に故人となりましたが、吉右衛門や勘彌の現在の名聲は大阪の人達にどんなに廣く知れ渡つたことでせう。彼等の藝術を知らないのは殆んどないと云つていゝでせう。その證據には、種々の因緣や宣傳もあつたでせうが、先頃吉右衛門が大阪へ乘込んだ時の人氣はどうでしたか！何んと云ふ素晴らしさでしたらう。その折は初めて大阪へ來たやうに、云ひ振らされてゐましたが、今から十幾年前に大阪に來てゐたのです。そして少しも顧られなかたのです。何んと云ふ相違でせう。吉氏にして當時の情況がまだ

記憶にあつたなら、その感想が聞きたいものです。その當時に於ける吉氏の藝術と現今のそれとを比較すれば勿論逕庭はありませう。進歩してゐるのはあたりまへでせう、併し今から十幾年以前の彼の藝術が、其の當時彼と同等位同年輩の俳優と比較して決して劣つてゐなかつたのです。優つてゐたのです。それでゐてあの人氣のなかつたこと！それも時代だ、と片付けて仕舞つて好いでせうか。

以上は古い記憶に基づして書いてみたのです。過誤もありませう。

大阪劇壇に籍のあるらしい俳優諸氏のことは暫く措き、東京のそれに屬するらしい人達のうちで、吉右衛門と菊五郎の二優のあることは日本劇壇の誇りとすべきでせう、（他にも勿論誇りとすべき人はありますが此處ではそれに云ひ及びません）然も兩優は體質、藝能、その他あらゆる點に於て、素質の異同はあるにしても、それらの點を基として、舞臺藝術の發露傾向が永久に並び論ぜられるでありませう。

今私はこゝで兩優の藝術を比較しようとは思ひませんが、書きながら心に浮んだ慨念だけを云つてみますれば、吉右衛門は仁木と云つたやうな實惡には長じてゐませうが、安敵には適しないでせう。先頃演じた元右衛門の惡評であつたのもその爲めでありませう。

これに反して菊五郎の好評であつたので解ると思ひます。菊五郎はそれらの安敵は得意です。

その躰格にしても一方は痩せてをり、一方は肥てゐます。それも自然役に關係してくるでせう。

兩者ともユーモアに富んでゐる點は等しくありませうか。一方は神經質らしく、見物を氣にします。その結果、見物にのせられるやうな氣味がありますまいか、他方菊の方は剛腹で無頓着（これは藝術的に無頓着と云ふのではありません）なところが見ゆます。

吉右は、その演出が大手で派出で、その結果臭味のある誇張に陷り易き杞憂を抱かされます。ごうも團十郎へ父歌六がちよいちよい顔を出すやうに思はれます。吉右はセッパ詰つてゐますが、菊は餘裕綽々たるところがあるやうです。先づ感じたまゝ順序なく述べれば、如件。

愚感三題

南木萍水

◇初代吉右衛門

傳統的に家系や由緒を貴ぶ歌舞伎道では藝名は最も尊重視されてゐる。だから機會さへあれば、藝が未熟でも貫祿備はらずとも先代を襲名し、人氣取りには緣も由緒もない故人の盛名を假りて改名披露をする。これ等の人は眞の藝道を無視し、先代の名を辱るといふものだ。處がその點に至つては大阪に於ては中村鴈治郎、東京に於ては中村吉右衛門は古今獨歩である、何れも初代であり、名優である。

名よりは實、自分の腕によりぐん〳〵延びて來た人である鴈治郎の至藝は鴈治郎の名によつて、ます〳〵不朽に傳へる事が出來、翫雀も歌右衛門も襲名する必要がない。中村吉右衛門の名は三代目歌六を凌いで辱しめる心配もなく、試練を經て、後世に初代として光を放つ事が出來る。

さきに華族に一代世を主張した人があつたが、藝道には未だ叫ばれない。敢て一代制度なぞゝ野暮は云はぬ。要するに襲名改名とも、餘程愼重にやつて貰ひたいものだ。それはさて吉右衛門の藝名は以前に當つて絕對に無かつたをといふに、さうではない。寶曆期の上方俳優に當時代表されてゐた姉川新四郎に次いで名高かつた中村十藏、これが晩年に中村吉右衛門と改名してゐる。武道實事を專問とし、堅實質素なる藝風を以て特色とした傳へられてゐる。

この吉右衛門の二代は矢張り中村十藏で終つてゐる。而して吉右衛門の名はそれ以來誰もが襲いて居らぬ。現在の吉右衛門の藝名は母方の父の本名萬屋吉右衛門の名を假り、名乘つたといふ事だから、無論初代吉右衛門として推奬する事が

出來る。好漢中村吉右衛門、初代吉右衛門として明治大正演劇史上に記錄されて、國寶こまで激賞されてゐるその至藝をして、ます〳〵光彩あらしめ後世の鑑となつて貰ひたい。

◇吉右衛門の顏

大阪の芝居錦繪畫家に天明以後明治初年までに流光齋、松好齋、春好齋、芦園、北洲、重春、北英、貞廣こかなり數多くの畫家が生れて、役者似顏繪を無數に畫いてゐる。ぞれを見ても個性がなく、同じ型に箝つてゐるので版畫こしては一向尊重されない。無論江戸の春章、春樂、豐國、國貞に比較されては藝術的價値は下つてゐる、が然しコツテリこした、重くろしい色彩畫風は如何にも上方氣分が現はれて、上方畫家でなければ、この濃厚な情味ある雰圍氣は到底描けない、この調子に特有の面白さを見出されるのである。

吉右衛門の顏は決して江戸前ではない。その當り藝からいつても上方院本ものゝ嫩軍記の熊谷、逆櫓の樋口、石切梶原こいつた役柄に相應しい顏である。つまり上方情緒の顏で、前記の役者繪に現はれたる似顏に髣髴たる處がある。そこで何んだか大阪役者らしい感じこ懷かしさを覺へるのである。最も先代歌六は大阪生れ、その血を享けて居る故かもしれぬ但し臺詞のメリハリやその藝風に至つては全々別趣の事である事を斷つて置く。

◇吉右衛門の清元

堅實な藝風、熱あり細心な演出、むつちりこした吉右衛門が、それでゐて何處かに愛嬌がある。彼が先年古式の船乘込をして中座で蓋をあけた、連日すばらしい人氣であつた。

その時大阪在住の清元好きの紳士連中によつて、清元の名取りである吉右衛門の爲めに歡迎清元會が大和屋の樓上で開かれた。木の香新しい樓上では吉右衛門が清元を一段聽かすこいふので、招かれた連中は書間から首を長くして待つて居た。巧拙こりゞ〳〵の旦那藝十數番を聽かされたので、聊かうんざりの氣味であつた。猿之助の齋宮太夫、已に定評があるが、吉右衛門の清元は未知數だけに好奇心が手傳つてゐた。十時過ぎにごや〳〵こ大勢の人に取卷かれて吉右衛門はやつて來た。黑の紋付羽織袴でいさゝか顏を赤めて、咽喉をシツプした白い切れが目立つた。舞臺で疲れて熱でもあるのでないかこ同情が起つた。最も咽喉を痛めてゐるこいふ前口上の挨拶があつて、やがて梅吉が立を彈いた。喜久太夫、家内太夫が脇へ廻つて、無論吉右衛門立唄である、この陣容堂々たるものだ。出し物は梅の春、清元生粹ではあるが、ちこ物足らぬ感じがした。それでも片唾を呑むで聽衆は耳を聳てた。華やかな前彈きにつれて唄ひ始めるこ、すべてが連吟である、やつこ『春景色、浮いた鶯の一二三四』の一くさりが吉

右衛門の唄ひ處で、ほんの時鳥の一聲だけ聽かされたので、一同は餘り呆氣なさに顔を見合せた。然しそれが頗るお愛嬌であり、馬鹿にされた感じも起らなかつた、そしていゝ氣持になつて散會した。

これも吉右衛門の持つ愛嬌の德であらうこと思ふ。

吉右衛門寸感

國枝史郎

吉右衛門ほどの俳優になること、あらゆる人によつて評價され、その特色その缺點、盡くされて居るやうに思はれます。この私なぞ劇の方面では、久しく他人になつて居ります。私見を彼に就いて述べること、却つて名優たる彼の聲價を、傷付けることも揚げはしますまい。だが、ほんの寸感を述べて見ませう。

(一) 悲壯美を端的に發揮すること、彼ほどの俳優は他には無い。

(二) 辨信、蝙蝠安に扮しても、彼獨特の味を出す。藝の範圍は充分に廣い。

(三) 眼の細い彼は下眼瞼の下へ、間を置いて隈を描く、さうして其眼を大きく見せる。さういふ細心が隨所に見られる。

(四) 彼の神經質は往々にして、英雄豪傑を近代化す。或る場合には成功し或場合には不成功に終る。

(五) どうにもならないといふ失敗を、彼は一度もしたことが無い用心堅固の贈物である。

(六) 彼の藝風は鋭角的だ。

(七) 彼はいさゝか不健康らしい。だが其不健康が彼の演技を少しも病的に導いてゐない。これは精神が健康だからだ

(八) 能を見るやうな息苦しさが彼の演技にもうかゞはれる。缺點では無くて美點である。

以上平凡なことを申上げました。

中座霜月興行上演台本

所作事 六歌仙の内

文屋喜撰

清元梅吉社中
長唄囃子連中
芳村伊十郎出勤

登場役割

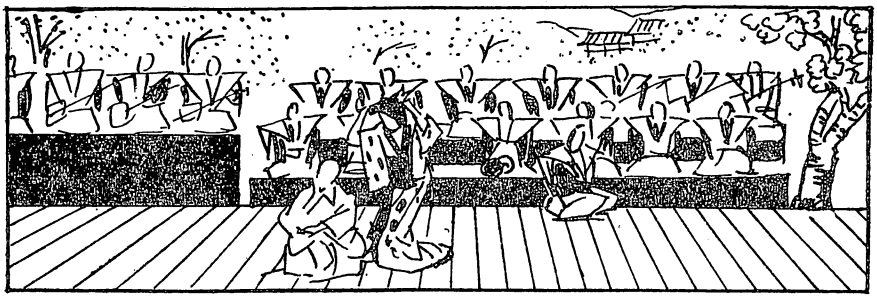
文屋康秀 喜撰法師 三津五郎
祇園お梶 官女 時藏
同 吉之亟
同 玉之助
同 三津之亟
同 大三郎
同 三吉
同 勝五郎
同 力藏
同 七三郎

本舞臺一面の御簾を卷きおろし有り御簾の内常足の二重、眞中に金襖、但し此の道具御簾にて隱し、上の方竹本連中出語り、臺下の方に清元連中の淨るり臺。何れも段幕にて隱し橋懸りの方へ黒塗りの衣桁、これに緞帳をかけてある。出入りある事、日覆より櫻の釣枝をおろし、爰に中二階の官女檜扇を持ちよろしく居並び音樂にて道具納まる。

（バタ〳〵に成り、橋懸りより文屋の康秀冠り衣、裳束さし扱の拵らへ、中啓を持ち出で來り、御簾の内へ思ひ入れあつて行かうとするを、三階の官女等出てよろしく留め、千鳥に入替り康秀眞中に留る）

〈ヒゞかぬ佇らねらひ來て、行くをやらじとコレまつた。

〈仇憎くらしいなんぢやいなア、おきよ所の闇まぎれ、晩にやいのこ耳に口、



〈むべ山風の嵐程、ごつこ身にしむ嬉しさも、

〈秋の原木のしほ〳〵こ、一人り寢よこは男づら、鮑の貝の片便り、情ないではあるまいか、

〈寄るを突きのけコリャごうぢや、鼻の障子へたまさかに、ねぶかのかほる仇つきは、時候遅ひの鰒汁で、一人ばかりが盛りかへを、しひ付けられて御馳走はそもそもお辭義は仕らぬ、これを思へば少將が九十九夜〳〵思ひつめ、

（官女からみ、よろしく振りあつて）

〈傘をかたけて丸木橋ぢや、おつこあぶないすでの事、鼻緒は切れて片足は、ちんがちが〳〵オ、つめた。

〈その通ひ路も君ゆゑに、衣は泥にあかつきの、すご〳〵歸る浮思ひ、ならぬながらも我が戀はすへつむ花の名代を、つきつけられて耻かしい、地下の女子の口ぐせに

〈田町はむかし今戸橋、法印さんのお守もねかして猪牙に柏もち、夢をながして隅田川、

〈男よけならそつちから、杯は高間が原の皮、よれる此の身のおかしさに、

〈逃げんこするを戀知らず、引止むるのを振りはらひ、

〈イヤ〳〵〳〵あふ戀待つ戀、忍ぶ戀

〈鴛はシテわい

〈もへぎのかや、

〈呼んで來い。

（よろしく振りあつて能き程に官女皆々出て）

官女一。何んこ皆さん康秀さまに何んぞ問ひかけて困らせやうではムりませぬか。

官女二。左やう〳〵まア何がよろしうムりますなア

官女三。何ぞむつかしい事を問ひかけやうではムりませぬか

官女四。オ、それ〳〵、いつそ戀づくしはごうでムりませうなア

官女五。コリャ戀づくしこはよい思ひ付でムんす

官女六。そんなら康秀さまに問ひかけませう

わいなァ

康秀。サァ〳〵なんなりこ問ふたり

問ふたり

六人。サァ〳〵問ひます〳〵

康秀。問はつしやれ〳〵

（キツチヤウ合方になり）

官女一。四疊半の小座しきは

康秀。それを圍ひこいふならめ。

官女二。妹背の中のかたらひは、

康秀。千代も變らぬ内裏雛。

官女三。彌生祭りのまゝ事は、

康秀。くわぬは損ぞや持つて來い。

官女四。番放れぬ鴛鴦は、

康秀。そりや島臺の尉こ姥。

官女五。白玉入れた汲たては

康秀。そりや氷水ひやつこひ。

官女六。大晦日にはいちやうに、

康秀。掛乞ならば後に來い。

三人。お舟は、

康秀。浮いて來い。

三人。こんぴは、

康秀。飛んで來い。

三人。からすは、

康秀。かつて來い。

三人。水鷄は〳〵〳〵

康秀。ム、、

〈ぎつちり詰つたやにぎせる、ゑくぼのいきの浮くばかり、是れぢやゆかぬこ康秀が、

〈富士や淺間の煙はおろか、衛士の焚く火は澤邊の螢、やくやもしほで身をこがす、そふぢやへ、

〈合緣氣緣はあじなもの、片時忘るゝ暇もなく、一切骸もやる氣に成つたわいナァそふかいナァ、

（よろしくふり有つて納る

官女皆々出て、）

〈花に嵐の色の邪魔よるをこなたへやり戸口、中啓さしてぞ走り行く

（康秀官女を突きのけ、上手へ這入る。

是れにて清元を消し、女皆官々起き上り）

官女一。ほんに康秀さまこした事がアイダ……。

官女二。是れはまァ怪しからぬ、アイタ……。

官女三。そうして何處へお出で遊ばしたやら、

官女四。なんでもお奥の方へ行かしやんしたわいなァ、

官女五。是れから秀康さまをつかまへて、

官女六。それ〳〵此のしかへしをせねばならぬわいなァ、

官女一。そんなら皆さん、

六人。康秀さまいのウ〳〵、

（やはり音樂にて皆々上手へ這入る

知らせにつき大御簾を切つて落す

向ふ三間の間出ばやしの雛段是れに一面の段まくはり。

下手淨るり臺、その儘にして、爰に長唄はやし居並び、直ぐに前引になる。）

〈世間を宇治へ退れて墨の衣手に、詫を浮世も氣さんじな、

（向ふより喜撰法師、腰衣の拵らへにて櫻の枝に瓢箪のつきしを持出て來り、花道へ留る。）

ヘ世事で丸めて浮氣じこねて小町櫻の詠めにあらぬ、きやつにうつかり眉毛をよまれ、

（正面の段幕を切つて落す、はやし連中居並び）

ウ ヘほうし〳〵はきつゝれのすけんぞめきて歸らりよか、わしは瓢箪浮身ぢやけれご、

キ ヘ主は鯰のこり所、ぬらりくらりこけふも又、

ウ ヘうかれ〳〵て

キ ヘ來りける。

（花道にて振りあつて舞臺へ來る）

ウ ヘもしやこ御簾を余所ながら喜撰の花香、茶の給仕、

（上手より茶汲女、好みのかづら、金糸にて縫ひをした半ゑり付の着附、緋の前かけの拵らへにて、かつぎを冠り、黒塗りの高茶臺へ銀ばりの茶碗をのせ持ち出て來り）

キ ヘなみ立つ胸を押しなでゝ、しまりなけれご鉢卷も、幾度しめて水剛棹濡れて見たさこ手を取つて、小野の夕立緣にしの時雨、化粧の鬼の手を組んで、ごう見直してごうぶるい。

ウ ヘけふの御げんの初昔、惡性こ聞いて此の胸が、朧の月や松のかげ、

キ ヘわたしやおまへの政所、いつか果報も一森こ、ほめられたさの身の願ひ、惚過ぎる程愚智な心の底の知れ兼ねて、

ウ ヘじれつたいでは、

キ ヘないかいな、なぜ惚れさせたコレ姉へ、

ウ ヘうぬほれ過ぎたわらぢやれな、わつちもそんならきをひはだ、五十五〆でやらうなら、廻りなんしへから〳〵鐵棒に、路次やしまりやす、長家の姉エが、てつぽう絞りの半衿り花見のきせるぢやあるめへし、すてきに首にからんだは、

キ ヘ廊下飛ンびか汕揚さらひ、お隣のおいらんへ、知らねねかほもすさまじい、なんだか高い觀音さま。

ウ ヘ鳩は五十や三重の、塔の九りんへこまりやす、

ウ ヘすいこ云はれて浮た同士。

（兩人よろしくふり有つて、是れより喜撰、櫻の折枝を、揚枝の心にて持ち前へ出る、）

ウ ヘヤレ花の世界に出家をこげる、ヤレ〳〵〳〵こまりにちよぼくれ。

キ ヘ愚僧が住家は、京の巽の世を宇治山こや人はいふなり、ちやら〳〵くちや、茶園のはなす濃茶の緣の橋姫、夕べの口舌の袖の移り香、花橘の小僧か、先より一散はしりにはしつて戻れば、内の嬶アが悋氣の角文字、牛も涎を流るゝ川瀨の内へ戻つて、我からこがるゝ螢を集めて手管の學文

ウ ヘ唐も倭も、里の戀路が山吹流しの

水に照りそふ朝日のお山に誰でも
かれでも二世の契は平等院こや、
去りとは是れはうるさいこんだに
ホウ、

キ 〈奇妙頂來ごら如來、
ウ 〈衆生手管の歌ねぶつ、
キ 〈釋迦無尼佛の床急ぎ抱いて寢はん
の長枕、睦言かわりのお經文、
ウ 〈なまいだ〳〵なんまいだ、なぜに
屆かぬ我が思ひ、ほんにさ、
キ 〈忍ぶ戀には如來まで、來て見やし
やんせあみだ笠、黄金のはだへで
有難い、
ウ 〈なまいだ〳〵、なんまいだ、なぜ
に屆かぬ我思ひ、ほんにサァ爰に
極まる樂しさよ
皆々引張にて。
よろしく

――幕――

六歌仙に就て

この「六歌仙」は平安朝初期、延喜時代の歌人である在原朝臣業平、僧正遍照喜撰法師、大伴黑主、文屋康秀、それに小野小町は紀の貫之が「古今集」の序に近世の六名家を論じて以來、六歌仙と並び仰がれた。彼等が歌舞伎の世界に入つては、先づ王朝御位爭ひの世界に活躍したが、やがて一方には當世流の風雅者として所作事の中に踊り出たのであつた。

所作事「六歌仙」の始めは「眠獅選」によれば寛政元年十一月に大阪中の芝居で初代嵐雛助が涙華の一世一代として上演した顔見世狂言の『化粧六歌仙』である。澤村國太郎の小町を相手に始め仕丁となり後姿を變へて小町を口説き落さんことを揑ひ、五役の早變りにて、末に實惡の所作、所作にして所作にあらず、その姿と氣持と變り目の妙は見物の大好評を博したとある。

×

江戸の舞臺に上演されたのは寛政十二年四月市村座の『化粧六歌仙』で二代目嵐雛助が六役早變りで踊つてゐる。今日六歌仙として傳はるのには更に增補して、天保二年三月中村座上場の『六歌仙容彩』で芝翫の五役に粂三郎の小町、作者は松本幸二、長唄清元連中である。

×

今度中座に上場される六歌仙の內「文屋」と「喜撰」は文久二年正月市村座に上演された。『六歌仙容彩』長唄常盤津連中で、六歌仙に祇園のお梶を配したものである。

×

六歌仙では他に弘化三年九月市村座に上場された『常盤津の六歌仙』があり、明治十年九月、春木座の『六歌仙狂畫墨塗』の滑稽所作事などがある、

吉右衛門論

山上貞一

『九代目市川團十郎と時を同じうして生れたのは最も幸福な事である』と或老人は言つてゐるが、私はそれと同一の歡喜をしかも初代中村鴈治郎と初代中村吉右衛門の上にみる。

林久敎授男は鴈治郎を『心より形』の藝風と言ひ、吉右衛門を『形より心』の藝風と謂はれて、恰もワグネルの音樂に比するにベートーフェンの音樂だと言つてゐられたことを記憶するが、私は鴈治郎、吉右衛門の此の二人ほど熱心に舞臺を勤めてゐる人はないといふ意味に於て、此の二名優に常に禮讃意りなきものである。

吉右衛門は最も歌舞伎劇に相應しい天分と聲音と格腹と名調子を有してゐる俳優である。だが彼の藝風は極く質實的である。そしてその効果は驚くべき偉大さを持てゐる。

それは恰も人としての吉右衛門が氣の小さい、そして病弱い男であるにも拘らず、その舞臺がいかにも大きく見に、豪放的な感じがするのと一味相通ずる點がある。

吉右衛門の科は一擧手一投足熱汗りんりたるものがある。その白はうめくが如く叫ぶが如く人の肺腑を強く貫く。だから一度吉右衛門の藝術に接した人達は、他の多くの俳優達に求め得がたい緊張味を覺にて、思はず肩を張り拳を握つて劇中の人となる。そして舞臺の吉右衛門と共に怒り伴に微笑することが多い。吉右衛門の强味は此の熱ある力演である。

然し冷靜に考へてみると彼が舞臺で流す汗は他の俳優が演ずる熱心さと同じ態度に於ても流れる所謂汗かきの汗かも知れない。私は幾度か此の汗に陶醉しやうとする自分を叱つてみた。然し次には吉右衛門の名調子なる白の活殺に苦もなく敬服して失つた自分を見ることが多い。

更に彼には九代目ゆづりの歌舞伎の洗練されたる良い「型」が隨時隨所に現出される强味がある。全く惠まれたる歌舞伎俳優である。私は更に吉右衛門の用ゐる衣裳に就て注意を怠らない。それは彼こそ九代目團十郎の好みを襲ぐものであると聞くからである。先年來道頓堀で多くの『熊谷陣屋』を見た。多見藏、延若、鴈治郎それ〴〵好みに依つて、熊谷の衣裳中袴が赭茶となり濃緣となり或は白に銀ずりとなつたが、後京都南座で吉右衛門の熊谷を見て始めて眞の熊谷に逢つたやうな氣がしたのを記憶してゐる。

又吉右衛門の熊谷だけは『敦盛卿』を決して『あつもりけ

う』とは言はないで、『あつもいけう』と呼ぶとか。それが如何にも大芝居に相應しく聞こ九代目團十郎より傳はつたものだとか聞いた。愚按するに團十郎敦盛卿の讀に通ぜず振假名の淨瑠璃假名のりをいに讀み誤つての事かとも私かに思ひ又憶測を巧しくして、非常な熱演の結果語尾に力を入れた爲めに『りい』となり、果てはりの音を消していのみ高く聞こたのを、斯くは言ひ傳へたのでないかとも思ふ。

吉右衛門は大阪には珍らしい俳優である。一昨年の十月三十一日しかも天長節の吉日に二十五年振りと稱して華々しく船乘込をして來た。その時は一番目に『清正誠忠錄』中幕『ひらかな盛衰記』二番目『籠釣瓶廓醉醒』を演じたが、すばらしい大入をしめた。そしていま十一月興行の中座に出るこ云ふ。足掛け三年目の出演であるから、彼を待ち兼ねてゐる人の多いことは必然である。

今度は何を演ずるか解らないが、いつも感心に堪へないことは吉右衛門が役々の性根を確かに握つて、あの渾身の誠意をもつてその性格に成りきつて了ふことである。『清正』の如きも中車以上の深みを見せてくれるし、『松右衛門』に到つては特にその感が強い。わけて濱邊の拂物の殺戮は何人の隨從をも許さない好い『型』がある。『先陣館の盛綱』の如きも『熊谷』と同じく鴈治郎とは違つた味で彼には彼の特徴を窺ひ得る。『鳩の平右衛門』の如きは當代吉右衛門に待たずばなるまい。又『幡隨院長兵衛』は中車ほど思慮くさくなく、あの若さこ熱氣さでいかにも長兵衛らしいこ思つた事がある。『籠釣瓶』の治郎左衛門は左團次よりも彼の方をこる即ち吉右衛門の豪放的な感じのする藝風は歌舞伎傳來の大時代物、金ぴか物によく、彼の小心なる人間性はまた純世話物の主人公に成功する。この二つの特點を伴に見得るこいふ意味から言つて私は『一條大藏卿』を最も見たいこ思ふものである。又今月東京にて大當りをしめてゐる『忠臣講釋』の重次郎や、恩師岡本綺堂先生作の『風鈴蕎麥屋』の蕎麥賣又七の如き臆病者がふこしたことから犯罪に戰く役柄を想ひ惹す時、蓋し適役こして成功は眼に見るやうである。

然し、私は吉右衛門に特に俟ちたきことは、彼に依つて傳統深き歌舞伎劇の代々の名優達が苦心の結晶こも言ふべきあの麗しき多くの『型』を、次の時代に教へ傳へて欲しいことである。此一事こそ今日吉右衛門を措いて他には求め得ない彼の一舉手一投足は私達劇愛好者が憧憬してやまない、團十郎の『型』であり、團十郎以前の諸名優の『型』であることを思ふ時、吉右衛門こそ日本劇壇に歌舞伎劇の眞隨に後世永傳襲する唯一の偉勳者であることも言はれる。私は吉右衛門が團十郎直傳の素養こ研鑽を更に〳〵練磨して、あの名調子こあの彫刻美の如き藝風こでひたすら精進せむことを希ふものである。

劇壇漫語

うざいけ

鴈治郎、福助が東京へ出かけた跡へ吉右衛門が來て二年振のお目見得をしてゐる。派手な鴈治郎から地味な吉右衛門へと自然も秋から冬へと歩みを早めてゐる筆者も氣をいらだてゝマンゴとせう。ないやうなことを御披露に及ぶとせう。

ある夏の××地方巡業のある興行地で人氣に煽られた吉右衛門一座は土地の宿屋に分宿してゐた。吉右衛門といふ人は何處へ往つても又五郎、正太郎、米吉、時藏を自分と同じ宿へ泊めなければおかぬ至純至情の人である。其時の興行中のこと米吉が宿へ歸つて吉右の室へ挨拶に行くとムッチリしてゐる。氣拙い思ひで室へ戻つて膳につくと箸を取られないみじめな調理に其まゝ寢てしまつた。その翌日は足を早めて今日は何如だらうと歸つて來て見ると山海の珍味で大勸待の有樣に、米吉默然として考へてゐたがハッタと膝を叩いて、ハハン兄哥は搦手から俺を躾けやうといふのだな。それからの米吉は新聞の天氣豫報を見るやうに、献立の如何によつて兄の御機嫌を察知することにしてゐるそうな。

◇

名子役の又五郎の名ゼリフを御披露いたしませう。旅先では新聞社の演藝記者諸クンが宿へ押かけてゐつてこの小名優を押ッ取卷いて何かと訊きたゞすさうだこれは某地でのこと、有數の記者諸クンが又ちやんを料亭へ恭々しく案内してゐつた。又ちやんは俺をどうするんだらうと大きな眼をギロつかせてゐたが、其中に一人が貴坊がこれまでにつきあつて來た名優の中でだれが一番に、人やとふと聞いた――勿論其時の狂言は熊谷陣屋であつたので熊谷役者のことであります。

さうすると今一人が無遠慮に羽左衛門と鴈治郎と、吉右衛門との中でだれがだれが……と聞き直した。

又五郎小名優は開き直つた。席の人達はどんな批判めいた事が朱唇から洩らされるかと胸をワク〳〵させながらかしこまつてゐた。

「皆さん私の小四郎を引立つて下さつた伯父さんたちは、みんな同じやうに思はれます……」と明快に答へた

一同は無言のまゝに顔を見合はせて一樣に又五郎を見つめた。

又五郎はニコ〳〵としてゐたと……

吉右衛門と歌舞伎劇

川尻清潭

吉右衛門は歌舞伎劇の研究を、生涯の仕事こしやうこ仕て立つて居る俳優である。

そうかこ云つて、全然新作に手を附けないこ云ふのではない。自身の體に箝る役でありさへすれば、人一倍に骨を折つて研究もする。從つてそれだけの効果を擧げ得る腕前ば充分に持つて居る、要するに藝熱心の俳優なのである。

但し歌舞伎劇こ新劇こ、この、ごちらに興味を持つて居るこ云へば、本人は無論歌舞伎劇を生命こして、それで研究に沒頭したいのが目的である。然り、何百年の傳統のある歌舞伎劇の味ひを保存する俳優、その一人が吉右衛門である事に於てこれは最も適任でもあり、且又それを吉右衛門が一生の事業こする事も、決して徒爾ではないこ信ずる、

尙又吉右衛門の特長は、其歌舞伎劇の役々に就て、一度上演した物を二度三度上演する事に依つて、いよ〳〵藝が深く味ひが出て來る事である、普通の俳優が、一度手掛けた役を二度目に勤める時には、必ず初めより見劣りのするのが當り前である。これは數多くの俳優の例に徵しても明かな事實であるのに反して、吉右衛門の場合はそうでない、二度、三度四度、五度こ數を積む程腕が冴にて來る、當然そうあり得べき事であり乍ら、普通の俳優には斷じて出來ない難事である吉右衛門は立派にそれを成し遂げて居る

今や時代の進化に伴つて、新劇方面に一種の腕前を作つて行く俳優は少くない。又將來こもにます〳〵殖にても行くであらうが、反對に余命の短い歌舞伎劇に、其傳統を得る俳優は曉の星の如く段々こ消にて行く折柄、一人の吉右衛門に依つて、純歌舞伎劇の系統を完全に傳へ得る事が出來るならば、吉右衛門の仕事は日本劇壇の爲に、大なる偉勳者であらねばならぬ。

吉右衛門に就ての私の感想

落合浪雄

吉右衛門の藝の範圍は非常に狭い、だが非常に強い。

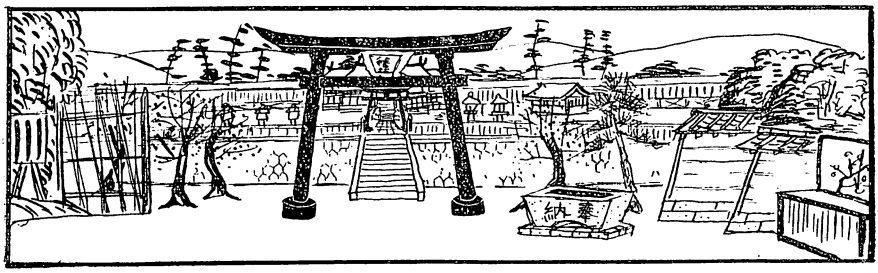
吉右衛門の藝の範圍はクラシックに止めを刺す、今度の石切なごは鴈治郎こは違つた味で確に吉右衛門のうまさ、こその強味、その熱を出すに恰好なだし物であるこ信じる、地震の加藤、毒饅頭の加藤、近江源氏の盛綱、なごは役こ俳優こが混然こして、一つの珠玉こなり至藝こいひ得る事が出來よう、けれごも、此頃やつた元右衛門の如きは不出來こいふよりは氣の毒で見て居られない處がある。それは吉右衛門のこの上のクラシックのギゴチなさで器用な手際が乏しいからでもあらうが、もつこ大きい問題は吉右衛門の性格があの元右衛門なごには扮し得られない程、眞面目さで固まつて居るからであらう、ごう見ても義理に迫つてわざこ主人に惡たいを突きそしてそれを殺すこいふ具合に見にて、憎らしさよりいぢらしさが見にて來る。

同じく世話がゝつた役でも鳩の平右衛門こ來るこ樂々こそして手一杯に十分の藝を見せる、だから、吉右衛門の落付こいふより性格は眞の立役、日本に傳統的に傳へられて來た忠君愛國、義理人情の中心こなり得る立役を選ぶ事が、單にクラシックこいふ處を更に又狭くして居るのではあるまいか

併し吉右衛門こしては其狭さを氣にする必要はない。其狭さに十分の強さを現はしてクラシックの俳優こしてたつた一人である事を誇り得るこ思ふ、それは吉右衛門でなければクラシックに生命をこめて見物を如實の境に引き入れる力こ熱を誰も持つて居ないからだ。

此頃の役者は舊い狂言を古物扱ひにしてやる、型だけを見せれば好い、古風にやらう、こそれを全部の目的にして居るのが多いのだから、吉右衛門の石切、それを鴈治郎のこ較べるこ此點大いに分るこ思ふ。

吉右衛門の藝は狭い、けれごも強い、熱がある、力がある私は吉右衛門のそれを珍重し尊敬する。



芝居見たまゝ

中幕『梶原平三譽石切』

—中座霜月興行—

朝生順三

登場人物

梶原平三景時　吉右衛門
大庭三郎景親　九蔵
俣野五郎景久　吉之亟
大名　大三郎
仝　三吉
仝　力蔵
仝　八十助
飛脚谷山早介　七三郎
罪人呑助　若猿
六郎太夫　友右衛門
娘梢　時蔵

その他小姓、侍、足輕
家來大勢

星合寺の場

正面石の玉垣、櫻の立木多き境内にて、遠く觀世音の佛殿をのぞみたる景、すべて鎌倉星合寺馬場先の体にて幕明く。

大名四五人弓術けいこの姿にて一休みのうち頼朝蛭ケ小島に流人となつた後行衛知れずなつた噂をして居る處へ、大庭景親、俣野景久兄弟が下向して來る。

お互に戰場の功名話に一盛り聲高にも成らうとしてゐる時

聲「景時參詣」
大庭「何景時の」
一同「參詣とな」
床の淨瑠璃になりへ勇氣は鬼も取ひしぐ
梶原平三景時――
にて上下太緒の草履、續いて若侍
俣野「是は〳〵梶原どの今日御參詣なら
らば御同道いたさふもの」
大庭「存ぜぬ事とてお先へ推參」
一應の挨拶輕うに受け
梶原「ホヽオ打揃ふて御信心な儀」
と一同にも目禮して座に直ると共に
梶原「此度石橋山の戰ひに味方の勝利
は觀音の御利生、なほ此上ともに佛
の力を信ずるにしくは么らぬ」
と聞いて俣野は佛頂顏に
俣野「イヤ觀音の力を賴んでとは武士
の言葉か、われ〳〵つひ普門品一卷
よんだ事はなけど鬼神とも呼ばれし
眞田の與市をとり押へ、かき首せし
は我が强力、又兄大庭が軍術に秀で
し爲の勝ち軍、それに觀音の御利生
とは勝まじき軍にも勝つた樣な御一
言チトおたしなみ召され」
と嘲笑はれて梶原云ひ爭ふも大人氣なし
と感じてか、柳に風と言葉を控へ
梶原「如何さま御兩所の武功によつて
勝ち軍すればこそ、かようにのどけ
く此花を眺めらるゝとゆふもの、幸
ひ……」
と持ち合せた提重の茶辨當をすゝめて、
花の下にさしひろぐる所へ靑具師六郎太
夫娘梢を伴ひ
六郎「オヽ娘あれにござるがお殿さま
じや早う來やれ〳〵」
とづかゞ通るを大名とがめるに
六郎「大庭さまに御願の筋が御座りま
して」
と兼てより大庭の所望にかゝる名刀を急
に金子入用の事があり今日の參詣を見か
けて參つたと思ひ入つて賴むに大庭心に
當るか
大庭「ホヽウ聞き及ぶ靑具師六郎太夫
とは其方か、刀を持つたと重疊々
々、幸ひ是れに在す梶原どのは本阿
彌勝れの目利上手、くつけうの折柄
なれば心に叶ふなれば望み通り金子
も吳る」
と聞いて心に染まぬながら鎌倉殿の爲軍
資金の一助にもなる事と一生懸命娘も
共々喜び見せて、差出す一刀、梶原はつ
くしみ深う
梶原「六郎太夫とやらが所持の刀いは
ゞ彼が家の寶、兎や角申すは、不遠
慮千萬……」
と辭退するに大庭兄弟强いて折入つて
賴み込みます
余義もなう梶原は然らばと、つつと立ち
松かげの手水鉢に向へば六郎太夫に吃驚
言葉せはしく
六郎「アヽ申 我々づれが所持の刀、
お目利下さるさへ憚りあるに御叮嚀
なお手水には及びませぬ」
梶原「イヤ〳〵たとへ持手は誰れであ
れ、名作の劍とあれば、日本の神寶
おろそかにはせまじ」

と禮儀亂さぬ清めの手水劍の袋押戴いてためつすかしつ、拔けば玉ちるの譬の如く一點くもらぬ名作

梶原「ハテ見事」

と感にたゑぬ面持にて

梶原「遙れ稀代の劍、身不肖なれども平三景時、かゝる名作手に觸れしは今が始めの終りならん、尤も無銘と見ゆれども、定めて是は出所も」

と一寸考へ込むが、氣をかへて

梶原「大庭どの家の寶といたされ」

と聞いて大庭も機嫌よく

大庭「御目利で左程迄に御賞美あれば確かな道具……」

したが　金子はと問はれ　六郎太夫娘とも〳〵云ひ兼ねる有樣なれど思ひ切つて三百兩と出るに案外大庭はうなづき、金子取らせる迄になつた時　弟の俣野忠義顏して憎々しう

俣野「兄者人ちと念が足り申さぬ此劍草薙の寶劍、村雲の御劍にもまさる上出來にもせよ切れ味惡しうては……と云ふに大庭も尤らしう大名方さへ口々に、したり顏、梶原むつとすれど心の內に了簡せる樣樣。六郎太夫はおさまらず

六郎「イヤ申俣野樣、憚りながら切味は目利と添ふ事、その上に此刀二ツ胴は豆腐切るよりいと易しと申傳へた重寶で御座ります」

と押强う云ふを憎しと

俣野「だまれこやつ、三百兩ほしさに押賣りせうとは……」

とはやるを梶原押しとゞめ買ふてやらずば彼も本意なく思ふであらうと暗にためし斬りを承知する

大庭は死罪の者を連れて來いと申付け家來二人引下ると入れ違ひに旅侍、飛脚狀箱をかけて罷り越し伊東入道よりの書狀を渡す

大庭讀み下すに賴朝は三浦大助をたのみ衣笠城へ立籠つたとの事、人々血氣に騷ぎ直ぐにも出陣とはやるを、未だ陣ぶれもなきうちに動くは匹夫の勇と、たしなめられて、幸ひ試しものを見るも後學の爲と居直る折しも、先程の侍

侍「獄屋の帳面吟味せしに死罪と極る科人は只一人、二ツ胴のおためし如何計らひませうや」

といふを大庭は

大庭「それがしの刀の爲に落着もせぬ科人を切れもせまい今日は此刀を持つて歸れ」

と云ひはなされて六郎太夫當惑の色を浮ぶるに娘も氣色ばみ

梢「サヽとゝさん立たしやんせ、さても叶はぬ願ひの筋、よしない事を云つてゐる手間で、私やそれな……、今の處へ奉公に行けば、のぞみの金はツイとゝのふではござんせぬか、早う戻つて談合して下さんせ」

六郎太夫は思案に心いため、さしうつむいて居たが、フト思ひあたり、二ツ胴切の極め書付があるを娘に取らせる故それを證據にして下されと、娘を家へ歸らせ、さて改めて六郎太夫、一人不足の胴切に、自分をためしてくれと思ひ入つ

て頼みます

六郎「伊藤様の證文ありと申したは僞り、娘がそばにつき添ひ居ては、見殺しにはしますまい、老がのぞみを聞わけて命を召されて下さりませ」

と詞をつくし頼む不憫さも大庭は刀欲しさにものゝ哀れも感じなく

大庭「願ひの儀聞屆けた、金子は娘に渡してやるは」

といふに六郎太夫、覺悟の姿を罪人と合はせる、こちらは科人ふるへ聲にて（酒づくし）切られぬ先から魂を迷はせてゐる

大庭は弟俣野に切らせんとするを梶原面色かはり

梶原「アイヤ待たれよ俣野どの、この梶原に目利をさせ一言の禮儀もなく御邊が試さうとは餘りぶしつけ、無禮で御座ろう」

と言葉荒らげるに俣野驚き梶原に刀差出すを受け

梶原「いかさまこりやこうなうては叶うまい」

と刀ひつさげ歩みより

梶原「コリヤ六郎太夫、先刻よりのあらまし承り居る、老の命を輕んじて我子を惠む神妙感ずべし、この梶原が乞ひ受けて手にかくるは、其方が最後を清くせん爲」

と情けある詞に六郎太夫うれしく誰あらう阪東一の文武の勇士、梶原様に試ざるゝは果報と、眞實に喜ぶらしき有様に梶原も貰ひ泣きの折しも、娘は僞られたともしらず、極め書付の在り所知れずに戻り來此有様を一ト目見るより走り寄り

梢「ヤ、とゝさんを誰が縛つた何の科で御座んす」

と血相變へるを家來に支へられワッと泣き伏すを六郎太夫

六郎「オゝその驚きは尤も、氣を靜めてもう泣くな、まだ〳〵此上にどの様な悲しい事があらうとも必ず恂りするなよ、仔細はあとで合點が行かふ、梶原様、娘がなげくを不憫と思召しサア一と思ひに」

と聞いて娘はそれと察し、さては身を捨てゝ迄試さるゝかと

梢「如何に刀が賣り度いとて親を殺した金がどうして持つていなるゝものか、もうし梶原様必ず切つて下さんすな、そのかはり我身をためしたい程ためして下さりませ」

御慈悲々々々と身をあせり立てゝ泣きさけぶ。

六郎太夫怒つて見せても聞入れず

梢「親の死ぬるを見て夫へ義理を立てやうとは思ひませぬ、こんな事ならお前に知らさず傾城奉公に行つたものを」

と梶原にすがらんとするを警固のものに支へられ、大庭にとりなし頼むやら、居並ぶ大名にも助命願へど取りつく人もなく拜んでまわるいぢらしさに

六郎「エゝ情ないアノ娘をあちらへやつて下さりませ」

といふに棒突梢を引のくる、なほも進む

を當てられてウンと悶絶する大庭兄弟はもどかしがり

「イザ御苦勞ながら」

と頼まれ梶原は始終哀れに見て居たるを心をかへて靜に肩衣をはれ刀のさげ緒を襷にかけ六郎太夫を下に罪人を上に二つ重れの前へしづ〳〵と寄る

六郎太夫は觀念の眼をとぢて居る、大庭兄弟、居並ぶ諸士も、手に汗握る、

「エイッ」

と一ト聲太刀先鋭き拜みうち……。

娘はハッと正氣づき見れば罪人は眞二ツなれども、六郎太夫は繩目のみ切れ身には卯の毛程の疵もなし

梢「申しとゝさまお前は切られはせなんだ」

六郎「イヤ、おりや、切られて死んだ〳〵」

といふうち身内をなで

六郎「ヤトコリヤどうぢや」

梶原は腕と目利の上に降る、不評を待つかに、苦がり切つて居る俣野はしたり顔

俣野「さてこそ〳〵大方こんな事であらうと思つた」

大名共々罵り笑ふに梶原ただ面伏せに居るを皆々捨ぜりふして打つれ立かへる、跡には六郎太夫齒がみして口惜しがり

六郎「チエ、二ッ胴が切れれば、それまでなれど、大がたり盜人と罵しられ、あまりと云へば口惜しい」

と件の刀にて腹切らうとするを梢慌てゝ止め氣が違ふたかとさとりつき嘆くに六郎太夫は、聟に引受けた金も出來ず、刀はなまくら、人のもてなす言葉に乘つたが面目ないと、尙も死なうとするのを、梶原刀をもぎとり

梶原「かほどの業ものを、切腹にけがすは恐れあり、二ッ胴はおろか、眼に見へぬ鬼神も切るべし、……」

とて先刻の繩目のみ切つたは手練の賜もの此刀我れが買受ける

と聞いて二人は恟り顔見合せて喜び合ふ

梶原刀をつく〳〵眺め

梶原「ホヽウ此刀の造りざま、詞のはしく、大庭兄弟等の手前を包みわざとそれとは云はざりしが、コレ見よ差裏にあり〳〵と、八幡と云ふ文字あり」

奥ゆかしくも賴もしく源氏にゆかりの者と察し、實名をと念頃に尋ねられ、娘はそは〳〵直ぐにも明さうとした時六郎太夫は遮り

六郎「由緣のものと勇者の日に見られし上は爭ふべきにあらねども、平家方の梶原樣に、夫ぞと名乘るは大きな不覺、御恩は御恩、敵は敵、それが憎いとて、お手打にあへばあへ次第と」

木で鼻くゝつた挨拶

梶原「遁れの忠臣、其心底見る上は、某の心底御聞かせ申す」

と家來をしりぞけて聲ひそめ、去る頃松山で落人になられた源氏の大將兵衛佐殿臥木のかげより引出しよき敵なり討取らんとせしも、お姿見れば、自然と備る武將の品位梶原づれの侍が討奉るは、

おそれあり、當時は平家にくみすれども先祖の古主に、返り忠とならば、よも二タ心とは云はれまじ、御運の開くる時節あれと、お命助け參らせた、表は平家の侍なれど魂は源氏の家臣と心の機密を物語るに六郎太夫安堵

六郎「なる程そのお心を聞く上は包む處もなし又名作の證據もなきに此刀を押賣と云はるゝも口惜し」

梶原「オ、それこそは梶原が名作の證據を見せん、

ハテ何をがな……ムウ幸ひ」と立上りわざと二人を引立てゝ、日影にうつす二ツの影

梶原「見よ、あり〳〵と二ツの影を今手にかけて試しもの死するものには影なしと、云ひ習はせしも時の重寶」

と云ひざまサツと切る青目の石水鉢ザツクリ切れて二ツに割るゝ

六郎、梢、驚き入り

梢「アレさゝさん」

梶原「つるぎも、つるぎ」

六郎「切り手も切り手」

梶原「フフー鎌倉殿の政務の沙汰、守護なすにはコレ屈强の稀代の業物」

六郎太夫、梢、よろこぶさまうつゝなく

梶原名作を感に堪へる有樣

〈親子をともなひ立歸る、家の苗字も矢筈紋

梶原「兩人參れ」

〈今にその名をにて大きく

——幕——

吉右衛門に演ら せたい狂言

北條高時、腕の喜三郎、大藏卿、勸進帳、佐倉宗吾、今木傳七、大口屋曉雨、加藤清正、鱶七、石川五右衛門、赤子屋、石切梶原、新樹、御柱、酒井の太皷、幸崎伊賀守、遠藤盛遠、佐野次郎左衛門、馬場三郎兵衛、河内山宗俊、明智光秀、紀有常、由良兵庫、幡隨院長兵衛、唐木政右衛門、小野道風熊谷陣屋、羽柴久吉、春藤治郎左衛門、梅の由兵衛、佐々木盛綱、國定忠次、嬰兒殺、馬盥の光秀、梶原景時、辨秀、三人吉三、春雨傘、毛剃、松島千太、齋藤太刀左衛門、寺岡平右衛門、鹽原多助、渡海屋、仁木彈正、石田局、大尉の娘、大薩摩峠の札龜之助、佐倉義民傳、犬山道節、藤掛藤十郎、伊丹屋重兵衛、地震加藤、鳩平、伊賀守團九郎、彌作の鎌腹、織田信長、茄賞、村井長庵、鉢の木、一心太肋、大晏寺堤、室町御所、堅田落、文覺、曾我の五郎、有職鎌倉山、法界坊、忍惣太、安達三鈴ヶ森、島の景清、菊畑、堀川、水戸黄門、虚無僧、在原系圖、め組喧嘩、魚屋茶碗、助六、大鹽平八郎、釉萩祭文、引窓、吉備大臣坂崎出羽、（順序不同）

梅玉の二つの印象

川尻清潭

梅玉の事の御質問に對して、おくれ乍ら一言お返事を申上げます。

梅玉翁がまだ高砂屋福助を名乘つてゐた頃、鳥越の中村座に『奈智瀧誓文覺』と云ふ狂言が出て、其時に袈裟御前の母親の衣川の役を勤めた時、私は始めて其場の福助君と口を利きましたが、今の記憶では只お世辭のいゝ人であつた事より外覺ゑません、

其後梅玉を襲名されて、政次郎君が福助を繼いで上京した頃には政次郎の福助君の方と交際が深くなつて、父の梅玉翁とは、單に挨拶を取交す位の事でした。

但し梅玉翁として鴈治郎丈の一座に加はり、毎年新富座へ吉例の出勤をして居たうちで、私の目に殘つた事が二つあります。

一つは『廓文章』の吉田屋の喜左衛門役で、鴈治郎丈の伊左衛門が炬燵に寢て仕舞ふと、喜左衛門は下手へ引込みがけに、其炬燵の中へ一寸手を入れて火の加減を見て、扨立上つて伊左衛門の寢姿に目をやり、お氣の毒であると云ふ思入、一寸手で鼻をすゝり上げて涙をのんで襖へ入つた事です。長年全盛の喜びを續けて居た伊左衛門が、紙衣姿の零落の樣を見ては、喜左衛門も人である以上一滴の涙があるのが、床しい人の人情です、私はこの僅な一つの仕科に大きい感心をさせられたのです。

又一つは『菅原傳授手習鑑』の寺子屋の千代の役で、中車丈の松王が二度目の出の着物を脱いで水衿になる時、梅玉

翁の千代は其うしろへ行つて、松王の着物をぬがせる手傳ひをしました。それは只形式だけの事でしたが女房役の心得を知つて居る人として、それにも大きい感心をさせられました其後旅で同じく中車丈の松王に福助君の千代の役を見ましたが、福助君は、松王の着物を脱がせる手傳ひは仕て居ませんでした、これだけ舞臺の上の役の心掛けが違ふ事を、其時しみ〴〵こそう思つて見ました。

以上二つとも甚だ些細な事であり乍ら、其後『廓文章』も寺子屋も見ますが、その些細な仕科をする人がありません。私は其場合、いつも梅玉翁の例を引て、喜左衛門を勤める俳優と、千代を勤める俳優とに注意をして居ます。

それを喜んで受入れて、翌日からすぐに其通りをする人と一向取用ゐない人があります。用ゐる人の方が必ず腕のいゝ俳優である事が、實に不思議な位です。私の少ない經驗から得た此梅玉翁の二つの型が、後世の『廓文章』と『寺子屋』とに、いつまでも殘されて行く事でせうが、私は此二つの芝居を見る時に、必ず梅玉翁の事を思ひ出して、皆さんが言はれて居る通り、梅玉翁が情の人であり、其人情が舞臺の藝にまで及ぼして、見物に感動を與へた事を語り殘して置きたく此記事を書きました。

中座霜月興行東京大歌舞伎

一番目 三世瀬川如皐氏作 佐倉義民傳 三幕
中村吉右衛門 坂東三津五郎 中村時藏 市川紅若

所作事 六歌仙の内 文屋 清元梅吉社中 長唄囃子連中 芳村伊十郎 出勤
喜撰 中村吉之亟 坂東玉之助

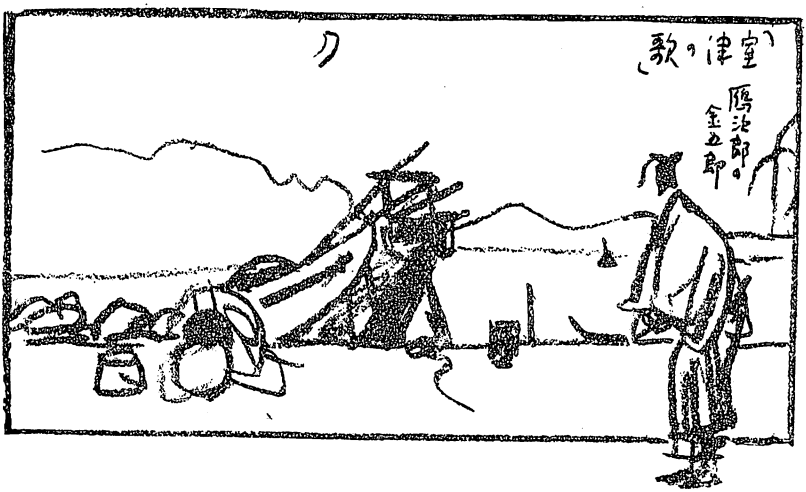
中幕 梶原平三景石切 一幕
坂東三津太郎 坂東三津之丞 坂東大三郎 市川若猿 坂東三吉

二番目 岡本綺堂氏作 風鈴蕎麥屋 二幕
中村勝五郎 大谷力藏 尾上多賀雄 中村七三郎 實川みのる 尾上卯三岐 市川茂々太郎 中村播之助 中村秀好 坂東好太郎 中村米吉 坂東八十助 市川新十郎 市川九藏

大喜利 河竹默阿彌翁作 釣女
常磐津連中

御觀劇料
特等 六圓五十錢（小物料廿五錢）
一等 六圓三十錢
二等 二圓八十錢
三等 二圓
四等 一圓三十錢
五等 七十錢

●毎日午後二時三十分開幕●



梅玉追善興行

十月中座の印象

油屋久二記
大塚克三畫

◇お芝居の秋が來て、十月の大阪劇團は角座の井上正夫一派や浪花座の澤田正二郎一黨と東京からの來演で賑やかに過されたが、なかにも中座の鴈治郎一座は關西の名題揃ひで、本年掉尾の大歌舞伎として梅玉追善興行に珍らしい活氣を呈して蕋を開けた。

◇一番目は岡本綺堂氏の「貞任宗任」三幕である。あまり新しい狂言ではないが、延若の貞任は優の落着いた荒削りの演技と相俟つて近來の傑出であつた。弟として分別のある宗任の魁車は嵌り役、福助の義家は立派なもので、吉三郎の外ケ濱十藏は先月の「海の勇者」の父親の意氣で手に入つたものである。鰕十郎の母眞弓、莚女の妻山の井のほか今度は長三郎の丹後の小次郎、橘三郎の岩手五郎成太郎の娘小磯、霞仙の松山、扇雀の鎌倉權五郎と若手花形の大活躍であつた。第一第二……と地獄の底が響いてくるやうな鐘の音を恨み「奥州は墳墓の地、此

處に生れて此處に死する。丹後波は荒るゝぞ、陸奥の土は、都の鬼に奪はるとも、海は限りなき力をもつて千年の後までも、仇を呪へ――」と叫ぶ悲壯な最後の幕切れは、延若の眞任とゝもに今も眼に殘つてゐる。

◇中幕は梅玉追善に因んで上場された「實錄先代萩」で福助が親譲りの至藝を見せてゐた。遺子政治郎の鐵之助で、鴈治郎が片倉小十郎の折紙附の當り役でつき合つてゐた上に、故梅玉に緣故の深い雀右衛門吉三郎、莚女、霞仙は端役の局となつて近頃にない大舞臺であつた。扇雀の召使花野は美しく上出來、東京から態々と來演した正太郎の千代松や福萬壽の龜千代君の子役の小力演で觀客の涙をしぼらせてゐた。この劇中に今度の口上があつて鴈治郎の後見に福助

政治郎の挨拶は新な涙を催さした。若君に命にられて千代松を連れに這入る鴈治郎の引込みは優の外に見られない味のあるものであつた。越太夫のうるほひのある喉がこの劇をやんはり包んでゐたことを忘れてはならない。

◇二番目は大森痴雪氏の新作「室津の唄」二幕で鴈治郎が、この新世話狂言によつて優の演技に、新機軸を出さうとしたもので大森氏の傑作と相俟つて近頃にない「見て面白いお芝居」であつた。

鴈治郎の西屋金五郎、鍛十郎の同藤左衛延若の澤田屋久五郎が第一幕で唄み合ふところなどは面白く、横ではら〳〵してゐる福助の妻お妙、莚女の母お房、それを仲裁に入る卯三郎の料理人利七は嵌り役で面白い舞臺を見せてゐた。遊女には雀右衛門の小太夫、霞仙の市之丞、章景の禿梅野、市藏の漁師茂平とみな變つた味を見せてゐた箱登羅の侍島原と漁師梶右衛門の二役、橘三郎の侍加瀬田、魁車の白痴清十郎は嵌り役であつた。第三場で扇雀の藤吉は近來にない上出來であつた。成太郎のお八重福太郎のお琴も無難、この場の鴈治郎は優のゆとりのある藝を見せて立派といふより觀客を泣かさずには居かなかつた。

◇大喜利は「吉野山」の景事で、長三郎の出物、鴈治郎が美しい正行となつて觀客の眼を驚かしてゐた。長三郎は近頃にない上手な舞振を見せてくれたのは嬉しかつた。

大喜利

釣女

中座霜月興行上演台本

常盤津連中

登場人物

大郎冠者　三津五郎
上臈　八十助
醜女　時藏

常盤津連中

奥御殿今様狂言の場

本舞臺一面鏡板、松の模様を描く、總べて本行能舞臺の飾り付け、下座常盤津の山臺の模様よろしく幕明く　直ぐ出語り

〈抑も〳〵是れぞ猿樂の昔よりして、その業の可笑しき云ひし狂言師、名に大藏や鷺流の容子をうつす釣

女

（これにて橋懸り場幕の内より大名立烏帽子素袍、好みの形り、跡より太郎冠者附添ひ出て）

大名。かよふに候者は此處の大名でムる、今日は最上吉日に依つて西宮へ參詣致さうこ存ずる。ヤイ〳〵太郎冠者あるか、

太郎。ハヽ

大名。居たか、

太郎。御ン前に

大名。念のう早かつた。汝も知る如く此年月まで定まる妻がない、承はれば西宮戎三郎ごのは艶福者こ申すこ　こゆへ、是へ參りよい妻を申受けやうこ存ずる、汝供をせい。

太郎。イヤ誠に仰せの如く西宮木比壽三郎ごのへ御參りがよろしう厶りませう、私もまだ定まる妻が厶りませぬついでながら申し受けませう。

大名。さて〳〵おのれは卒爾なことを云ふものぢや、戎三郎ごこそ申せ木比壽三郎ごのこいふものぢやない。

太郎。ハテ書に書いた折には畫びす三郎こ申し、木で造りました折には木比壽三郎こ申し、アノ西宮のは木で作りましたゆへ木比壽三郎こ申しまする。

大名。中〳〵汝は物知りで居りやる、さらば供せい。

太郎。かしこまつて厶る

大名。さらば急いで行かう、サア〳〵參れ

太郎。參りまする〳〵。

大名。したが某は道不案内ぢや程に、名所舊跡を語り聞かせい。

太郎。のふ〳〵たのうだお方參る程に、先づ是はは、小唄に謳ふ奈良法師が行くも戻るも山崎の結ぶ白にしの尼ゲ崎で厶り升る、

大名。ヤ面白い〳〵シテ向ふに見へる山は何山ぢや、

太郎。ハアあれは山で厶りまする、

大名。こゝな奴ッ、山は山ぢや何山ぢや、

太郎。ハテ、何山は山で厶る、エゝ〳〵、それ〳〵

へあんの山からこんの山へこんで出たるはなんじやるぞ、頭にぷつぷこ二つ細うて長うてりんこ刎ねたちやつこすいした、

太郎。うさぎ

大名。ハテ扨て長い名の山ぢや、扨てはおのれ山の名を知らぬな、

シテ西宮はまだか、

太郎。アノ森の内で厶りまする、

大名。去らば參詣を致さう、サア〳〵來い〳〵。イヤ誠に尊い事で厶る、先づ鈴の緒に取り付いてグワラングワラン〳〵、如何に申し候。

へ我れ此の年まで無妻なり、

三郎殿の利益にて定まる妻を授け玉へ。

へ授け玉へこ伏し拜む、

扨てまづ斯樣に祈願を込めたればやがてよき妻を授かる事で有ろう。ヤイ太郎冠者、汝も拜め。

太郎。畏まつて厶る。グワラン〳〵〳〵いかに木比壽三郎ごのへ申上候。

へ我れも定まる妻はなし、似合相應美しき妻をお授け〳〵こ三拜九拜したりけり。

大名。ヤイ太郎冠者、今宵は、通夜をせう身共はまごろむ

間、汝は邊りに心を附け、若し山だち盗賊でも參つたら身共をきつと起して呉れ。

太郎。何が心得てムる。

大名。然らばまごろむぞよ、ヤットナ〳〵

太郎。ゆるりとなされませ。イヤ誠にたのうだお方のやうな勝手なお人はムらぬ、通夜をせうと仰せらるゝと思へばまごろむによつて番をせいと仰せらるゝ餘り氣儘なお方でムる。なんとした者でムらう。オゝたのうだお方參りましたぞ、〳〵。

大名。ヤイ〳〵太郎冠者、何者が參つたぞ〳〵。

太郎。ハア犬が參りました。

大名。たわけ者奴が、犬が參つたとて起す奴があるか、身共は又山だちでも參つたかと思ふて吃驚致した、去らばまごろむだよ、ヤットナ〳〵。

太郎。さて〳〵たのうだお方のやうな人遣ひのわるいお方はムらぬ、お方ばかりまごろまれて、太郎冠者には番をせいと仰せられお氣のつかぬお方でムる。ヤア參りました〳〵。

大名。又來たか。

太郎。向ふの松の木へ鴉が參りました。

大名。からすが參つてなんといふて笑ふてゐる。

太郎。あなたさまを阿呆〳〵と啼いて居りまする。

大名。爰なたわけ者めが、そうぬかす汝が阿呆ぢや。おのれを起し置いては寢られぬ、汝もまごろめ。

太郎。しめた。

大名。ヤア

太郎。ヤア

大名。あら尊こやまごろみし程もあらせず夢さめて、アラ尊こや。

大名。アラ尊こや、お告げが有つた〳〵、太郎冠者起き居ろ〳〵

大名。さればまごろむ内戎三郎ごのお告げがあつた。

太郎。なんとムりました。

大名。汝が妻になるものは西門の一のきざはしに有る程に連れて歸れとお告げがあつた。

太郎。是は如何な事私へのお告げも其通り。

大名。去らば急いで參らうサア〳〵來いよ〳〵。

へいさみ喜ぶ足元に、落ちたる竿を取り上げて、

大名。ヤ、是れは如何な事妻ではのうて

慥に西門の一のきざはしと仰せられたに、女處か猫の子一疋居らぬはどうした事で有らう。ヤ斯樣なものが竹の先きに糸がついてある、是れはなんで有らう。

太郎。オヽ合點が參りました、たのうだお方のその年して女房狂ひはいらざる事、一本棒にならぬやう此の糸で首をくゝつて死なつしやれと仰しやる事でムらう、

大名。又しても爰なたわけものめが、

イヤこれは悟つた、戎三郎ごのは不斷から釣竿を持たせらるゝに依つて、此の針で妻を釣れといふ事で有らう、有難い〳〵去らばこれにて急いでよき妻を釣らうよ〳〵

〈釣ふ〳〵神の敎への釣針をおろし見目よき妻を釣ろよ〳〵針をおろせば、

大名。アラ有難や、扨てもよい妻が掛つてムる、うれしや〳〵。ドレ、お顏を拜もう〳〵、

（大名釣りの針に上臈を引かけ來る）

太郎。何がさてお喜びでムらう、そのお喜びを祝ふて一トさし御ン舞ひなされては如何でムる、

大名。エヽ舞ふ所ではない、少しも早う顏が見たい。

太郎。イヤ御ン舞あつて顏を拜ませられい。

（大名の舞踊あり。）

大名。これ〳〵そなたは定まる妻ちやに依つて、目をかけてやる程に大事にしませうぞ。

上臈。うれしうござんす。

大名。のぞみ通に舞を見せたれば顏を見てもよからう。

太郎。それがよろしうムります。

大名。一二三ツさや。ヤ、そなたは小野小町か楊貴妃か、ヤレ、美しや〳〵。ヤイ〳〵太郎冠者、三國一の美人ぢやぞよ。

太郎。イヤ申し〳〵道々こつそり樂しまうと脊中へ入れて來た此の吸筒、お二人樣の三々九度、是れにて日出たう御祝言。

大名。ヤ、それは一段の事ぢや、サア〳〵注げ〳〵、

太郎。心得てムる。

大名。まづ女の方よりさしませい。

上臈。申し我夫、必ず見捨て下さりまするな。

大名。なんの見捨てよいものか。

上臈。おゝうれし。

大名。太郎冠者祝ふて一つ唄うてくれ。

（上臈の舞）

太郎。かしこまつて候。

（舞ふ）

〈傍に聞き居る太郎冠者、氣をもみあせりて、何がさて私にもその釣竿お貸し下さりませ。早う妻が釣りたうムります。

大名。オヽ尤もぢや早う釣れ〳〵

太郎。イヤ釣る段ではムりませぬ。エイ〳〵〳〵。

〈釣ろよ〳〵釣るものは何〳〵鯛に鯉に惠方棚に撞鐘信田の森の狐にあらぬ釣釣を、さげておろして三十二相揃ふたよい妻を釣よ。お嬶さんを釣ろよ

〈オヽ當るぞ〳〵ごつこいゞめたこ引上れば被衣目深にかつぎし女。

かゝつたは〳〵、サア〳〵こちらへムれ、アヽ嬉しや〳〵。サア爰へムれ、何も耻かしい事はない、汝こ夫婦になるならば、エヽ春は花見・夏は涼み、秋は月見の酒盛に、冬は雪見のちん〳〵鳴、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝、かならずそもじは、エヽかわるまいな。

醜女。何んのかわつてよいものかいな。

太郎。先づ何は兎もあれ御面像を。

〈被衣を取ればコハ如何に、河豚にひとしき醜女ゆる。ヤアわごりよは鬼か化物か、のう恐ろしや消へてなくなれ〳〵、

醜女。そりやつれないぞへ太郎冠者ごの、

〈是れこつちら向かんせ、エ、なんぢやいな、思へば深い戀の淵、沈む我身を釣り糸に結んだ縁の西の宮、蛭子設けて二世三世、かわらぬ色は梓竹の末葉榮ゆく女夫中、放しはせじこ取りすがる。

太郎。なう恐ろしや〳〵。

大名。ヤイ太郎冠者三郎殿の授け玉ひし妻ぢやによつて否應はなるまいぞ。

太郎。エヽあなた樣はよい月日の下でお産まれなされた、この太郎冠者は月日もなく、くらやみで産まれましたこ見へまする、

大名。何はこもあれ口出たう舞はふではないか。

太郎。勝手にさつしやれ。

大名。高砂やこの浦船に帆を上げて、

〈月もろ共に舞ひの袖、女蝶男蝶の仲もよく、遠く鳴尾の沖の石、堅いちぎりは住吉の千代に八千代をかけはしや、千秋萬歳の千箱の玉を奉る日出たさよ

（皆々舞ひながら、揚幕に入る）

——幕——

芝居物語

風鈴蕎麥屋

中座霜月興行上演

長島黎夢

（一）

兩國の川遊びも八月一杯で名殘りの花火の打ち上げられたあこはまつたく物淋しいそれが九月に這入るこ早や夜寒が肌を襲うてくる。

兩國橋の番小屋では橋番源兵衛が所在なさに通りすがりの小按摩を捕へて世間話に鉋豆煙草をはたいてゐる。

『まア精々嫁ぐがいゝや、今夜はこれから柳橋の何處へ廻るんだい』

『さア行つてゐなけりや判らないが、ならう事ならお照さんの家へ呼ばれたいものだ』

『ふうんお照さんの家に呼ばれたら余計にお金でも貰にるのかね』

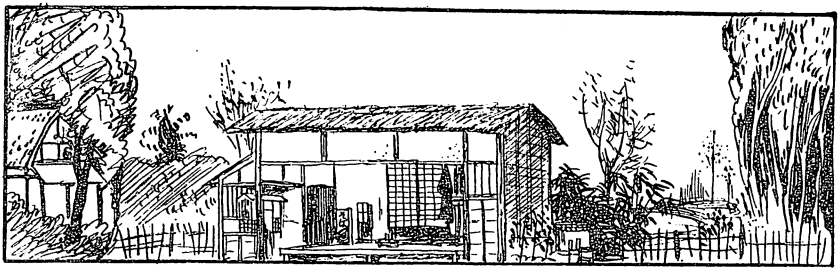
『いゝやそういふ譯ぢやないが・柳橋の藝者衆の内でもお照さんは年が若くて、それに肌觸りがいゝからなア』

『おい〳〵お前は呆れた奴だ。そんなことをいふこ親孝行だこもう譽めてやらねゐぞ』

『お前に褒められたつて青差一貫文の御褒美もむつかしさうだから、まアごうでもいゝや』

『ゐゝ生意氣な事を云ふな犬にでも吠られねゐやうに早く行け〳〵』

『はツはッ……違ゐねゐ、早く行け〳〵か、按摩上下三十二文……』



『小供の按摩が三十二文は高いぞ、二十四文がお定まりだ』
『藪者町へ行つて二十四文貰つて詰るものか、ぢや老爺んあばよ、按摩上下三十二文……』
こ小按摩は探ぐりながら流して行く
『はッは……小僧のくせに色氣こ慾氣が滿ちてやァがらァ、これだから今時の奴には油斷がならねゐんだ』
一人呟きながら空を仰いでみた。十三夜を明日に控へて今夜は空も曇り勝だ。ぐんよりした空からは今にもほつり〳〵こ來るやうにも思はれる。
源兵衛老人は又しても空を見上げながら時々嘆ふ、冷氣に身体をすくめた。
『あゝ、あの小按摩にや果れ返つて物が云ゐねゐ』
此時番小屋の傍で
『いつの代だつて人間にやァ、油斷はならねゐものさ。今に始まつた事ぢやあるめゐ』
こいふ聲に不圖見るこそれはいつもの風鈴蕎麥屋の又七がいつの間にか番小屋の傍に荷を下ろしてゐたのである。そしてうしろ向きになつたまゝ見向きもしないで鍋の火を煽いでゐる、三十四五の見るからに素朴なお人好しらしい男である。
『あゝお前か、なにそうでもねゐよ、論より證據で俺なんざァ產れつき正直で親切に出來てゐるよ』
『それ程親切に出來てゐるんなら何も人助けだ、熱いのを一杯やつておくんなせゐ、今夜は宵から些こも商ひなしだ』
『そいつァ氣の毒だな、それぢやお前のいふ通り人助けに一杯啜り込むかな』
又七は相變らず荷より離れずにばた〳〵やつてゐる。源兵衛は懷中から財布を出して小錢を勘定しながら
『あいにく小錢の都合が惡いから十五文に負ておいてくれないか』

『足元を見て一文値切るなんてお前もしみつたれな男だな、まアいゝや口あけだから負ておいてやらう』

『あたりめによ、負なけれや喰つてやらない分の事だ』

『だから負るよ、十六文の蕎麥を十五文に負て盛りをよくして熱くして辛味をごつさりくれてやりやア申分はあるめにぢやねにか』

『そうだ〳〵値切られたからこいつて盛りを悪くするやうぢやア江戸の商人ぢやねに』

意地ッ汚ない老人だ。又七は笑ひながら

『いくら煽てたつてその上に負ちやアやらねによ、ちよいこ待ちなせにすぐに拵にるから……』

云ひ乍ら蕎麥を拵に始める、源兵衛は又空を見上げながら

『今夜はちつこ曇つたやうだ、あしたの十三夜が思ひやられる』

『めつきりこ秋らしくなつたね。朝晩はもう寒い位だ。九月になるこ、こゝらも夜は淋しいね』

『毎年の事だが止めの花火の濟んだあこは火の消にたやうだ』

『星形舟に大根を積むやうになるかこ思ふこ霜がれの寒さが今から身にしみるやうだ、さあ〳〵出來やしたよ』

『そうは云つてもその霜がれの寒い間がお前達の稼ぎ時だ、まアしつかりこ儲けるがいゝぜ』

『儲けさせねにから不思議ぢやねにか、お天道樣は北向きに出來てゐるね』

『はゝ……勿体ない事を云ふ男だ』

相變らず口の減ない事を語り合ひながら源兵衛は蕎麥を喰つてゐる。

此時橋向から鰻かきの金助が笊を肩にしながら此處へ來掛つた蕎麥を喰つてゐる源兵衛に氣附いて

『今晩は――』こ聲をかける。

『おー金公か』

『急に冷にて來ましたね、源兵衛さん美味さうに喰つてゐるな』
源兵衛は蕎麥を啜りながら
『ごうだね金公、景氣はいゝかね』
『もう此頃になつちや鰻掻きもいけねに、鯉か海鼠でも賣りに出なけりやなるめによ』
『鯉か海鼠は賣り聲を聞いたゞけでも寒そうだね』
金助は肩から笊を下ろしながら
『その寒さうなものを賣つて歩かなけりやならねにのだから俺の方が余ッ程寒いや源兵衛さん鰻を些こ持つて來ましたぜ』
笊に這込つた鰻を見せる、今迄默つてゐた又七がそれを覗き見て
『非道いめそつ子だな、俺は又鰌かこ思つたよ』
『知れた事さ、放し鰻にするんだものごうにか鰻の形にさへなつてゐればいゝのだ』
『成る程放し鰻か……こゝの家の内職だね』
『むゝこれが橋番の内職で有難い後生の種さ、こんなめそつ子を二匹か三匹も川の中へ追放しておいて後生願ひの結構人から百も二百も取り上げるんだから怖いものだ』
源兵衛は
『馬鹿を云へ誰が百も二百も呉れるものか、せいぐ二十文か三十文だ、それに世の中が悪くなつて後生願ひや信心者が少くなつたこ見にて、こゝへ來て放し鰻をするやうな奇特な人は三日に一人もありやしねによ』
『こ云つても當てにやならねに、橋番はおぢいさんは内々で溜込んでいるこいふ噂だぜ』
傍から、又七が
『俺の蕎麥を値切つた手際ちやアごうもそうらしいな』
『余計な事を云ふなよ、サア金公なんでもいゝからその鰻をそつちの盤臺へ入れておいてくれ』
『いつそすぐに川の中へ放しちやごうだね、その方が余程後生願ひになるが』
『にゝまぜつ返すな、五月蠅奴だ』
金助は番小屋の戸前にある盤臺に笊の鰻を摑んで入れる。
『代はいつもの通りでいゝかい』
『少し目方が重いやうだが、まア好からうなこれも後生の爲だ』
源兵衛は財布から小錢を出して金助に與へる、それを見た又七は
『なんだお前は小錢を澤山持つてゐるぢやアねにか』
『この男にやつてしまふこ、もうあこ十文しかないのだ。サアお前にもやるぞ』
『意地汚ねになア』

手拭で手を拭いてしまつた金助が又七に
『おい烟草の火を一つ貸してくんなせにゃ』
『あいよ、サアつけるがいゝ』
こ鍋の下の火を教へる
『ごうだい、ついでに一杯遣らねにか』
『そうさ、なんだか薄ら寒いから熱いのを一杯手繰るこしやうか』
『おつこすぐ拵へるよ』
鍋の下を煽ぎながら
『今も云つてる所なんだが、まつたく寒くなつたね』
『陽氣ちがいにめつほう寒いようだ、おらア風邪を引いたかな』
こ金助は肩をすくめる。源兵衛も
『俺も寒くなつた、なんだか下つ腹が吊つて來て……急に冷にて來た故か持病の疝氣が兆したかな、疝氣に蕎麥は毒こ知りつゝあゝ十五文出してうつかり毒を喰つちやつた』
『なにを云つてるんだ、お前の腹は金で冷てるるんだ』
『冗談ぢやねにゃ、あゝいよ〳〵差込んで來るやうだ、おい金公おれは奥へ行つて少し横になつてるるから、お前濟まねにゃが暫く俺の代りをしてくんな』
『にゝ俺に代りを……ぢや橋番をさせるのか』
『此頃は身投が多いから用心してくんなよ、女こ見るこすぐに止めてやるのだぞ』
『ぢや男は構はねにのか』
『男一匹が身を投げるこいふにはよく〳〵の理由があるに違にねにから止めずに殺してやるこになつて居る、女は氣の狹いもので詰らねに事によく死にたがるものだから止めてやるのが橋番の役だ』
篦棒な橋番もあつたもの
『成程、そんな理屈かね、よし〳〵女が欄干に手をかけたら南無阿彌陀佛を聞かねにうちにすぐ飛び出して止めてやるよ』
『ぢやア頼んだぜ、あゝ痛てにゃ〳〵蕎麥屋の風鈴野郎めおれにまちんでも喰わせたのかも知れねにぞ』
源兵衛は勝手な熱を吹き乍ら腹を押へて奥に這入つてしまつた。又七はあこ見送つて
『さまア見やがれ……さア〳〵熱いこを早く食ひなせにゃ』
こ金助に丼を出す、金助はそれを喰ひ乍ら
『今夜はうんこ商ひがあつたかね』
『なんのお前が口明けよ』
『馬鹿々々しい、十六文の蕎麥を一文値切つてたつた一杯食つただけよ、あんなのは商賣の裡にや這入らねにゃ』
『蕎麥を値切るのは珍らしい意地ッ汚ねへ奴だな』
『ほんこうよ、あれでなきや金は出來めにょ。はは、……』

二人は尙も冗談に花を咲かせてゐる。人通りの少ない河岸には二人の笑ひ聲が河面に反響する。乙なそゞりを唄ひながら河岸通りの下の方から仲間の萬平が千鳥足のいゝ機嫌で此方へやつてくる。又七の側へ來て

『おい〳〵風鈴、今大勢こゝへやつて來るから大急ぎで蕎麥をこしらへてくれ』

『へゐお幾人でございます』

『さうよ、四十七人ばかり押し出して來るのだ』

『四十七人？……本當ですか？』

『嘘も本當もあるものか、徒黨の人數は四十七人、こゝで腹をこしらへて吉良の屋敷へ討入りに行のだ』

『大方そんな事だらうと思つた、この不景氣の世の中にひやかしは眞つ平だ』

『ゐゝ嘘ぢやねゐこいふのに……』

不圖金助に眼をつけて

『おや、そこにぼんやりしてゐる影法師は金助ぢやァねゐか』

『おゝ萬平か、相變らずいゝ機嫌だな』

『所でお前屋敷を出てから今何處にゐるんだ』

『淺草の力に燻つてゐるのよ』

『そうして何をしてゐるのだ』

『窮屈な屋敷奉公が厭になつたから飛び出して見たものゝやつぱり他に面白い事もねゐので、今ぢやこんな事をしてゐるのさ』

『むゝ直助權兵衛が洒落た事をやつてゐるな、差しづめ高麗家の役廻りだ』

『あんまり洒落でもねゐが顎こ釣かへで仕方がねゐのさ』

『なにしろ久しぶりでいゝ所で逢つた、これから一緒に附き合つてくんな』

『附き合つて何處へ行くのだ』

『向ふ河岸へ行つて廿四文こ洒落れるのよ、此節は上玉が出るこよ、サア行かう』

こ金助の手を引張る

『そんな洒落は猶いけねゐ、夜鷹を買ふならお前ひこりで行け』

『こいつ久振りで昔の友達に逢つてサ、あんまり附き合ひの惡いもゝんぢいだ、さァ素直に來いこいふのに……さァ來い〳〵』

又無理に金助の手をこる、金助はそれを振り放すこ萬平は何しろ醉つ拂つてゐるので其處へよろけて倒れた。サア納らない

『やい〳〵なんで俺を大道へ突きこかしやがつた、料簡かならねゐ』

こうぐ萬平は起き上つて金助に摑み掛つて行つた。それ

を見て又七が仲に割つて這入り
『これさ〳〵こんな所で喧嘩をするものぢやねゐ、おい金公お前も生醉ひの相手になつていちやァ際限がねゐぢやねゐか、素直にそこいらまで一緒に行つて……なァそれ好い加減な處で……判つたらう、その方がいいぜ』
金助もうなづいて
『ごうも仕樣がねゐな、ぢや行かう、ではあこを賴んだぜ』
『今度はおれが身投を止める役か、まあいゝや、引き受けたよ』
『サア早く來い、來い』
『そう自暴に引ッ張るなよ』
金助はこう〳〵萬平の爲に引ッ張られて上の方へ行つてしまふ、それを見送りながら又七は
『俺もたび〳〵覺ゐがあるが、折助の生醉ひにからみ附かれちや、全くやり切れねゐ』
又七は獨り呟き乍ら又鍋の下を煽ぎ出した、
宵の内はごうにか保つてゐた空もいつか生温い風に混つてぱら〳〵こ降り出して來た。向ふ河岸の薄灯りにぼんやり照された河面は音も立てずに靜かな波紋を描き出した。夜の更けるに隨つて河岸通りは一層靜寂になつて行く。又七は空を仰ぎながら、
『おや、ぽろついて來やがつたな、秋の癖だ。なァに大した事もあるめゐ』
こ獨語してゐる時向ふから手拭をかぶつてしかも素足であこ先を見廻しながら走る女を見た。尙も透してみるこ、夜目にも判る程美しい女だ、又七は荷の影に隱れて息を殺してゐるこ女は又七に氣附かずその前を通りすぎ上の方へ尙馳出して行く、その後姿を透し見るこごうやら只事でもなさそうだ
『おやッこいつァ危ねゐさァ〳〵俺の役廻りだ飛んだ留守番を引受けたものだ。』
『突然飛び出して又七は馳け行く女を後から抱き留めて無理に小屋の前へ引戻して來た。するこ女は小聲で
『あれ、あれなにをなさるので御座います』
『何をするものか、まァ待ちなせゐこいふのに……』
女を無理に引据ゑて
『橋番のぢいさんは疝氣で寢込んでしまつたので金助こいふ奴がその代りを賴まれてゐたが、又その代りを賴まれてゐるのだ、男の身投はごうでも構はねゐが女の身投は屹度助けるのか橋番の役ださうだ、女は氣の狹いもので、詰らねゐ事にも死にたがるのだが決して短氣を出しちやいけねゐ無分別な事をしちやならねゐ、お前さんは一体ごうして死なうこしなさるのだ』
女は何こも云はずにうなだれたまゝ默つてゐる。
『見れば相當のお店のお孃さんらしいがなんで身投げなんぞ

をしようと思ひ詰めなすつたね、もし默つてゐちやァ譯が判りません、サァ譯を聞かせておくんなさい』
と又七は優しく訊かうとするが女は
『後生でございますからごうぞ此の儘のがして下さいまし』
『そりやァいけねね、お前さんが何と云つて賴んでも、かう止めかゝつた以上はごうして見殺しに出來るものか、お前さんは何んで死なうとしなさるのだよ』
こゝまで追窮すれば屹度お定まり科白が娘の口から洩れると思ひの外、娘は口籠ながら
『あの……妾は身を投げるのでは御座いません』
といふ。又七は稍意外らしく
『なに身を投げるのぢやねね？ね？ほんとうに身投げぢやァありませんかね』
『はい、身を投げる積りで來たのではございませせん』
『だつてお前さんは橋の上へ……？』
と云ひかけて又七は少し考へた。
『成程、まだ欄干へ手をかけたといふ譯でもなし、南無阿彌陀佛と唱へたといふ譯でもなし……そりやァ私が些と早まつたかな……若い娘が唯だ一人で橋の上へ馳けて行くのは適切り身投げだと一圖に思ひ込んですぐにあとを追つかけたが……いやごうも濟みません、飛んだ早呑み込をして大しくじりを遣つてしまつた。まァ勘忍して下さい、勘忍して下さい』
頻りに又七は娘に詫てゐる。娘は默つて俯向いてゐる、その姿が又馬鹿に美しい、夜目にもクッキリと白い襟足、年の頃は十七八位だらうか、その思ひに沈んだ姿が一層又七の眼には美しく見ねた。時雨れる夜更けに人通りもない此大川端でしかもうら若い娘を救つた（？）又七は尠からず奇異な感じに打たれた。尙もその姿をつくづくと眺めてゐたが又じつと考へ始めた。
『だが、お前さんは矢つ張り何うもおかしいなァ』
『ね？』
『たとひ身投げでないにしても今もいふ通り今時分に若い娘がたつた一人で……しかも跣足……顏をかくして……？こりやごうも唯事ぢやァなささうだ。一ツ目の辨天樣へ夜參りでもあるめね、やつぱり譯がありさうだね、してお前さんの家は何處ですね』
訊かれて娘は口籠り乍ら
『……妾の家は……あの……』
『お前さんは何處かで、見かけた事があるようだな』
『御存じで御座いますか』
と思はず、ハットする。
『さア見たようだが、ちよいと考へ出せねね……？何しろお前さんは沙汰なしで家をぬけ出して來なすつたのだらうね

いいや隠しても、ちやんと判つてゐます……馳落者なら矢張りそのまゝには出來ねゐ、今度は橋番の係りぢやねゐ、自身番の方へ引渡さなけりやならねゐが、お前さん一緒に行きなさるかゐ』

『ゐゝッ、いゝゐわたしは……』

と怕りして逃げ出そうとするのを又七はグッと押へたその機會に娘の懷中から財布が落ちた、しかし又七には氣附かなかつた。

『だから無理に連れて行かうとは云はねゐが、こゝで正直な事を云つてくれなくちやァ困るお前さんの家は淺草ですかゐ』

『はい……』

『淺草の……何處ですゐ』

『あの……』

不氣味さに、娘は云ひ澁る少々焦れて

『人を焦らしちやァいけねゐな……身投を留る位だからな、わつしは何處までもお前さんの味方になつてあげますねゐ お嬢さん決して惡いやうにはしませんから、ごうぞ正直に云つておくんなさい』

不圖！落ちてゐる財布に眼をつけ

『おやッそこに落ちてゐるのは……』

思はず又七の眼はそれに引きつけられた。娘は慌てゝ財布を拾ひ取る

『それは金財布ぢやァありませんかゐ』

『はい……』

と返事しながら急いで懷に押し込んでしまふ

『箱入り娘が重そうな金財布を持つて……』

又七の面は極度に緊張してゐる

『こいつァやつぱり自身番だ』

と娘の手を引き立てようとすると

『あれごうぞ勘忍して……』

『それぢや勘忍する代りに家の名を云ひなさるか』

追窮されて娘もよんごころなく

『わたしは……あの……八幡屋の……』

皆まで訊かず又七が

『違ゐねゐ馬道の八幡屋のお嬢さんかふ―むそれぢや今頃は大騒ぎ鉦や大鼓で迷ひ子を探してゐるだらう、眼と鼻の間だから今にこゝに追手が來るかも知れねゐ』

又七の言葉を聞いて娘も怖ゐたやうに思はず向ふを見ると

『そう云ゐば向ふから提灯の火が……？』

と指差すので見ると提灯の火が五つ六つ見ゐる、又七は思案して

『なに心配をしなさる事はありません、夜の稼業をしてゐるとこんな事には度々出くわしてゐます、わつしが好いやう

にして隠してあげませうさァ、おこなしくしておいでなさいお前さんの手拭はごうしました……あー橋の上へ落して來たかも知れねゐ、氣味が悪からうがまァこれで我慢してゐなせゐ』

と自分の手拭で娘に頰かむりをさせた上、行燈の火を吹き消した、そして蕎麥の荷をかつぎ、その荷のかげに娘を忍ばせて上の方へ行きかけやうとした、するとこの時以前の金助が

『あゝ詰まらねゐ野郎に取捉まつてしまつたむかし馴染なんて云ふものに祿な奴はねゐものだ』

と呟きながら來掛つて又七と行き逢つてしまつた。

『おい河岸をかゐるのか』

『むゝ、ごうも今夜は不景氣でいけねゐ』

何氣なく云つた又七は素知らぬ顏で荷をかついで歩き出した。その影に娘はかくれて行く、金助はそれに素早く眼をつけて不審そうに見送つてゐる。降り止んでゐた雨がいつの間にか靜かに銀糸を垂れたように、そして闇黑の河面にも亦靜かな破紋を描いてゐた、遠く河向ふの料理茶屋から端唄の三絃の音が夜更けの河岸に流れて來る。

【二】

そのあくる日の晝過ぎ。

昨夜の雨に名殘りを止めてか氣遣われてゐた今夜の十三夜も今日はその懸念のない迄に好天氣になつてゐた

淺草田甫裏の夜そば賣又七の家では今宵十三夜といふのに家の中には何等の風情もない只強い太陽の光を浴びながら四つ目垣の裾に紫苑や葉鷄頭が無雜作に繁茂してゐるのみである、破れ障子に反古張りの壁、そして土間にはだらしなくおかれた蕎麥の荷が列然頽廢し切つた彼の生活を物語つてゐるかのやうである。

そのなかに又七は獨りでボンやり考へながら酒を呑んでゐたが絶へず何かに脅かされてゞもゐるやうに猪口を持つ手を忘れて時々深い溜息をしてゐる、

時々遠くから流れてくる吉原の騒ぎ唄が晝間の鈍重な雰圍氣を尙重苦しいものにして行く。

『今夜は十三夜の故か、吉原は馬鹿に景氣がいゝな……へんいゝべら棒だ、月見だといふのにまつ晝間から騒ぎ立てる奴もねゐものだ。

と吐き出すやうに呟きながら又七が緣先に出た時、長家のおくまが一束の枝豆と二三把の芒を持つて這入つて來た。

『又さん、今夜はいゝ塩梅にお天氣らしいね、』

『おゝおくまさん、そうね昨夜の醜梅ぢやァ今夜は降るこ思つてゐたら生憎好いお天氣になつたね』
『なにがあひにくなものかね、十三夜がお天氣なら結構ぢやないか、今年は二十六夜樣も十五夜十三夜もみんなお天氣で仕合だよ、』
『まァ仕合せかも知れないね』
『あのう少しばかりだけれご、枝豆こ芒を持つて來ましたよ、』
『そりや有難てね、おかけで片月見にならず濟みます、芒なんぞは其處らへ行けば澤山生へてゐるのだが、わざ〳〵取つて來るのも面倒だし、枝豆は猶更結構だ、お月樣に供へるよりも早速茹でゝ酒のさかなにしやう』
『けふは晝間から御機嫌なんだね』
『今夜はお月見で商賣を休む積りさ、十五夜も休まなかつたから今夜は休むのサ、貧乏ひまなしこいふけれご、たまには休まなけりや身体が續かねね』
『それもそうさネ、それぢやァ今夜はゆつくりこお月さまを拜みなさい』
『ごうも色々こありがたうございました』
おくまは枝豆こ芒をおいて歸りかける、又七は呼び止めて德利を振つてみて、
『もし〳〵まここに濟まねねが、この通りだからね、歸りに角の酒屋へ聲を掛けて、五んべばかり屆けるやうにいつておくんなさい
『お前さんがそんなに飲むこは知らなかつたね』
何氣なく云つたおくまの言葉に思わずギョットした又七
『ねゝ、何……不斷はそんに飲まねねが……今夜は今云ふたお月見だからさ』
『それぢやァすぐに屆けるやうに云つておきますよ』
こ云ひ捨てゝおくまは歸つて行つた。
あこ見送つて又七が
『時にそばの賣れ殘りを配つてやるもんだからあのお内儀さんもよく氣をつけてくれる、なんでも獨り者は近所こなりの氣受けを好くしておかなけりやいけねね』
こ獨り言しながら井戸端にあつた手桶に水汲み緣先へ持つて來て芒を生けながら
『お月見をする氣にもならねねが、折角もらつたものだからまァ斯うしておかう、枝豆もついでにザット洗つておかうか』
かすかながら透音にきぬたの音が聞ねてくる、芒を生け終つた又七が氣のないやうに枝豆を手桶に入れ水を汲んでそれを不馴れな手つきで洗ひ出した、
此時、昨夜の鰻かきの金助が、ヤスを手に持ち鰻を入れた樽を腰にぶらさけ、簑笠姿で這入つて來た、

『おい内かね』
と呼んで見たが、又七は氣がつかない。
『おい、内かよ。はて何處へ行つたかな。おゝ井戸端か、何を洗つてゐるのだ』
と云ひながら近附いて來る、聲に又七はギョッとして振り向くとそれが金助だから漸く安心したやうに、洗つたその枝豆を吊けて金助の側へ引返して來た。
『おゝ金公か、なんだい此天氣に簑笠を着込んで、飛んだ烏おごしだな』
『今朝の空模樣ぢや降られるかと思つてすつかり雨支度をして出たら人を馬鹿にしたやうに好い天氣になつたので、飛んだ案山子にされてしまつた』
と云ひながら金助は簑笠を脱ぎ、そしてそこいらを見廻し
『なる程、芒に枝豆、お前の家でも世間なみに十三夜の供へ物をするのかね』
『なァに近所のかみさんが持つて來てくれたのサ』
『時にお前、晝間から景氣がいゝぢやァねねか、お前が口癖にいふ不景氣も當てにやァならねねぜ』
『ごうで今夜は商賣を休むつもりだから、まァ上つてくんな』
『ぢや一服吸はして貰はうか』
『一服とはいわずに一杯飲みねね』
『飲んでもいゝかね』
『なにも遠慮する事はねね』
『そりや有難てね』
こう〳〵上に上り込んだ金助は又七と差向に座つた。
『酒は冷だが我慢してくんねね』
『あゝ冷で結構だ』
又七も氣をよくして金助と、差しつ差されつ飲み始めた
『なにしろいゝ所へ來てくれた、獨りで飲んでゐるのは寂しいものさ』
『お互に獨り者は些と寂しいな』
『けふはごつちの方角へ行つたのだ』
『綾瀬から千住の方へ行つて見たがまるでお話にならねね小荒いのがたつた二三本よ』
『それ切りか』
『おまけに忌なものを見たのでなんだか氣味が惡くなつて早くに歸つて來た』
『ねッ、忌なものとは……土左でも流れて來たのかね』
『しかも若い女よ』
『若い女……』
ギョッとしたが
『俺はまだ女の土左衛門といふものを見た事はねねが、あんまりざまのいゝものぢやあるめね』

こ又七は薄氣味悪くなつて來た、
『おれは商賣柄で時々に見せられるが、男よりは女の方が格好がよくねゝものさ、
又七は何か考へてゐる、
『そうだらうな、そういふ譯なら猶さら氣晴しにこれからうんこ飲むがいゝぜ、酒はまだあこから來るよ』
『そんなにも飲めねゝが、まア御馳走にならう、……おゝそう忘〳〵れてゐた、昨夜のそばの代を拂つておくぜ』
こ律氣にも金助は財布から小錢を出すこ
『いらねゝよ〳〵かうして近所に住んでゐて、そばの一杯位はごうでもいゝぢやねゝか』
『でも御馳走は御馳走さ、商賣は商賣だ、人の商賣物をたゞ食ひ倒しちやア橋番のおやじより猶惡いや、まアこれは取つておいて貰わう』
『お前はごうも義理が堅ゝな、それぢやア折角だから貰つておきやせう』
こ又七が金助から錢を受取らうこする時、奥の方でがたりッこいふ物音がする、
『おや、なんだらう』
『なにか音がしたやうだね』
『むう猫でも這入りやしねゝか、こゝらにや泥坊猫が多くていけねゝ』
こ何んでもないこいふ風に又七は打消してゐたが、それでも何か不審そうに耳を傾けてゐた、金助が無言で立ち起つて行かうこするのをあわてゝ又七は遮つた、
『なに、わざ〳〵行つて見る事はねゝ、俺がこゝで逐つてやる、叱ッ〳〵それ、もう行つちやつたよ』
その態度が如何も落ついてゐない、
『でもまだなんだか、がたゞ〳〵云つてゐるやうだぜ、ごうもおかしいな』
又起たうこするこ、
『大丈夫だいふのに……もう何もゐやアしねゝ、大丈夫だよ〳〵』
無理に金助を座につかせたが金助は尙も不審かりながら默つてゐる、此時。
『ごうもおそくなりました』こ酒屋の小僧が酒德利を提てやつて來たので、――『よし〳〵そこへおいて行け』さア金公來たぜ、こうなりや氣が強ゝ、お前も今日は羽目をはづして飲みねゝ』
こ猪口を差出したが金助の視線は奥の方に注がれてゐる。
『おい、なぜ奥の方ばかり覗いてゐるのだ、お前の方が余ッ程泥坊猫のやうだぜ』
『なに、少し氣になる事があるからよ』
『なにが氣になるのだ……、』

思はず又七は金助の口元を見守る、落ちつき拂つた金助が薄笑ひをしながら

『八幡屋の娘が奥に隱れてゐやァしねいかと思つてよ』

『むう……』

又七の顏色はサッと變つた。

そしてぢいつと金助の顏を視つめてゐたが、やがて

『それぢやァ昨夜見たのか』

『さうよ、お前の擔いで行く荷の影に若い女の袖がちらりと見えたばかりさ』

一層、又七の顏はこはばつて行つた。

『そゝ、それを八幡屋の娘とごうして睨んだ』

『その時にはたゝ可怪しいと思つたばかりだつたが、今日になつて聞いて見りやァ馬道の質屋の娘がゆうべ驅落をしたまゝで今に行衛か知れぬさうだ』

あくまで落着き拂つた金助はさう云ひ乍ら煙草を吹かせてゐる。

それに引きかへて又七の態度は極端に亂れてゐる、稍して頷いた彼は

『判つた〳〵もう諍い事を云ふにやァ及ばねい、實はさつきからその相談をしやうと狙つてゐたが、お前の方からそう切り出してくれゝば却つて始末がいゝ、ごうだ金公おれの相談に乘つてくれるかい』

その言葉を合點したのか金助は

『昨夜も云ふ通り、だん〳〵寒空に向つて來て、直助權兵衛も面白くねいから、なにか商賣換へでもしやうかと考へてゐる所だ。その元手にもなる事なら、俺も片棒を擔ぐめいものでもねいが』

と少し小聲になつて

『そうして玉は奥の院に祭り込んであるのかい』

『まァ聞いてくんねい、そこが相談だ』。

と云ひかけて又七は起つて行つて緣先から四邊を見廻してゐる、金助も四邊に氣を配つてゐたが、やがて二人は又元の座に戻つて

『その相談は一体ごういふのだ、玉は握つてゐるのかよ』

『そりや握つてゐるには相違ねいが、俺も實は困つてゐるのよ、まァ聞きねい、生醉の折介につかまつてお前が行つてしまつた跡へ若い娘が跣足で馳けて來る、こいつァ的ッ切り身投げだと早呑み込に押へて見ると娘は身投げぢァねいさうだ、これには俺も頭をかいたよ』

思わず吹きだした金助が、

『そいつァ飛んだお茶番だつたな』

『まつたく飛んだお茶番さ、だが驅落者には相違ねい、しかも八幡屋の娘と判つたので、嚇し賺しつつ親切ごかしに勞つて、昨夜こゝの家へ連れ込んで來たのだ』

『お前もなか〳〵惡者だな、それからどうしたのだ』
『だん〴〵譯を聞いてみると、何所の家にもよくある奴で、若い番頭の留三郎とかいふ野郎と色になつた事が露はれて男は体よくお拂箱で一先づ請人の宿へ引渡されたが、娘の方ぢやァ思ひ切れねにので、家の金を持ち出して男の所へ逃げて行く途中……と、まァ紋切形の筋道よ、それから俺がどうしたと思ふ』
『さァ八幡屋の工面がいゝといふ評判だから、内々注進して褒美の金かな』
『むう、だれの考へも同じ事で、俺も初めはさう思つてゐたのだが、扨て此の家へ連れ込んでみると娘は年は若し、容貌はめつぽう好し、ふところには重さうな金財布を持つてゐる、かう三拍子揃つてみると色と欲で……だれにも魔がさすだらうぢやァねにか』
『そこが畜生の淺間しさか、そこで女を口説いたのか』
『まァそんな事よ』
『口説かれて素直に肯いたか』
『肯かねにな』
『肯かね方が當り前よ』
『當り前かも知れねにが、云ひ出した以上は男の意地で、自然と荒ツぽい仕事になる、女は泣き聲をあげて逃げ廻る、……』
『惡い芝居だな』
『こゝだつて野中の一軒家でもねにから、世間へ聞へたらこゝこわしだ、俺も仕舞には自暴になつてそこにある手拭で……』
思はず金助は座り直した。
『初めは猿轡の積りだつたが、つい手が廻つて……』
反撥的に絞める眞似をした金助は、
『遣つたのか』
『こう〳〵遣つてしまつたのよ』
さう云つて又七思はず身体をすくめた、金助は恟して
『怖ろしい事をするぜ』
『今更悔んでも取返しがつかねに、まつたく魔がさしたのだ』
急に金助は怖氣がついたのか、
『どうも飛んでもねに事になつてしまつたな、さうしてその死骸はどこに隱してある』
『奥の押し入れに隱してあるのだが、どうしていゝのか俺には思案がつかねにのだ』
と又七はぐつたりと溜息をして居る、そしてすつかり昨夜の出來事を吐き出してしまつた故か少しは氣安な態度にある又七に引きかへ、今度は金助の方がだん〴〵怯氣が附いて來て、果ては煙草入れなどを仕舞ひかける。

『おい金公、なんこか始末する工夫はあるめいかな』
聞かれて金助は考へてゐたが、氣味惡がりながら
『さア床下にでも埋めるかな』
『俺も一旦はそう思つてみたが、自分の住んでゐる床下に人間の死骸が埋まつてゐるこ思ふこ、ごうも好い心持がしねいからな、しかも自分が殺した女ぢやねいか、毎晩忌な夢でも見て喰された日にやァやり切れねい』
『だからそんなむごい事をしなければいゝじやねいか、俺も殺生を稼業にしてゐるが、まさか人殺をしようこは思はねい』
『誰が好んで人殺をするものか、これもお互ひの災難で今更なんこいつたつて、あこの祭りだ』
猪口を金助に差しながら、半は快活に
『おい金公、後生だから好い智惠を貸してくんねいよ、俺はいつまでも恩にきるぜ』
金助は又七より差された猪口を受取つて下におきながら
『そこでその娘はいくら持つてゐたい』
『百兩も持つてゐるかこ思つたらその半分も少し足りなかつた』
『なに五十兩にも足りねいのか』
『さうさ、四十二兩こ三分よ』
『四十二兩こ三分……妙に半端だな』
『大方そこらにあつたのを手當り次第に掴み出して來たのだらうよ、もうかうなつたから仕方がねい、その半分をお前に分けてやるから俺の味方になつてくれ』
『いゝ……』
こ躊躇してゐる金助の猪口に又七はおき注ぎをしやうこする、金助は手を振つて
『いやもう酒は止さう、澤山だぐ』
『だつてそんな相談はお互に醉はなければ出來ねい、お前は唯つた今、商賣換への元手になる事なら俺も片棒かつがふこ云つたぢやァねいか』
こ無理に金助に酒を勸める又七の顏は凄い程眞劍になつてゐる、そして又注がうこするが金助は猪口をうしろに隱してしまつた。
『いやもう酒は飲んぢやゐられねい』
『そんな事を云はねいで、今も云ふ通り四十二兩こ三分を山分けさ、屹度お前にやるよ、嘘ぢやねい、これを見ねいよ』
緣を飛び降りた又七が、そこに有合せの木片で四ッ目垣の裾を掘り返し八幡屋の娘が持つてゐた金財布を取り出して來た。
『さアごうだ、自分の手に持つてゐるのは不安でならねいからこりあへずあすこに隱しておいたが、……それ確かに四十二兩こ三分あるだらう……』

こ金を財布から振り出して金助に見せた。金助もつひ覗いてみて、
『成程、その位はありさうだな、山分けにすれば二十一両こ……一朱三分か……』
云ひつゝ欲しさうに眺めてゐるこ、
『さア遠慮せずに半分取りねゝ……』
今は大事な事を打明けた金助をごうにかしても自分の味方につけなければこ又七は躍氣こなつてゐる。金助は金は欲しい、薄氣味悪しで、むゝ、こいつたなり又躊躇してゐたが、
『あんまり遠慮する風でもねゝが……まア元の方へ隱しておいた方がよからうぜ』
こ云ひ切る、するこ吃度思案した又七はそのまゝ奥へ這入つてしまつた。
それに氣もこめず金助は矢張りそこにおかれた金に眼をこられてゐる、
突然。
『さア、度胸を据ゑて返事をしてくれッ』
グサッ！
『ゐゝッ？』
こ金助が振り向くこ怖しい顔付きで又七が片腕を脱いで出刄庖丁を疊に突き立てゝゐる。
『なんだぐ』
思はずあこすざりしながら
『こゞ……ごうするのだ』
金助の聲は打ふるゐてゐる。
ごつかこあぐらを掻いた又七が
『かうなりやァ一人殺すも二人殺すも同じ事だ。何も彼もしやべつてしまつた上で、お前に寢返り打たれりや萬事の破滅だ、サア、俺の味方になつて此の金を山分けにいくか、それこも俺の向ふへ廻つて此出刄庖丁を受け取るか、二つに一の返答をしろッ』
金助は恟りした。
『ゐッ、氣違ひじみた事を云つちやァいけねゝ、無暗に殺されて堪まるものか』
『俺はもう死物狂ひだ。誰彼の見さかひがあるものか』
こ尚も詰寄つてくる
成程又七の面には決然たる色がある
『あゝいけねゝ〳〵』
こうぐ〳〵金助は逃げ出そうこする、又七はその袖をつかんで緣先きに引きすゑた。
『さア、おれの味方になるか』
極度に怖れをなした金助が、聲をふるはせて、
『味方になつて、ごうしろこいふのだ』
『お前の顔を見て思ひついたのだが、お前は鰻かきが商賣で

そこらの川筋の事はよく知つてゐる筈だ、あの死骸をどこかの川へ持ち出して、人に見られねやうに流してしまつてくれ』

『あの死骸を……川へ流すのか……』

『お岩樣の芝居にもあるぢやァねゐか、隱亡堀でもどこでもかまわねゐ、そつと突き出してしまゐばいゝのだ、世間ぢや身投げだと思うだろう』

おゝ怖ろしい事を云ふ奴だと、金助限りない恐怖に全身をおのゝかしてゐる、

『やつぱり厭かよ、どうしても不承知か』

と又七は出刃庖丁を取つて金助の鼻先きにつきつけた。

『にゝあぶねゐ、待つてくれ、待つてくれ』

『ぢやァ承知するか』

と迫られて、もう仕方がないと思つたものか

『うむ承知だ』

金助の返事を聞いて又七が捉へた手をはなし、そして又もや左右を見廻して、

『おいきつとだな、だますんぢやァあるめゐな』

『大丈夫だよ、お前も疑ひ深いぢやねゐか』

『疑ひ深くもなるぢやねゐか、まかり間違ゐば命の瀬戸だ。さァその金を半分取つてくれ』

と金を差し出す、金助はそこまで來るこもう空ッ切り意氣地がなく、その金を手にする事もなし得ない、

『金はまァあこからでもいゝぢやァねゐか、馬鹿に氣が短けゐな』

『氣が短かくもなるサ、さァ早く取つてくれ、金を渡さねゐうちは本當の味方でねゐやうな心持がして、どうも安心がならねゐさァ取つてくれといふのに』

と急き立てる、

『取るよ、取るよ、急いぢやァいけねゐ』

そこで金助はよんどころなくその金を數へて自分の手に取つてしまつた。それをじつと見つめてゐた又七は、

『サァ早くふところへ入れてしまへ』

『どうもうせるゐな』

こうぐゝ又七から八釜しく急き立てられるものだから金助はその金を手拭にくるみてふところに入れる。それを見極めておいて、

『そこでだ、どこへ持ち出して行く』

『さうよな、……やつぱり綾瀬の上あたりだらうな、餘り遠い所ぢやァ、佛を擔いで道中が難儀だ、所で入れ物はなにがいゝかな』

『さつきから考へてゐるんだが、米俵ではどうだらう』

『違ゐねゐ、そうだ〳〵』

『ぢやァ早くやつてくれ』

『冗談云つちやァいけねに、まだ本當に日が暮れもしねにのに、うつかり持ち出せるものか、それに今夜は意地悪く天氣が好さそうだ』
『おまけに十三夜だ』
と又七は舌打をして、
『月が皎々と冴へてゐたんぢやァこの仕事はちとむづかしいぞうだに、二三日延ばしちやァ』
『途方もねに事云ふな、あんなものを一日でも打つちやておかれるものか、日が暮れ切つたらすぐに表に持ち出してくれ、おい金公、俺は全く恩に着るよ』
その時、しきりに何か考へてゐた金助が、
『ぢや俺はそれまでにちいと行つてくるぜ』
と云ひすて、突然緣に降ようとしたものだから又七は恟りした、すぐその袖を引きつかんで
『おい〳〵何所へ行くんだ、逃げちやァいけねに』
『なァに逃げるのぢやねに、今の裡に入れ物を工面して來なければなるめにぢやねにか』
『むゝ米俵か』
『まづそれを見つけて來なけりやならねに』
聞いて又七も漸く安堵の胸をなでおろし、
『見つけたらすぐに歸つて來てくれよ、あんなものを奥において、おれ獨りでゐるのはごうも心持が好くねにからな』
『なァに早く行つてくるよ』
『なるたけ早く歸つてくれ、賴むぜ』
と半哀願するやうに云ふ又七の言葉を受け流して、萬事呑み込んだといふ風に金助は手ぶらのまゝでそこを出て行つた
それを見送つてゐた又七は自分一人になると、又限りない不安と懊惱とに襲はれ始めた。
聞にくるともなしに聞にてくる木魚の音が、尙も又七の恐怖觀念を濃厚にして行つた。
漸く日差もにぶくなつたやうである、
『あいつ、いやにそゝくさしてゐやがるな』
と呟き乍らふと金助の持つて來た鰻樽に目を附け
『小荒いのが二三匹だといやがつたが、どんなのを引つかけてきやがつたか』
何心なく又七が樽の中に手をさし入れてすくひあげようとすると、樽の中の鰻が又七の手にからみついた、
『あッ、こりや鰻ぢやねに、蛇だ〳〵』
恟りした又七は夢中になつて、その鰻をもぎ放し樽の中に投げ込む、
『金の野郎め、飛んだ奴だ、だがあいつだつて商賣だ、まさか蛇と鰻を間違にやしめに、やつぱり俺の見違ひかな』
再び樽の中を覗かうとしたが、何んだか薄ッ氣味惡くなつてそのまゝ躊躇してゐる。

『にゝ、こんなものは見ねに方がいゝ』
と匆々に手を洗つた又七が元の座に返りて又手酌でちびりちびり飲み始めた。
『今朝からいくら飲んでもほんとうに醉はねにのが不思議だなんでもかういふ時には無暗に飲んで〳〵魂をすつかり醉はしてしまわなけりや俺の命が續きさうにもねに』
と自暴に呷りつゞける、
釣瓶落しの秋の日は早や四邊をたそがれの色に包んでしまつた。
肌寒い風が輕く雜草を撫て流れて來る
又七は思わずぞつとしたやうに肩をすくめた。
『あゝ薄ら寒くなつて來た、俺一人になつたら急に暗くなつたやうだ、早にかも知れねにが、いつそ灯りをつけてやらう、あゝごうも陰氣でいけねに』
と押し入れの傍においてある行燈を引きよせて火を點けるると、何が聞にたのか又七は俄に奥の方へ耳を傾けた、
『おや奥の方でなにか音がするやうだぞ、あゝ押し入れの戸が開いたやうだぞ』
思はず起つて行きかけたが、ごうも氣味が悪いので躊躇つた。
『金の野郎、ごうしやがつたかな』
氣味が悪くつて仕方がないのでしきりに金助の歸りを待つてゐる、そして怯々しながら又其處へ座り込んだが、ごうも落ちつかない。
木魚の音が無氣味に聞にて來る。
するこ奥の破れ障子が音もなくすうこ開いたかこ思ふこ人の影らしいものがボンヤりこ浮き出した。又七は見るこもなしにその方に眼をやるこあゝッ、それは昨夜自分が手にかけて殺した八幡屋の娘ではないか、しかも昨夜こ同じ姿ではあるが、色蒼ざめて髪は亂れてゐる。
又七はギョッこした、もう生きた心地もしない、娘は次第に行燈の側に進み寄つてくるではないか、
堪まらなくなつて又七が無意識にそばにあつた出刃庖丁をこつて身構へた、
『そこゐるのは誰だゞ、あッ八幡屋の娘ぢやねにか、あゝかんにんしてくれ〳〵悪かつたにゝ側へ來ちやいけねに、そばへ寄つちやいけねにこいふのに……あゝ』
又七は無暗に出刃庖丁を振り廻す
『なに俺を執り殺す……おゝその恨みは尤もだが、俺はもう後悔してゐる、だからお孃さんごうか勘辨しておくんなさい、この通りあやまります〳〵』
尚も狂ひ廻つてゐた又七は俄に出刃庖丁をからりこ投げすてゝそこへべつたり座り込んでしきりこ詫出した。さうかこ思ふこ又起ち上つて室中を逃げ廻る、娘は無言のまゝ追ふや

うに附け廻してくる。
夢中になつて又七が縁より轉げ落ちると、娘は柱に縋つて恨めしさうに睨む
『にゝ執念ぶけに、もうかんにんしてくれこいふのに……あやまつた〳〵、どうぞ赦しておくんなせに』
娘の恨めしさうな顔が又近寄つてくる、死物狂ひになつた又七が逃げようとして四ツ目垣の上に倒れかゝつた。
すると垣がばらりとこわれてその折れた竹の切先きが又七の脇腹に突き立つた。
『あッ』
と叫んで尙もその竹の突き立つたるまゝ脇腹を拘へて轉げ廻つて上にあがつて奥の方へ逃げて行く。
娘は物凄くそれを笑つたと思ふと、すうッとそのまゝ消にてしまつた。

【三】

極度の恐怖と懊惱に死物狂ひになつた又七は脇腹の深傷をも忘れてよろめきながら、家の裏手にある蓮池の畔に辿りついた。
けれどもまだ眼に見にぬ物に襲はれるのか
『まだ追つかけて來やがる、どうも執念深い奴だ、もういゝ加減にかんにんしてくれこいふのに、……俺がこんなにあやまつるるのが判らねにのか……にゝ畜生ッ！ここまで俺に附いて來やがるのだ、にゝ寄るな、寄るな、寄つて來ちやいけねに、畜生、畜生』
眼は血走つてしまつて、着物は破れ、それに傷口から流れ出る血汐に一層物凄く彩ごられてゐる又七はよろめきつゝ狂ひ廻つてゐたが、池のそばへ來た時に思はず足を踏みすべらして池の中へ落ち込んだ。
それでも夢中になつた又七は泥だらけになつて又這ひ上つて來た。
『おい金公はどうした、おい金公、早く來てたすけてくれ、〳〵……あゝもういけねに、あゝ苦しい、これぢやとても生きてはゐられねに』
妄想に惱まされ、狂ひつかれた又七は、どつかと其場に座したかと思ふと、
突然！
持つてゐた竹切れを取り直して自分の脇腹に再び突き立てた。
すると此時、
向ふから二三の提灯の火が此方差して急いで來る、見れば金助が先きに立ち八幡屋の店の者を二人と番頭の惣兵衛を案内してやつて來た。

『おゝこゝにゐた〳〵』
こ又七の姿を見つけ出して傍によるこ、ぐつたりなつてゐるから、
『おいッぐうした〳〵』
提灯の火を借りてすかして見るこ血に染つてゐる。
『ヤッ、こりや大變だッ』
皆の者も驚いて各自提灯を差しつけた。
『おやッ、この人は血だらけになつて、……もう死んでゐるやうだが……』
こ番頭の惣兵衛はもう打ふるゐてゐる、
『これが風鈴蕎麥屋の又七ですか……ぐうしてこんな事になつたのか』
こ又七の耳元に口を寄せて金助が、
『おいぐうしたんだよ、しつかりしろ、しつかりしろ、俺だよ、金助だよ』
聲を限りに呼んだものだから漸くそれが聞ゐたらしく、
『金助か、俺はもういけねゐ』
『いつたいこりやぐうしたんだよ』
『八幡屋のが……俺を執り殺しやがつた』
『ゐゝッ娘に執り殺された……？』
金助はぞつとした
『手前も掛り合ひだから用心しろよ』
『なんで俺が執り殺されるものか、お前の味方になるのは危ねゐから、米俵を買ひに行く振りをして大急ぎで八幡屋へ内通して來たのだ』
『嘘をつけ、てめゐも今に執り殺されるぞ』
最早や斷末魔である、
『なにしろ早くお屆けしなければなるまい』
こ惣兵衛は店の者を見返つた。
その中の一人は心得て早速引き返してその塲を去つて行く
それこ同時に蓮池の向ふ側から仕事師の三吾が八幡屋こかいた提灯を持つて、それに店の者らしい二人の若衆が若い女を介抱しながら出て來た、
惣兵衛はそれを見て驚いた、
『やッ、こりやお孃さんだッ』
三吾は、
『皆さん、安心して下さいやし、お孃さんは生き返りましたよ』
金助は尙更恟りした。
『なに生き返つた、……本當かゐ』
こ半信半疑、皆驚いて娘を見守つてゐる。
『おゝこの通り生きてゐるのだ、お前の話ぢや奥の押し入れに投げ込まれてゐるこいふから、直ぐに家さがしをしてみるこ、丁度息を吹き返した所さ、それから水を呑ませて分

抱して、今こゝへ連れて來たのだ』
三吉の話を聞いて並び居る者は餘り意外な出來事に尙更驚かずには居られなかつた。
すると生き返つた娘は
『風鈴蕎麥屋にだまされて、こゝの家へ連れ込まれ、手拭で咽喉を締められたまでは覺えてゐるが……それから先はなんにも知らず押し入れから誰かに拘へ出されて、はじめてハッと氣がつきました』
これで惣兵衛も安心した
『まァ〳〵それは何よりお目出度い事でございます。頭も御苦勞〳〵これで全く安心しました』
店の者等はそれ〴〵喜びの言葉を添へてゐる。
餘りの意外に呆然としてゐた金助は、
『いや思ひつかねえ事もあるものだ』
と再び又七の耳に口をよせ、
『おい〳〵誰もお前を執り殺しやしねえ、八幡屋の娘はちやんと生き返つたつよ』
大聲で云つて見たが、もう聞えぬらしい。
惣兵衛は
『娘御がこうして無事に戻る以上、こつちも店の暖簾にかゝはる事だから内分に濟ます法もあつたものを……はやまつた事をしてしまつたなァ』
とぐつたりなつて苦しい息を吐いてゐる又七の姿に心から憐憫の眼差を注いでゐる、
『全くはやまつてしまつたな、おい又七、八幡屋の娘は死にやァしねえよ、判つたか〳〵』
こと切ない裡にごうにかして此の奇蹟的ともいふべき意外を知らせてやり度いと金助は大聲あげて呼んでみた。あくまで怨恨の恐怖と襲はれながら斷末魔の苦しみをしてゐる又七にかすかながらも金助の聲が通じたのか
『娘は俺が殺したに相違ねえ、俺も早く殺してくれ、一ト思ひに執り殺してくれ』
と苦しい息で唸つたかと思ふと、そのまゝぐたりと突伏してしまつた。
金助も惣兵衛も、他の者等も只呆然としてゐるのみであつた、
枯れかゝつた蓮の葉が夕べに吹く風に騷いでゐる。
又遠くからきぬた打つ音が聞えて來た。

雨蓼

淺い春の夜の京阪電車は、淀、八幡、橋本の畔道から風が送る冷たい梅の香を衝いて宇治川の急流と爭ふ如く眞一文字に南へ〳〵〳〵——

昨年二月十日夜のこと。

「吉右衛門はねう役者やわ」

「ウン、鳩の平右衛門みたいな詰らぬ狂言まで、面白う觀せたて」

まだ二十歳を越したばかりの銀杏返しの奇麗な孃さんと、前髪ならぬ蔦が鷹なの醫を其儘に酒顚童子の再來よろしき親爺の二人が我輩の筋向ひに腰かけて居る。親爺は目下絶對に流行せぬ鬘まみれの八の字髭をぴんとひねつた。

「吉右衛門を觀てると肩が凝る、顏も手も足も耳も眼も鼻も口も髪も爪も、五臟六腑體一杯精一杯芝居演るよつて觀てゝも肩が凝る。毛剃も佳かつたが、どうや、あの由比ケ濱の重忠は活きてたな、赦免狀を斯うもつて」

「そりやさうだんが、活きてはるもん」

「そやない、魂がこもつてる」「判かつてま」孃さんは涼しい眼で父の顏を覗くやうに見上げた。

「あて、折角京まで往て、曾我や鳩の平右衛門や、毛剃みたいなもん嫌だす、同じ東京芝居なら、辯天小僧か切られ與三か、三尺ものを觀せて欲しいわ」

親爺は娘の一言を全く誤認した。

×

「さういふ狂言を若い娘が觀たら毒や、大体おまへにはまだ芝居の事判からへん、吉右衛門は角力でいふたら、そやな、マア十年前の太刀山やな、なまけず巫山戲ず、朝摩化さず力と根と魂で押すといふ取口やそやよつて馬盥、清正、長兵衛みたいな狂言が嵌まる、孰つちかといふと柔かな狂言は不得手や」「其麼事あら仕まへん、梅由かて演やはるわ」「今を初めの旅衣か、お前それ何處で觀た？」「さうかて新聞に載つてましたもん」「ヤレ〳〵油斷がならん」親爺は酒臭い息を吹きかけて孃さんの肩を叩く、銀杏返しはふつさりと搖れる。髪が氣になりガラス窓にうつして白魚の樣な手で鬢を撫で上げ周圍を憚るもの、如く左右へ眼を流す、親爺は赤銅の樣な毛脛を無造作に突き出した。

「吉右衛門は男前より何よりかより力で押す役者やで、さう〳〵、去年の正月に今觀て來た南座で一の谷を演りよつた、齒切こそ惡いが、ねばり氣のある底力の籠つた聲で、此麼顏して」親爺は蓬の如き髮をまた捻つて番附をクル〳〵と卷き斜に構へ、咳一咳後へ反り返つて吉右の物眞似。

「何んとか何んとか何んとやら、熊谷是れにひかへたり、返せ、戻せ、うわわいゝ、うわわわいいゝゝ、うわうわわうゝゝゝいゝゝヒ、、、ッ、扇をもつてさし招けば……」

唾が散るので隣の客は肩を拂ふ、車中の視線は一齊に親娘へ集中、失笑を禁じ得ず運轉手もチヨコ〳〵後ろへ向く、令嬢は瓢の種の齒を出して微笑しつゝ制止する、まだ本心を失うまでに醉うて居ぬ彼は漸く地聲になつた。

「吉右は團十郎張りの芝居をする男やで、ソレ梅田へ來て大森彦七を演た役者」「そんなん妾知らんわ」「コレは失禮、まだ御生あらせられん昔の事かハッ、、、ッ一

×

娘は體裁惡く圓顔をショールへ埋めて眠れる如く裝うた。舌にかけては故人文三、圓朝の再來を懷はすさしもの酒顚童子も今は附き穗なく大磐石然と不動の姿勢をとつて四邊を睥睨してゐたがいつの間にやら天狗鼻から雷のやうな鼾をかき出した、電車は息の根も凍るばかりの北河内郡の寒夜を疾風の如く走る。

×

「天滿橋ッ、終點」車掌は寒むさうに叫ぶ親爺は屁古垂帶を締め直した、娘は衣擦れの音ゆるやかに立上つて可愛らしい口を彼の耳に寄せ「大分醉うてはりますよつ、御本宅のお迎へは返して今夜はあてとこへ……」酒顚童子は泥を下げた。

凡眼には解しかれて居たが、此二人は戸籍法が容るさぬ夫婦であらう。

中座御觀劇の
紀念として
幕間に
晴れやかなお姿を！
中座三階に完備せる
電光寫眞を
御利用下さい
妾と彼人と
彼女と私と
が
一つカメラに……

編輯後記

◇久方振で吉右衛門が來るといふので編輯室の各々は吉右衛門論に無宙になつてゐる。それほどまでに吉右衛門を待ち焦れてゐる。

◇わが敬愛なる讀者諸氏もおそらくそうであらうと思ふ。

「石切梶原」は今春成駒家が滿員、札止めをした丈けに吉右衛門の此度の上演に一倍期待がかけられるといふものである

◇こんどの吉右衛門號はすべての材料が東京本位になつてゐるので思ふことがすぎて、仕事が伴はなかつたことは遺憾な極みである。

◇其かはり、當代文士諸氏の錚々が筆を揃へて感想を寄せて下さつた盛觀は他誌の追隨を許さぬ本誌の權威だと誇りたい

（けいざう）

◇これでどうにか雜誌「中座」も第三輯吉右衛門號を出す事が出來た。誰かがこの雜誌も中座するだらうと惡口を言つてゐたが、それどころではなく來月には「中座」として南座のために顏見世號を出すことに內定してゐる位である。

◇こんどは脚本が掲載されなかつたので寂しかつたが、東京からは額田六福氏、川尻清潭氏、落合浪雄氏、京都からは林久男氏、竹內勝太郎氏、當地では高安吸江氏、木谷蓬吟氏、石割松太郎氏、高原慶三氏、富田泰彥氏外諸氏が執筆されて眞面目に研究されたものが多くあつて立派な雜誌になつたことを悅んでゐる。岡本綺堂氏の脚本「風鈴蕎麥屋」が掲載出來なかつたのと毎號執筆して下さる高安月郊氏が東京の方に引越される際で原稿を頂けなかつたのは誠に殘念であつた。

◇次號からは讀者倶樂部といつた欄を設けて愛讀者諸兄のために開放したいと思つてゐる。眞面目な劇評や感想を投稿をして下さるやうにお願申上げて置く。

◇末筆ながら寄稿家諸氏、本誌のために內助して下さつた本社の諸兄に深謝す。

（うばたに）

大正十五年十一月三日發行

雜誌『中座』第三輯

吉右衛門號

□誌代は前金お拂込に願ひます

□郵券代用は一割增にて御註文を願ひます

・一部 定價 金參拾錢・

大正十五年十月三十日印刷

大正十五年十一月三日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹合名社內

編輯者 姥谷久一

發行者 成山桂三

大阪市東區南農人町二丁目五

印刷者 上田元吉

大阪市東區南農人町二丁目五

印刷所 中安製版印刷所

雜誌「中座」發行所

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹合名社

電南 一二四〇 六六六五 番

レコードに廣告が出來る

今度新しく生れた「レコード廣告」は一時的の廣告だけではなく、永遠に各家庭に保存される事に依つて其の廣告を徹底させる事が出來ます。此の廣告に利用する「レコード」は、目下好評を博して居ります。われぬ「レコード」で有ります。レコードとしては世界的理想を實現せるもので殊に圖案や、文字がレコードの表面に現はす事の出來る事は、恐らく本レコードのみの持つ特徴で有ります。又圖案や文字は特別の方法を以て印刷されたものですから消ゑません。どうか此のレコードを最も大事な廣告に御利用下さい。

發行所

大阪西道頓堀住友ビルヂング五號室

京都蓄音器商會大阪支店

廣告レコード部

電話 櫻川 三一六二番 三三二六二番 三七二四番

廣告の種類は連繫廣告と個人廣告の二種です。
詳細は御知せ次第御通知致します。

純無鉛

レート白粉

東京・大阪　平尾賛平商店

中座の御觀劇は
吉例のレートデーに

レートデーは毎興行の二日目です
レート化粧品の美しいおみやげを
特等一等のお客様に進呈いたしま
す、御觀覽料は他の日と同一です
詳細は新聞廣告を御覽下さい